
表と裏 紅の月

ゾフィア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

表と裏 紅の月

【Nコード】

N7120K

【作者名】

ゾフィア

【あらすじ】

この世界には表と裏がある。

わかりやすい例えを挙げるならばコイン、紙、カード…。

万物は表と裏で構成され、その表裏は物のバランスを維持する。

そして、それは人も同じ。

人にも当然表と裏は存在する。表の顔、裏の顔…。

それが良いものであれ、はたまた悪いものであれ、その表裏もまたその人物のバランスを維持している。

…そしてそれは、この”世界”にも存在する…

私立零命学園：そこに通う俺、篠原俊樹は非公式ながら”依頼部”の部長を務めている。いわば”何でも屋”だ。基本的に面倒な依頼ばっかやってくるわ仕事は滅多に来ねえわで退屈だったんだが：俺たちの”本命”はそんな奴らじゃねえ。：裏の世界に巢食う”妖魔”の類。俺たちはそんな異形を相手に今日も戦っている…。

序章 「垣間見エル表裏」(前書き)

”平凡”ってすばらしいものだと思う。

だが私の”平凡”を、彼らはあっさりと奪い去って行ったのだった
…。

序章 「垣間見エル表裏」

この世界には表と裏がある。

わかりやすい例えを挙げるならばコイン、紙、カード…。

万物は表と裏で構成され、その表裏は物のバランスひょうりを維持する。

そして、それは人も同じ。

人にも当然表と裏は存在する。表の顔、裏の顔…。

それが良いものであれ、はたまた悪いものであれ、その表裏もまたその人物のバランスを維持している。

…そしてそれは、この”世界”にも存在する…

私がこの男と出会って最初に思ったのは、”後悔”だった。

私は特に刺激的な毎日を望んでいるわけでもない。勉強も運動もそこそこできたし、それを退屈だなんて感じたこともない。

なのに、あの男はそんな私を一瞬で”非日常”へと引きずり込んだのだった…

私の名前は九条美里くじょう みさと。私立零命高校れいめいの2年生だ。

零命高校はレベルはそこそこ、個人個人の”個性”を大切にするということで基本的に自由な校風で人気だった。

私は成績も運動もそこそこという平凡な高校生だが、別にそれを苦に思ったこともなかった。

世の中平凡が一番。私はこんな自分が好きだった、のだが…。

「…っ」

不意に背後から視線を感じて振り返る。だがそこには誰もいない。隠れられそうな場所も特になかった。

「…またか…」

最近、私の周りで”異変”が起こりはじめている。今みたいに誰かの視線を感じたり、不自然な物音が聞こえたり…。それも学校の近くでのみ起こっている。

「…疲れてるのかな…？」

でも、私はそれを特に気にすることもなかったのだ…。

「おす、おはよう、美里」

「ん。おはよう」

教室に入っただけで1人の男子生徒が話しかけてきた。彼は藤原亮ふじわらひやう。昔から家が近所という、いわゆる幼馴染だ。

「なあ、今日数学のノート見せてくれない？ 課題忘れてさ…」

「…1つ貸しね」

情けない顔をする亮に、私は渋々ノートを渡した。

「サンキュー！ 助かるわ」

亮はそのまま席に戻っていった。

「…ん？」

すると、また視線を感じた。だが、今回ののは今までのとはなんだか雰囲気違った。

振り返る、だがそこには案の定誰もいなかった…。

「やっぱり…おかしいよね…」

今日は特に違和感を感じる事が多かった気がする。視線を感じたり、不自然な物音を聞いたり、人の気配を感じたり…。

今は昼休み。私は席に座ってお弁当を食べていた。

今までは稀にしか感じなかった”異変”が、今日に限って特に頻繁に感じられた。

もしかして…幽霊とかそういう類の話なんだろうか？

「そんなこと…あるわけないわよね…」

私はそういった類の話は基本的に信じないタイプの人間だった。

「うん…気にしないでおう」

私がそういつてお弁当に再び箸を伸ばそうとした時だった。

「何を気にしないつもりなんだ？」

「え……」

目の前に、1人の男子生徒がいた。私のクラスでは見ない顔。だらしなく着崩した制服。黒よりの灰色の髪。顔は整っているが……なぜかその口にはトツポ。

トツポ……？

「お……い？ 聞いてっか……？」

その男子生徒は私の目の前で手をひらひらと振った。

「あつ……え……誰よ、あなた」

私がそう聞くと、その男子生徒は

「俺か？ 零命高校2年C組。篠原しのはら俊樹としきだ」

2年……同じ学年か……。でも、私は別に彼のことは知らないし、初対面のはずじゃ……。

「……私に何の用？」

周りの生徒も何事かとこちらを遠巻きに見ていた。正直居心地が悪い。

だが、彼……篠原はそんなことも構わず

「いやな。なんか困ってるっぽかったからさ」

そんなことを言った。

確かに困っているが……これは人に相談できるものではない。

そう言おうとしたときだった。

「例えば……急に視線や気配を感じたり、不自然な物音がしたり……とかな」

篠原の言葉に、私は眼を大きく見開いた。

「あなたっ……！ あなたの仕業だったのねっ……！？」

私は大きく身を乗り出して、彼の襟首を両手で掴んで揺さぶった。

「ちよっ……！ 違う違う違う！ やめっ……吐くって……！」

篠原は必死にそう言っ止めようとする。実際顔が青くなってきたので途中でやめた。

正直まだ苦しそうだ。

「で…違うつてどういうことよ。何か知ってるんでしょ？」

私がそう聞くと、篠原は内ポケットから何かを取り出した。

「ほい、コレ」

それは名刺だった。

「高校生が名刺…？」

特に不思議なところはない…そう思ったのだが、私はその名刺のある一点に注目した。

「ねえ…この部活のところの”依頼部”ってなによ…？」

私の質問に篠原は不敵な笑みを浮かべると。

「部室の場所は書いてあんだろ？ 活動時間は基本的に年中無休だから、いつでも来な」

そう言つて、立ち去ろうとする。

「なっ…！ ちょっと待ちなさいよ！」

まだ質問の答えを聞いていない。だから私は篠原を呼び止めようとした。

だが篠原は振り返ると

「困ってるんだつたら協力するぜ？ そういう仕事だからな」

それだけ言つと、教室を出て行ってしまった…。

「…つて。ここ、ほとんど人が来ない場所じゃない…」

放課後。どうしても篠原の意図が知りたくて、私は”依頼部”の部室の場所へ向かっていた、のだが…。

この辺りは使われてない教室や倉庫が集中している零命でも特に人が無い場所だった。

人はここを”零命のスラム”なんて呼んでたっけ…。

だが実際この空き教室はイベントなんかではよく使われるので、特別このあたりは危ないとかそういうわけでもなかった。

「ここか…」

私は、そんな場所のさらに奥、本来は空き教室として倉庫代わりに使われている教室の前に着いた。

なるほど…確かに扉には”依頼部”の看板があった。

私は扉に手をかけ、意を決すると…。

「…っ」

その扉を、開いた。

「あっ！ お帰りなさい、俊樹さん　あれ？　どちらさまですか？」

そこには、2人の女子生徒がいた。1人は私の姿を見ると不思議そうに寄ってきた。

もう1人は私の姿を一瞥しただけで、そのまま目の前のパソコンのキーボードを叩いていた。

…というか、この2人は見覚えがある。確か…

「…2人とも、去年のミスコンに出てたわよね？」

「あ…確かにそうですね」

去年、零命高校の文化祭でミスコンが開催された。男子生徒全員にアンケートを取り、全校生徒から自分と同じ学年からそれぞれ数人の女子生徒を選ばせ、その上位数十人が強制参加というなんとも迷惑なイベントだ…しかも毎年恒例なのが忌々しい。

私もなぜかそれに参加ということになってしまい。すごく恥ずかしい思いをした。で、そのときに彼女たち2人の姿もあった。たしか

名前は…

「坂本奈々美さかもと ななみさんと…朝比奈霞あさひな かすみさん…だけ」

「はい。そうですね」

そう言っつて。目の前の人懐っこそうな女子生徒　坂本さんは笑顔を浮かべた。

あの時は間近で見たわけではなかったが…確かに可愛いと思う。クリーム色の長い髪に、頭の後ろで結ばれた大きなリボンが特徴的だ。

「ほら。霞さんもご挨拶しないと」

そう言っただけで、後ろでキーボードを叩いていた女子生徒を呼んだ。

彼女 朝比奈さんはこちらに小さく会釈しただけで、また視線をパソコンに移した。

物静か…というよりは無口の部類に含まれるだろうか、藍色のショートカットに、眼鏡がそのイメージをさらに強くさせていた。

坂本さんは無愛想な朝比奈さんを見て慌てて

「あのっ…すみません！ 霞さんって人見知りがすごくて…」

そんなフオローをした。私はそんな坂本さんの様子がおかしくて、思わず笑うと

「大丈夫よ…。私は九条美里。よろしくね」

そう自己紹介した。坂本さんもつられるように笑って

「はい。よろしくお願ひします。美里さん」

そう言ったのだった。

「それで…美里さんはここに何か御用ですか？」

しばらくして坂本さんが聞いてきた。

「ああ…そうそう。篠原俊樹って男子生徒にこのこと紹介されたんだけど…」

それを聞くと、坂本さんは急に詰め寄ってきて

「じゃ…じゃあ！ お客さんですか!？」

そう聞いてきた。すぐく目がキラキラしている。

「え…お客って?」

「俊樹さんの紹介で来たんですよね？ 何かお悩みですか？」

「あ…」

なるほど。だから”依頼部”か…。

「…ええ。お客…かしらね」

私がそう言つと。坂本さんは嬉しそうに微笑み

「じゃあ、こちらへどうぞ」

そう言つて奥の椅子へと案内してくれたのだつた…。

「お茶を淹れますね」

そう言つて坂本さんは立ち上がり、奥へと歩いていった。

「…なんか…いろいろあるな…」

改めてこの部屋を見回すと、いろんなものがあつた。

もともと家庭科室とか美術室みたいな特別教室だったのか、水道がついており。なぜかその隣にコンロなどがおいてある簡易キッチン。タンスのような家具に、校長室の椅子と机…。

そういえばそれ以外の机も職員室で使われてる先生の机のような…。

「おまたせしました」

そんな風に部屋を見ていると。坂本さんがトレイにお茶を乗せて戻つてきた、が…。

「どうぞ　　つて…キヤアアアア!？」

こけた!　当然ながらお茶はこぼれてしまった。

「うう……すいません…」

涙目で坂本さんは謝る。何も無いところでこけた…よね?

「あ…大丈夫よ。坂本さんも大丈夫?」

私は慌てて坂本さんに駆け寄る。

「…大丈夫です…」

精神こころの方はあまり大丈夫ではなさそうだが、とりあえず怪我はなさそうだ。

「とりあえず片付けましょう…」

私がそう言つて手伝おうとした時だつた…。

「まったく…お前はなんでそうサボるんだよ!」

「やだなあ…俊樹君。僕は”調査係”として職務をまっとうしていただきますよ?」

「ほう…?　仕事も無いのに”調査”とは仕事熱心だなオイ。いつもそのくらい頑張ってくれると俺も嬉しいんだがなあ?」

「アッハッハッハッハ。まったくですねえ」

そんな声が聞こえて、誰かが部屋に入ってきた。振り返ると2人の男子生徒。片方はさつき覚えたばかりの顔だった。

「お。来てくれたか」

「おや。お客とは珍しい」

「…だから客が来るって言ったろうがよ。聞けよ人の話」

篠原の隣にはもう1人男子生徒がいた。…制服が男子のだし、男子生徒よね？

そう思うのも、その彼は白よりの灰色の長い髪に、中性的な顔立ちをしていたからだ。常に笑顔を浮かべており、一瞬女性かと思った。

「うう…俊樹さあ〜ん」

私がそんなことを思っていると。坂本さんが情けない声で篠原を呼んだ。

「ん…。…奈々美…また転んだのか…」

「やれやれ…仕方ありませんねえ。まあ、それが奈々美さんらしいのですか」

2人は坂本さんの近くに来ると、慣れた手つきで片づけを始めた。

「オイ霞。それとお前も手伝え」

「え？…ええ」

「……わかりました」

それに私と朝比奈さんも加わる。正直、朝比奈さんが手伝うのは意外だった。

片付けも終わり、椅子に座る私の前には篠原、坂本さん。そしてあの中性的な男子生徒（？）がいた。

朝比奈さんは片付けが終わると、また席に戻ってしまった。

「さて…改めて自己紹介しところか。まず俺は篠原俊樹。この”依頼部”の部長だ」

篠原は口にくわえたトッポを口にに入れて食べ終わると。またポケットから短く折られたトッポを口にくわえ…って、まだトッポあるんかい！

「で、こつちが依頼部”接待係”の坂本奈々美」

紹介された坂本さんは頭を下げて

「よろしくお願ひしますね」

と言った。

「で…コイツが依頼部”調査係”の久藤晃くわいひびな」

あ…やっぱり男子生徒か。そういえば彼はさつきから木刀のようなものを左手に持っているんだけど…剣道でもやっているのかな…？

「よろしくお願ひします」

久藤君は笑顔を崩すことなくそう言った。

「ええ。よろしく」

私も笑顔でそう返した。どうやら礼儀正しい性格のようだ。

「で、向こうにいるのが依頼部”情報係”の朝比奈霞」

「…よろしくお願ひします」

朝比奈さんはそう言つて会釈した。

「…私は九条美里です。よろしくお願ひします」

私も自己紹介すると、頭を下げた。

「ああ、そうそう。俺たちは全員2年だ。俺と晃がC組。奈々美が

A組。霞がF組」

零命学園は生徒の人数も多く。1学年にA～G組までである。ちなみに私はB組だ。

「で。この”依頼部”は簡単に言えば”何でも屋”だ。”便利屋”

とも言つな。大掛かりなことから個人的な悩みまで、依頼とあらば

何でも解決するぜって感じ」

自己紹介も終わり、篠原は簡単にこの部活のことを説明し始めた。

「…ねえ？ この部ってちゃんと許可は？」

ここは一応”部”のはず。なら学校の許可が必要なんだけど…。

だが篠原はさも当然という風に

「あるわけねーだろ」

と、即答した。

「非公式!? だからこんなにひっそりしたところにあるのね…」
確かにこんなに奥まったところなら非公式でも部室にできそうだ。

「じゃあ、ここにあるものは…?」
恐る恐る聞くと…

「霞が学校のデータにハッキングして注文させた。学校の名前でな」
…ハア…」

どうやらとんでもない人たちに関わってしまったらしい…。私は少し後悔し始めていた。

「…”依頼”なら報酬がいるんでしょ? …お金なんてそんなにないわよ…?」

だが、篠原はそんな私に首を横に振って

「報酬はお金の時もあるが、別に俺たちは金のためにこんなことやつてるわけでもねーしな。今回はタダでいいよ」

「え…?」
そんな篠原の言葉は意外だった。

「…こつちのミスでもあるしな…」
…?」

「いや、何でもない」

篠原はなにか呟いたが、その意味は私にはわからなかった。

「まあとりあえず話してみる。そのためにここに来たんだろ?」

「…わかったわよ…」

こんなこと話してもしょうがないとは思ったが、いつそ誰かに話して楽になるうなんていう半ば投げやりな考えで、私は”異変”のことを話し始めた…。

「…なるほど。OK。こつちの方針は決まったな」

話を聞き終わると、篠原は納得したような顔で立ち上がった。

「え…? ちよっと。どうするつもりよ?」

「何とかするんだよ。つまりはその”異変”をどうにかすりゃいいんだろ?」

「そうだけど…」

そもそもあんな話を信じたというのだろうか…？

「奈々美は準備。霞は位置の特定。俺と晃は見て回るぞ」
それぞれに指示を出していく篠原。それに皆頷いていく。

「お前は悪いんだが、しばらくここにいてくれないか？」

「え…ええ…」

私はわけがわからなかったが。そのまま従うことにした。

「…なんだったのかしら…」

あのまま待たされたのだが。結局辺りが暗くなった頃に「帰っていい」と言われ、私はそのまま帰ることにしたのだった。

正直まだ彼らが信用できないのだが…というかかなり怪しい…。

「まあ、でも…これでどうにかなったらラッキー程度に…」 あ「
そこで鞆を忘れたことに気付いた。いろいろあってすっかり意識が
らなくなっていた。

「取りに行かないと…」

私は引き返して学校へと向かった…。

「あれ…」

校門は開いていた。それだけでも不思議だが、その校門をくぐろう
とすると、一瞬”違和感”を感じたのだ。なんか、こう…そのまま
引き返そうとする気になったというか…。

「…でも鞆いるし…。気のせいかな…？」

私はそのまま校舎へと向かった…。

「…不気味ね…」

校舎の扉もなぜか開いていた。校舎は不気味な静けさに包まれてい
る。

「…早く帰ろう…」

そう思つてさっきの部屋を目指していた時だった。
ガタンッ！

「え…？」

明らかに不自然な物音。

「だ…誰…？」

だがそれに答える人はいない。
急に怖くなった私は走り出した。
さっさと帰ろう。そう思った。が…

廊下を曲がって少ししたところに、”ソレ”はいた。

生気のない白い肌。白い衣服。それだけでもこの学校には異様
だが、それ以上に異様だったのは…。

…その手には、包丁が握られていた。そして、その包丁にこびりつ
いている赤。

よく見ると、その白い服にも赤い汚れがあつた。

「…あ…」

私は動けなくなった。驚きではない。その異様さがただ”怖くて”
動けなくなったのだ。

だが、”ソレ”は私を見て笑みを浮かべると、確かにこつちに向か
つて走つてきた…！

「…っ…！？ キヤアアアアアアアア！？」

そこで、ようやく私の身体は機能を取り戻し。私は”ソレ”から逃
げ出した。

「ハア…ハア…」

どのくらい走つただろうか。正直どの道を走つたかもわからない。
とにかく混乱していた。

「なんなのよ…アレ…！」

私はその姿を思い出し、恐怖と疲労、混乱でその場に座りこんでし
まった。

…幽霊なんて信じてなかった。だが、”アレ”は間違いなくその類だった。

「とにかく…今日はもうかえ　　！」
今日はもう諦めて帰ろう。そう思って顔を上げて、気付いた。

…さっきの”アレ”が、こちらに向かって走ってきていること…。

「あ…」

”ソレ”は、包丁を振り上げ、もうすぐそこまで来ていた。私はもう恐怖と疲労で動けない。

私はここで死ぬ。そう覚悟して目を閉じた。

…バアン！！

「え…？」

…予想していた”死”は訪れなかった。その代わりに聞こえた音。

あれは…銃声？

ゆっくり目を開けると。すぐそこまで迫っていた”ソレ”は警戒するよう私を見ていた。

…いや、私の後ろを見ていた。

「…あつぶね…あとちょっと遅かったら手遅れになってたぞ…」
そして後ろから聞こえてくる、さっきまで聞いていた声。振り向くと、そこには…

「あ…」

…そこには、”アレ”に銃口を向ける、口に短くトツポをくわえた男　　篠原がいた…。

よって
この日から私は、この男を初めとする”非現実的”な人達に

”非日常”の世界へと引きずり込まれることになった…。

序章 「垣間見エル表裏」(後書き)

3作目突入。

今回は「微ホラー」ですが、別にホラーメインじゃないのでご安心を。

一ノ話 「表ト裏」 「現実」ト「非現実」 「(前書き)

俺たちは”普通”の高校生。 ……本当だって。

そっちな…強いて言うなら、”依頼部”なんて非公式の部活に所属しているのと、

”妖魔”と呼ばれる”異形”と戦ってるくらいかな。

どうだ？ どこにでもいる”普通”の高校生だろ？

一ノ話 「表裏、”現実”ト”非現実”」

月が空に昇る夜、本来ならほとんどの生物は眠りにつき、その活動を休止する。

だが物事には常に”例外”が存在し、”彼ら”もまたそんな”例外”に含まれていた。

バアン！ バアン！ バアン！

本来静かで平和な街には不自然すぎる音：銃声が鳴り響く。

「そっち行つたぞ！ ぜってー逃がすなよ！」

そして叫び声。

ここは街の郊外にある廃倉庫。その中で激しく動き回る4人と”1体”の姿があつた。

4人が必死に追いかけているのは：人ならざる”異形”。彼らはそんな異形を相手に”戦っていた”。

『ゲエアアアアアア！』

「くっ！？」

目の前を包丁の切っ先が掠っていった。俺は大降りの攻撃の直後で硬直している”ソレ”に銃口を向け、引き金を…引いた。

バアン！ バアン！ バアン！

『ゲエアアアアアアア！』

だが、弾は標的には当たらず、”ソレ”は驚異の瞬発力で俺と距離をとった。

「テム…さっきからちよこまか動きやがって…。…今だ、晃！」
「…っ！！」

俺の合図に合わせ、”ソレ”の背後から人影

晃が飛び出し、

鞘からその刃を抜き放つ。

『ゲエアアアアアア！』

ガキイインッ！

「…おや」

だが、それを察知した”ソレ”は素早く振り向き、その包丁で晁の居合いを受け止めた。

「おいおい…晁の居合い切り受け止めるって…メチャクチャ強くなーか…？」

「アハハハ。今回はちよつと骨が折れそうですね、まったく」

本人は笑顔を崩さず、いたって余裕そうだし…また手エ抜いてんじやねえだろうな？

「やるしかねーか…。奈々美！ 外すなよ！」

「はい！」

俺が声を上げると、高台にいた奈々美が弓を引いて矢を…放った。

ヒュン！ ヒュン！ ヒュン！

…だが、正直奈々美には期待してねーんだよね……だってあの矢……つて！

「うおおおおおおい！？」

ストトトト！

俺が慌てて飛びのくと、さっきまで俺がいた場所に奈々美の放った矢が突き刺さっていた。

「テメ…やつぱわざとやってんだろ！？」

「ご…ごめんなさあ…い…」

俺が叫ぶと、奈々美は小さくなってしまった。

矢による援護はありがたい…だがそれは”命中精度がよければ”の話だ。

別に13の人みたいな百発百中を望んでるわけじゃない。だけど援護役がノーコンってどうよ？

しかも必ず味方…それも高確率で俺のところ飛んでくるし！

「くっそ…。晁！ そいつそのままにしとけよ！」

俺はそう叫ぶと、晁の刃を受け止めている”ソレ”に向かって駆け出した。

『…？ グアアアアアアア！』

それに気付いた”ソレ”は晃の刃を押し返し、そのまま俺のほうに走ってきた。

「うっし、好都合だ。…食らいやがれ！」

俺は銃で牽制しつつ右手に意識を集中する。

そして”ソレ”がすぐそこ…そのまま俺の懐に入ったところで…

「…”衝”！」

その言葉と同時に、懐にいる”ソレ”の脳天めがけて右拳を振り下ろした。

ドガン！

同時に開放される衝撃。それによってあたりは土煙に包まれる。

「…チ…今のは当たったと思っただのによ…」

土煙の中、俺は呟いた。

やがて土煙が晴れると、思ったとおりそこには”ソレ”の姿は無く、小さなクレーターが床にできていただけだった。

『グエアアアアアアアアア！』

「そこか！」

俺はすぐに声のした方へ銃口を向け、引き金を引いた。

案の定、そこに”ソレ”はいた、だが”ソレ”は弾を避けるとそのまま倉庫の隙間から外へと飛び出した。

「ヤッベ！ 逃がすな！」

俺たちも慌てて外へ出る。だがどこにも”ソレ”の姿はなかった。

「くそ…霧。わかるか？」

俺は隣にいた小柄な女の子…霧に聞いた。

「…東に逃走中。現在、800m」

霧はその方向を見つめて言った。

「この短時間でもう800mかよ…流石に追いつくのは難しいな…」
俺はため息をついた。

「でも、僕たちも結構弱らせましたからねえ。しばらく大きな動きは見せないと思います」

隣では相変わらず笑顔を浮かべた晃が、お気楽そうに言った。

「あの…でも、あの方向って、学校が…」
「ゲ…」

奈々美の言葉に俺はがっくりとうなだれる。

「学校あるのかよ…面倒なことになりそうだなオイ」

「…いえ、部長。逆にこれはチャンスかもしれない」

「んあ？」

霞の言葉に俺は顔を上げた。

「あれだけ弱っているのなら必ず学校を隠れ家として利用するはず
です。そして誰か1人に目をつけるはず。その人を特定し、囮にす
れば…」

「なるほど…いつそ被害にあう奴を餌にしておびき出すってわけか
…」

俺はしばらくその案に問題がないか考えると

「…うん。それが一番確実そうだな」

そう言っつて、その案に同意したのだった。

俺の名は篠原俊樹。私立零命高校に通う2年生だ。

部活は非公式ながらも”依頼部”という部活の部長をやっている。

…まあ、この部も俺が作ったんだが。

”依頼部”は基本的に”大掛かりなことでも個人的な悩みでも報酬
さえもらえりゃ何でも解決”ないわゆる”何でも屋””便利屋”の
ような部だ。だがそれは表向きのもので、実際俺たちの目当てはあ
あいった異形…”妖魔”マホウを初めとする”人ならざるモノ”関係の仕
事だ。

この世界には表の世界と裏の世界がある。

表がいわゆる俺たち普通の人々の世界で、裏が幽霊とか”妖魔”み
たいな化け物の世界。

2つの世界には境界線みたいなものがあって、本来その境界線はどちらからも越えることができないものだ。だが、稀にそういった境界線を越えてこっちの世界に紛れ込むやつがいる。

そいつらを倒すなり説得したりして元の世界に戻し、世界のバランスを守るのが俺たちの”仕事”だ。

…で。今回俺たちは1体の妖魔の情報を入手し、なんとかあの倉庫まで追い込んだのだが…あと一步のところで逃げられてしまった。

そして霞の予想通り奴はこの零命高校を隠れ家に行っている…それは気配でわかったのだが、いかんせん細かい場所は特定できない。

そこで霞の案の出番だった。アイツがここの生徒を標的にし、襲う前にこちらでその標的にした生徒を特定。そいつを餌にしてこの学校に閉じ込め、確実に息の根を止めるというものだ。…息の根はもう止まってるか。

まあとにかく、その案を採用した俺は早速標的にされた生徒を探しているのだが…流石に全校生徒が多い。数日探しているが、まだそれらしい奴が見つからなかった。

ちなみに霞は部室で学校全体を大まかに探索。俺、奈々美、晃の3人が実際に歩いて探しているのだが…どーせ晃はサボってんだろうな…。

晃は一見すると女性のような顔つきをしていて、つねに笑顔を浮かべているさわやか野郎だが、実際はかなりのサボリグセがあつてなかなか仕事をしようとしなない。

あと俺からしてみれば”常に笑顔”はなに考えてるかわかんなくて気持ち悪い。

あんなのでも女子生徒の人気があるから不思議だ。

…で、そんなサボリ野郎を戦力外とすると…奈々美も…頼りない。去年霞と同じく”1年の美少女ランキング”の上位に入っていて、人当たりもよく、おしとやかで清楚な雰囲気のある彼女もひとつの欠点がある。

彼女、”ド”がつくほどの天然なのだ。…いやもうシャレになつてない。

何も無いところで転ぶわ晃の冗談を真に受けるわ…本人にも”少しは”自覚があるらしいから割合するとして…。

「…って、やっぱり俺が頑張るしかないのかあ…」
結局のところ一番頑張らないといけないのが俺だと自覚して、俺はがっくりとうなだれたのだった…。

「やっぱり…無理じゃね？」

まさかこうも見つからないとは思ってなかった。なにか名残みたいなものが標的にされた生徒からは感じられるんだが…それが見つからない。

今は昼休み。俺はトッポを口の中に入れて噛み砕くと、またポケットから新しいトッポを取り出して口にくわえた。

想像以上に困難な搜索に、半ば心が折れかけていたときだった。ふと視線を向けた教室の中。そこに…いた。

確かな”妖魔”の名残。それを纏う女子生徒…。

「…ビンゴ」

俺はそう呟くと、ついに見つけたという達成感から笑みを浮かべたのだった…。

一ノ話 「表ト裏、”現実”ト”非現実”」 (後書き)

序章は美里視点でしたが実際は俊樹が主人公です。
期待した方はご了承下さいm(´`)(´`)m

二ノ話 「巻キ込マレタ”逸材”」 (前書き)

俺はついに目的の人物を発見する。

そいつは妖魔に狙われるくらいだからもしかしたらと思っていたが

…。

まさか、こつも簡単に”逸材”を見つけられるとは思ってなかったな…。

二ノ話 「巻キ込マレタ」逸材」

「…ビンゴ」

俺は達成感から思わず笑みを浮かべていた。

周囲から見れば1人ニヤニヤしてるキモい奴と思われたことだろう。ああ、思えばいいさ。俺は今そのくらいヤケになってたんだよ！

察してくれ！

そんな心の叫びは置いて、俺は1人弁当を食っているその女子生徒の前の席に問答無用で座る。

「うん…気にしないでおこつ」

おおつ…気付かれてない。

女子生徒は俺には気付かずに弁当に箸を伸ばしたので、俺はそろそろ声をかけることにした。

「何を気にしないつもりなんだ？」

「え…」

お、ようやく気付いたな。…って、なんかボーっとこつち見てるし。俺の顔に何かついてんのかな…？

「お〜い？ 聞いてつか〜？」

目の前で手をひらひらと振ってみる。するとようやく我に返ってくれたようで、彼女はこつちを警戒した様子で

「あつ…え…誰よ、あなた」

そう聞いてきた。…まあそうだよな。初対面だから警戒もするよな。

「俺か？ 零命高校2年C組。篠原俊樹だ」

そう言っつてやるけど、彼女はまだ警戒している。…負けないもん！

「…私に何の用？」

周りの生徒も次第にこつちの様子を見てくる連中が増えてきた。いわゆる野次馬つて奴だ。

お前ら。そーいう青春の甘酸っぱい1ページじゃねーんだぞ？ 散れ！ 散れつて！

俺はそんな心の叫びをまったく表に出さずに

「いやな。なんか困ってるっぽかったからさ」

そう言っただけだ。すると彼女が発していた汎用人型決戦兵器のフィールド並みに強固な警戒オーラが少し和らいだ。いや、乱れた。ここで俺は核心を突いてやる。

「例えば…急に視線や気配を感じたり、不自然な物音がしたり…とかな」

その発言で彼女の瞳は大きく見開かれ、その警戒オーラも解け

って…今度は敵意…!?

「あなたっ…! あなたの仕業だったのねっ!?!」

いきなり彼女は身を乗り出して俺の襟首を両手で掴むと、思いつきり揺さぶりだした!

ガクガクガクガク!

うえっぷ…。これはきつい…うっ…。

その振動に一気に脳がシェイクされる。というか気持ち悪くなってきた…。

「ちよっ…! 違う違う違う! やめっ…吐くって!!」

俺が必死に叫び、唇に食ったトツポが本気で華麗にリバーズする一歩手前で彼女は止めてくれた。

うっ…でも気持ち悪い…。

「で…違うってどういうことよ。何か知ってるんでしょ?」

そんな俺の様子は完全に無視して聞いてくる彼女。…うっ、少しはいたわってくれよ…。

とりあえず気を取り直して、俺は内ポケットを探る。…あった。

「ほい、コレ」

それは俺の名刺。

ちなみに作ったのは霞。結構いい仕事してやがる。

「高校生が名刺…?」

彼女は怪訝そうな顔をしながらも受け取ってくれた。

しばらくそれを見て…なにか気になる部分があったようだ。その一

点に注目している。

「ねえ…この部活のところの”依頼部”ってなによ…？」

…やっぱそれか。狙い通りの彼女の問いに、俺は不敵な笑みを浮かべると

「部室の場所は書いてあんだろ？ 活動時間は基本的に年中無休だから、いつでも来な」

それだけ言っただけで席を立った。

「なっ…！ ちょっと待ちなさいよ！」

立ち去ろうとすると背後から彼女の声が聞こえたが、俺は一度振り返って

「困ってるんだったら協力するぜ？ そういう仕事だからな」

それだけ言っただけで、そのまま教室を後にしたのだった…。

「…さて…奈々美と霞は部室で待機させたから…後は晃か」

放課後、奈々美と霞に目的の人物が見つかったことを知らせ、二人にはもう部室で待っていてもらうように頼んだんだが…同じクラスなのにいつの間にか晃が消えていた。

はえ〜よアイツ。どんだけサボりに必死になっただよ。

とりあえず、俺は晃がよく隠れている場所を風漬しに探していくことにした…。

…いやがった。

ここは屋上。晃は屋上を出てすぐ裏手…。本来人が行けない場所で読書してやがった。

…まあ、俺たちなら壁飛び越えれば行けるんだけどさ。

風になびく白よりの灰…ほとんど銀に近い長髪、そして中性的な顔立ち、そんな人間が優雅に読書をする様はとても絵になる…のだが、コレ実際サボってるだけだし。無駄に絵になるのが余計ムカツクな

オイ。

「…オイ」

俺が声をかけると、とっくに気配で気付いてるくせに今気付いたみたいにゆっくりとこちらに振り向くと

「…おや？ 俊樹君じゃないですか。こんばんぶふあ！？」

最後の方が変なことになったのはそのタイミングで俺が晃の頭をはいたからだ。

…いや、もうね、限界だった。ただでさえサボっついてこんな何事もなかったかのように優雅な挨拶されたらもう限界来るわ、うん。はたかれた本人は大して痛くもないくせに痛そうに頭をさすって

「イタタタ…。酷いじゃないですか俊樹君。いきなりなんです？

思春期ですか？」

そんなことを聞いてきやがった。…ああもう！

「俺もお前も思春期真っ盛りだろうが！ 甘酸っぱい青春を謳歌するリトルボーイだろーがあ！…ってそうじゃねえよ！」

…か何でお前はそんな楽しそうなんだ。確信犯だなテメー。

…やっぱコイツといると…すっごい疲れる…。

「あゝ。 やつと見つかったんですね？」

「その口ぶりだとまったく探してなかったな、お前？」

俺は晃によく探し人が見つかったことを伝える。

…なんかこの話になる前に脱線しまくったが…まあいい。

「とにかく、2人はもう先に行って待ってんだから…。さっさと行くぞ」

俺がそう行って歩き出すと

「わかりました」

晃は相変わらずその笑顔を崩すことなくついてきたのだった…。

そして部活に到着。…ここに来るまでに晃が理由つけて一回逃げ出した。そのせいで無駄に時間が過ぎちまったよ！

「まったく…お前はなんでそうサボるんだよ！」

「やだなあ…俊樹君。僕は”調査係”として職務をまっとうしていませんよ？」

「ほう…？ 仕事も無いのに”調査”とは仕事熱心だなオイ。いつもそのくらい頑張ってくれると俺も嬉しいんだがなあ？」

「アツハツハツハツハ。まったくですなあ」

…このニコニコ野郎…！

まあとりあえず気を取り直して扉を開けた。するとそこにはさっきの女子生徒がいた。

「お。来てくれたか」

俺はとりあえず彼女が来てくれたことに安堵する。

「おや。お客とは珍しい」

…お前、さっきの話聞いてたか？ アルツハイマーか？

「…だから客が来るって言ったろうがよ。聞けよ人の話」

彼女は俺を見て、そして隣の晃を見て…固まった。

ですよー。普通そうなるよねー。

「うう…俊樹さあ…ん」

俺を呼ぶ情けない声。そつちに視線を向けると…。

「ん…。…奈々美…また転んだのか…」

こぼれたお茶と…その隣で涙目になってる奈々美…。

流石天然。こんなのが”接待係”でいいのか俺は不安になってきたよ。

「やれやれ…仕方ありませんねえ。まあ、それが奈々美さんらしいのですが」

何でちよつと上目線？ サボったお前はなんなんだよ。まあとにかく俺たちはこれが日常茶飯事なので特に気にせず片づけを始めた。

「オイ霞。それとお前も手伝え」

俺は机でPCに向かっていた霞と、隣にいた彼女に呼びかける。

「え？ ……ええ」

「……わかりました」

霞も流石に慣れているのか、素直に従ってくれた。

片づけが終わり、部屋にあったソファに座る。

俺の隣に奈々美、向かいに彼女、その後ろに晃が立っている。

霞はまたPCの方へ戻ってしまった。

「さて…改めて自己紹介しところか。まず俺は篠原俊樹。この”依頼部”の部長だ」

俺はそう言っただけで今くわえていたトッポを噛み砕くと、ポケットからまたトッポを取り出して口にくわえた。

「で、こっちが依頼部”接待係”の坂本奈々美」

俺に紹介された奈々美は頭を下げて

「よろしくお願いしますね」と言った。

「で…コイツが依頼部”調査係”の久藤晃」

晃は彼女に笑顔で

「よろしくお願いします」

そう言った。うん、これだけ見たらまともそうに見えるよな。

「ええ。よろしく」

そんな晃に彼女も笑顔で返す。…あゝあゝ絶対誤解したよ、晃のこと。

「で、向こうにいるのが依頼部”情報係”の朝比奈霞」

気を取り直して、俺は奥でPCに向かっている霞を紹介した。

「……よろしくお願いします」

霞は無愛想ながらも会釈はした。うん、まあいいだろう。

「…私は九条美里です。よろしくお願いします」

俺たちの自己紹介が終わると、彼女も自己紹介して頭を下げた。

「ああ、そうそう。俺たちは全員2年だ。俺と晃がC組。奈々美がA組。霞がF組」

彼女は確かB組だったよな？ …流石にバラバラだ。

「で。この”依頼部”は簡単に言えば”何でも屋”だ。”便利屋”とも言うな。大掛かりなことから個人的な悩みまで、依頼とあらば何でも解決するぜって感じ」

自己紹介も終え、俺は次にこの”依頼部”の説明を始める。

「…ねえ？ この部ってちゃんと許可は？」

「あるわけねーだろ」

即答してやる。つーか許可あるならこんなひっそりしたところに部室を作ったりしない。

「非公式！？ だからこんなにひっそりしたところにあるのね…」
そういうことだよ。

彼女は周りの物を見ながら

「じゃあ、ここにあるものは…？」

と、恐る恐る聞いてきた。

「霞が学校のデータにハッキングして注文させた。学校の名前でな」
当時、いきなり予算が減ったって事で学校が大騒ぎになったっけ。

まあ結局犯人（霞）は見つからなかったんだがな。

「…ハア…」

呆れたな。それとも後悔したか？ …まともな人間ならそれでいいんだけどな。

「…”依頼”なら報酬がいるんでしょ？ …お金なんてそんなにないわよ…？」

そんな彼女の言葉に俺は首を横に振る。

「報酬はお金の時もあるが、別に俺たちは金のためにこんなことやってるわけでもねーしな。今回はタダでいいよ」

俺たちは金のためにこんなことをやってるわけではない。だからほとんど”報酬”は適当に物をもらっていた。

「え…？」

何で意外そうな顔するんだよ。俺そんな風に見られてたのか。…で

もまあ

「…こっちのミスでもあるしな…」

「…?」

「いや、何でもない」

ま、彼女には関係のないことか…。

「まあとりあえず話してみろ。そのためにここに来たんだろ?」

俺はそう言っただけで彼女を促した。

「…わかったわよ…」

彼女は渋々といった様子で、それでも話し始めた…。

「…なるほど。OK。こっちの方針は決まったな」

やっぱり妖魔との接触があったようだ。彼女で間違いはないだろう。

「え…? ちょっと。どうするつもりよ?」

「何とかするんだよ。つまりはその”異変”をどうにかすりゃあいいんだろ?」

「そうだけど…」

不思議そうな顔だな。まあ普通あんな話信じる奴はいないだろうな。けど、こっちはそれが”仕事”なんぞでね。

「奈々美は準備。霞は位置の特定。俺と晃は見て回るぞ」

俺の端折った指示でも、皆は頷いてくれた。流石に慣れてくれていい。

「お前は悪いんだが、しばらくここにいてくれないか?」

「え…ええ…」

彼女をしばらく学校に留め、妖魔を学校に閉じ込める。

その前に”結界”^{けっかい}の準備をしないと…。

「うし、始めるぞ」

ここは屋上。俺、奈々美、晃の3人は屋上にチョーク、そしてお札を数枚持ってやって来た。

まずチョークで床に”陣”^{じん}を描いていく。そしてそれに沿ってお札

を数枚貼っていく。

あとは3人が意識を集中させ、結界を展開して完成だ。今回張る結界は”人払い”と”閉鎖”の効果を持つ。

”人払い”はその結界の中に入ろうとする人間の意識を逸らせ、結界への侵入を防ぐというもの。

例えば結界の中に入ろうとすると、”何となく入ってはいけないよな気”にさせて立ち去らせる…といった風いだ。

”閉鎖”は内部の妖魔を結界内に閉じ込めるというもの。

今回はこの2つの効果を結界に付加させる。これにより無関係の人間を巻き込まず、妖魔に逃げられることもない。

意識を集中する。奈々美、晃も同じだ。

「…”結^{けつ}”」

範囲は学校の敷地ちょうど。こうして結界が学校を覆うように展開された。

「さて…あとは彼女を帰らせて、俺たちは仕事だな」

俺たちは部室へと戻ったのだった…。

夜。彼女には今日は帰るように伝え、彼女は自宅へと帰ったのだった。

俺たちは今屋上で待機している。

「霞。ヤツは？」

「…大丈夫です。結界によって閉じ込められたことに気付いたようで、今は姿を隠しています」

「チ…もう気付かれたか。なかなか賢いみたいだな」

今回張った結界は探知されにくくしたつもりだったんだが…こうもあっさり気付かれるとは。

「なんとか朝までに片付けないとな」

いくら”人払い”の効果があっても、学校にやってくる大勢の生徒

全員の意識を逸らすのは不可能だ。

というか俺たちの姿も見られてしまう。それじゃあ意味がない。

「現在位置を　　！？」

不意に、霞が動揺した。

「ん？ どうした？」

霞が動揺するなんて珍しい。いったいどうしたというのか。

「結界内に侵入者…。さっきの女子生徒です…！」

「はあ！？ …と、なると…」

”人払い”にも限界がある。侵入可能な例も存在するのだ。それは大きく分けて3つ。

1つ、結界そのものに不具合が発生した。

2つ、その結界以上の力でこじ開けられた。

3つ、その結界を抜けられるだけの霊能力の”素質”がある。

俺たちは結界の展開はいつも念には念をいれておかないといけないので1の可能性は少ない。

2の可能性もあるが、彼女は普通の学生だ。それほど力があるとは思えない。

じゃあ…。

「妖魔に狙われるくらいだからもしやとは思ったが…好都合かもしれないぞ？」

妖魔は”素質”のある人間を好んで襲う習性がある。だから彼女が狙われていると知ったときこの可能性も考えていた。

「一石二鳥か…」逸材”も見つかったな」

俺は1人呟いて、笑みを浮かべた。

「…部長。どうしますか？」

隣で霞が聞いてきた。

「とりあえず霞はここで彼女と妖魔の位置を教えてください。奈々美は万一のこともあるから結界に不具合がないか確認、その後は指示があるまでここで待機。晃は俺と彼女のところまで行くぞ」

とにかく彼女の保護が最優先だ。もともと狙っていた獲物が帰って

きた以上、妖魔は必ず彼女の前に現れる。それなら探す手間も省けて都合だが、最悪彼女が死ぬようなことになれば今回の作戦が水の泡になる。

「晃と俺は二手に別れよう。俺たちは彼女を目指して進むが、向こうはそうはいかないんだ。挟み込むようにして行くぞ」

「わかりました」

俺と晃は階段を駆け下りていった…。

「霞、彼女の位置は？」

『どうやら私たちの部室を目指しているようです今は1階の3年D組前』

片耳に着けたイヤホンから霞の声が響く。簡易の通信機だ。

「了解」

俺が1階を目指そうとしたその時

「キヤアアアアアアアア！」

「!?!」

突然の悲鳴。それは間違いなく彼女のものだった。

それを聞いた俺は全速力でその方向へ向かって走り出した。

「オイ、霞！ 何があつたかわかるか!?!」

俺は通信機から霞に叫ぶ。

『妖魔に遭遇したようです。彼女は今2階の2年C組の教室方面へ逃走中』

「ヤベエなこりゃ…」

まさかこうも早く妖魔が動くとは思ってなかった。急がないと手遅れになる。

「晃！ 今どの辺りにいる!?!」

『1階です。…C組なら俊樹君のほうに近いかと』

いつもの調子で晃が答える。だがその声にはどこか緊張感が感じられた。

「くそ…間に合えよ…!」

俺は大急ぎで彼女の元へ向かった…。

2階。俺は廊下を駆けていた。

「この角を曲がれば…！」

俺が廊下を曲がる。

…するとそこには、今にも手に持った包丁で彼女を切り殺そうとする妖魔の姿。

俺は咄嗟に腰に下げていた銃を抜き、”ソレ”に銃口を向け、引き金を引いた。

…バアン！

鳴り響く銃声。だが妖魔は察知していたようで、すぐに後ろに飛んでそれを避けた。

ヤツはこちらを警戒している。

「え…？」

彼女はゆっくりとこちらを振り向く。

「…あつぶね…あとちょっと遅かったら手遅れになってたぞ…」
流石に今のは危なかった。だが俺は彼女を少しでも落ち着かせようと、いつもの口調で言った。

「…散々てこずらせてくれたが、これで終わりだぜ？」

俺は目の前の妖魔に銃口を向け、そう言った。

二ノ話 「巻キ込マレタ」逸材」（後書き）

次回は戦闘メインの話になりそうです。

誤字、改善点などちょっとした感想もお待ちしております。

三ノ話 「決着。目撃ノ対価」(前書き)

俺と異形は対峙し、やがて激突する。

それは数日ごしの戦いの決着がつく瞬間でもあった。

そして、それを見ていた彼女にも日常の転機が訪れる。

三ノ話 「決着。目撃ノ対価」

「…散々てこずらせてくれたが、これで終わりだぜ？」
俺は銃口を向けて、目の前の妖魔にそう言っただった。

「あ…え…？ 篠原…？」

彼女は今の状況が飲み込めず、混乱していた。

「悪い、質問は後にしてくれないか？ とりあえずコイツ片付けな
いといけないんだわ」

俺は普段の調子でそう言っただけ。

「あ…う、うん…」

とりあえず彼女はそれで納得してくれたようだ。

俺はそんな彼女の前に立つ。

「とりあえず、死にたくなかったら俺から離れるなよ？ じき見も
来るからそれまでの辛抱だ」

彼女は小さく頷いてくれた。

『グアアアアアアアアアア！』

あと少しのところを邪魔されたのがよっぽど悔しいのか、ヤツは大
きな雄叫びを上げる。

「お〜お〜。食事の邪魔されたのがそんなに悔しかったのか。食
物の恨みは怖いからなあ？」

俺は不敵に笑う。

「ほら、代わりだ！」

俺は引き金を引いた。

バァン！ バァン！ バァン！

『グエアアアアアアアアア！』

それは容易く避けられ、ヤツはこっちに向かって走ってきた。

「来たな…！」

俺もヤツに向かって走り出す。それと同時に右手に意識を集中する。
それはこの前の廃倉庫の時の再現のようだった。

「食らい…やがれっ！」

俺は右手を大きく振りかぶる。ヤツは前と同じように俺の懐に飛び込んできた。

そこで、ヤツの脳天めがけて右手を…

『グエアアア！』

ヤツはそのタイミングで後ろに飛んでかわそうとした。

俺は、そんなヤツに不敵に笑った。

…振り下ろすはずだった右手は振り下ろされなかった。いわゆるフエイントである。

「同じ手に2度も引つかかるかよ！」

ドガア！

『グブエ！？』

後ろに飛んだ直後で隙だらけのヤツの顔面に、横から俺の蹴りが当たった。

そのままヤツは横に吹っ飛ばされ、壁に叩きつけられる。

そこに俺はすかさず駆け寄り…。

「…”衝”！！」

右手の衝撃を、開放した。

響く爆音、そして煙。

それが晴れると、壁は無残に崩れ、その奥…教室にボロボロのヤツが立っていた。

「うわあ…まだ生きてんのかよ…。…いや、もう死んでるか」

俺はそんなヤツにげんなりする。

『グ…ガ…！』

だがヤツは背後の窓を突き破るとそのまま外へ逃げ出した。

「逃げたか…」

「俊樹君、お待たせしました。…おや美里さん。ご無事でなによりです」

ちょうどその時、晃がこちらにやって来た。

少し息を切らしているあたり、今回は割りと真面目に急いでいたらしい。

「妖魔は？」

「外に逃げたよ…。 ”衝” を至近距離で叩き込んでやったからもうだいぶ弱つてると思うぜ？」

「そうですか…。」

とりあえず、俺は彼女に向き直った。

「怪我は？」

俺の言葉に彼女は一瞬考えてから

「ええ…大丈夫よ…ありがとう」

そう言った。

「いろいろ聞きたいことがあるだろうが、後にしてくれ。屋上には一人で行けるか？」

「屋上ね？ …ええ。大丈夫」

彼女はそう言うと、立ち上がった。

「うし、晃、さっさと終わらせるぞ」

「はい」

彼女に見送られて、俺と晃も窓から外に飛び出した。

ヤツはグラウンドの中央に立っていた。

逃げられないことを悟って観念したのか、それとも畏か…。

「ま、じつとしてくれるんなら好都合だな」

「まったくですね。…僕も楽ができそうです」

お前は年中無休で楽しんでるじゃねーかよ。

「とりあえず…仕上げと行こうか…!!」

俺と晃はその”力”を解放した。

「あつ！ 美里さん！ ご無事で何よりです」

屋上に上がった私を、坂本さんが迎えてくれた。

「お怪我はありませんか…？」

「…ええ、足をちよつと捻ったくらいよ」

逃げるときに必死になっていたから自分でも気付かなかったが途中で足を捻ったらしく、少しだけ痛んだ。

私は特に気にする必要はないと思ったのだが、坂本さんは慌てたように

「大変じゃないですかっ！ 見せてください！」

そう言つて私の前でしゃがみこむと、私の足を軽く手で押さえた。

「っ…」

ズキリ、とした感覚が足に広がる。それを確認した坂本さんは

「じつとしててください…今治しますから…」

そう言つて、目を閉じた。

同時に、彼女を包み込むように淡い黄色の光が現れる。

「え…？」

その光が彼女を通して私の足を包む。途端に私の足は温かい感覚に包まれた。

やがてしばらくすると、私の足から痛みは消えてなくなっていた。

「え…？ 何したの…？」

「私の術で簡単な治療をしたんですよ。応急処置程度のものですけどね」

坂本さんは笑顔でそんなことを言った。…やっぱり坂本さんも篠原達のような不思議な力があつたんだ…。

「…… 始めました」

私がそんなことを考えていると、不意に屋上からグラウンドを見下ろしていた朝比奈さんが呟いた。

「え…？」

私もグラウンドを見下ろしてみる。

「なっ…!？」

そこには、不思議な光景が広がっていた。グラウンドを覆いつくすような紫と銀色の光。そのそれぞれの光の中心に篠原と久藤君がいた。

「なに…? あの光…!」

「え…。九条さん、”れいりょく霊力”が見えるんですか？」

私の呟きに、坂本さんは驚いたように言った。

「…”霊力”？」

「2人が今開放してる光ですよ。素質のある人にしか見えないらしいですけど…やっぱり九条さんは素質があるんですねっ」

そう言う坂本さんはなんだか嬉しそうだった。

改めてグラウンドを見下ろす。2人はついにあの異形に向かって駆け出したのだった…。

Another Side Out

「行くぞ！」

抑えこんでいた”霊力”を開放した俺たちはまっすぐ妖魔に向かって駆け出した。

『ゲエアアアアアアアアアアア!』

それを見たヤツも最後の力を振り絞ったのか、紅い光を纏って俺たちを迎え撃つ。

「…っ！」

俺はまっすぐ走った状態から即座にヤツを軸に横へ跳躍する。

そして銃口をヤツに向け、跳躍した状態から…

バァン! バァン! バァン! バァン!

弾丸を放つ。

『ガアアアアア!』

だが、それは今まで同様避けられる。弱っていてもその素早さは変わらないらしい。

むしろ今までより速くなっていた。

「くそっ…！」

最後の最後でてこずりそうだ…。

俺がそう思っていると、俺とは違ってまっすぐヤツに向かっていった晃がその刃の間合いに敵を捉えた。

「ハッ…！」

柄に手をかけ、そこから放たれる居合い。その速度はもはや肉眼で捉えるのも困難なほどに鋭く研ぎ澄まされていた。

ガキイイイイーン！

『ガアアアアアアアアア！』

だが、その刃をヤツは容易く見切り、手に持った包丁で受け止める。響く金属音。晃とヤツは刃を交えたまま動けなくなる。

「…食らえ！」

俺はそこへすかさず駆け寄ると、その手前で大きく上へ跳躍。ヤツの上で銃口を向け、弾丸を放った。

バンバンバンバンバンバン！

連続で響く銃声。それを聞いた晃はすぐに後方へ飛んで銃弾の落ちる範囲から離脱する。

『ガッ…ゲアアアアア！』

ヤツもすぐに離脱しようとするが、少し遅かった。俺はヤツが避けることも計算して弾を広範囲に撒いたのだ。

ヤツはギリギリ俺の攻撃範囲に入り、数発の弾丸がヤツの身体を貫いた。

「まだまだ！」

俺は地面に降り立つと、すかさずヤツに至近距離で銃口を向ける…

”右手”で。

『ゲアアアア！』

ヤツはさっきの跳躍による回避の直後で硬直しており、隙だらけだ

った。避けることを諦めたヤツは包丁の刃を立てて銃弾を受け止めようとする。

「いい判断だ。…だが、そんなモンで受け止められるかな？」

「！！！！？」

不敵に笑う俺にヤツが警戒したが、もう遅かった。

俺は引き金を引く、そして…

ズガアアアアン！！

今までとは明らかに違う銃声の激しさ。そして今まで以上の威力を持った弾丸がヤツの包丁の刃に当たり、至近距離でそれを受けたヤツは大きく後方に吹っ飛ばされた。

俺の銃にはお札がいくつも貼られている。…俺の右手にも巻かれている。俺が術を詠唱も無しに使えるのはこの右手の札のおかげなのだ、他にもいろんな恩恵があった。

俺の銃は実弾は撃てない。今まで撃っていたのは自身の霊力を銃に貼られている札を通して弾丸に変換されたもの…いわゆる”霊弾”れいだんだ。

”霊力を弾丸に変換している”のだからその霊力が強力ならば当然弾丸の威力も上がる。

俺の右手の札が俺の霊力を強力なものにさせてくれていた。

だから俺は”右手で撃つと霊弾がパワーアップする”のである。

…まあ、威力と射程上がる代わりに連射できなくなるし一発一発の消費霊力が増すんだがな。

例えるなら長距離射撃型ライフルである。

そんな弾丸を至近距離で受けたヤツは当然ながら後方に吹っ飛ばされた。

そして…

ドスウツ！

「ガツ…！？」

ヤツが地面に降りることはなかった。

吹っ飛んだヤツの胸には、刀の切っ先。

「ふう…終わったな」

衝撃の後には一片の気配も存在しなくなっていた。

俺の放った”衝”は確実にヤツを仕留めたらしい。

今ここに、俺たちの戦いは終わったのだった。

「結構時間がたってしまいましたね…。教室の修理は急いだほうがいいでしょう」

そう、崩れた壁をそのままにもできないので、俺たちには”後始末”が残っている。

”修復”の術式ですぐなんだが…今はしんどい。

「少し休もう…。流石に疲れた」

俺がそう言って地面に座り込むと

「俊樹さん。晃さん。お疲れ様でしたっ！」

「…ご苦労様です」

「…」

屋上にいた3人もグラウンドにやって来た。

「お…」

俺は右手を挙げてそれに答えた。晃はいつもの笑顔で小さく手を振っていた。

「ねえ…篠原…」

しばらくして、九条が俺に話しかけてきた。

「あん？ どうした？」

彼女はしばらく黙り込んでいたが、やがて意を決したように

「あなた…いいえ、あなた達は何者なの？」

「あ…」

そっぴや彼女のこの後のことを伝えてなかったな。

のままだといつか殺されると言われれば誰だって怖いだろう。

俺は少し気を使って

「まあ…無理にとは言わないさ。…明日までまっ

…たわよ…」

「は？」

俺の言葉を遮って彼女が何か呟いた、聞き取れずに俺が聞き返すと、
彼女はこちらを見て

「わかったわよ…やればいいんでしょ？」

そう言った。

「…言っておいて何だが、そんな簡単に結論出していいのか？」

そう言うと、彼女は少しだけ悩んだが、それでも

「このままだとあんな化け物に襲われて、いつか殺されるんでしょ

？…なら、仕方ないじゃない」

そう言った。

その瞳には確かな意思があった。だから俺はそれ以上何も言わずに

「…わかった。そこまで言うなら歓迎しよう。よろしく頼む」

今ここに、新しい”依頼部”のメンバーが誕生したのだった…。

三ノ話 「決着。目撃ノ対価」(後書き)

久しぶりの更新…。

春休みが終わって学校なので、これからも不定期更新になりそうです。

でも毎日がんばって書いてるので見捨てないで下さいね。

四ノ話 「新夕ナ」日常”、裏二生キル者達”（前書き）

なりゆきで入部してしまった”依頼部”

私はそこで篠原から霊能力の知識を教えてもらった。

それを聞き終えたとき、私は完全に”そちら側”の世界の人間になつていた…。

四ノ話 「新夕ナ」日常」、裏二生キル者達」

「では、改めてよろしく頼む」

俺は新たに依頼部に加わった美里に右手を差し出す。

「ええ…よろしく」

彼女はまだ不本意そうだったが、その右手を握り返してくれた。

あれから学校の修復作業も終えてその日は解散。

そして翌日の放課後、俺たちは部室に集まっていた。

「それで…私は何をしたら？」

まあそうなるわな。けど”雑用係”ということなんでやっぱやることは…。

「まあ、適当に頼むから適当にこなしてくれ」

決まってるないぜ！

半ば勢いで任命した雑用係、その後のことなんて考えてなかったよ。

「…呆れて何も言えないんだけど…」

何か言われてもどうしようもないけどな。

「…それで…」生き残る術”ってどうするつもり？」

そう、今回の本題はそれである。今のままでは美里は再度妖魔に狙われる可能性がある、それを毎回俺たちがそう都合よく助けられるわけがない。

俺はしばらくどうしようか考え込んだ後…。

「とりあえず、俺たちの仕事のことと、基礎的な知識を頭に叩き込んでもらう。それがステップ1だ」

俺が今いる3人を勧誘したときにも話したことだ。

俺は口のトツポを噛み砕き、新しいのに変えてから話し始めた…。

この世界には表と裏がある。

わかりやすい例えを挙げるならばコイン、紙、カード…。

万物は表と裏で構成され、その表裏は物のバランスを維持する。

そして、それは人も同じ。

人にも当然表と裏は存在する。表の顔、裏の顔…。

それが良いものであれ、はたまた悪いものであれ、その表裏もまたその人物のバランスを維持している。

…そしてそれは、この”世界”にも存在する。

俺たちの仕事は”世界のバランスを維持する”こと。だが、それは何も化け物と戦うだけのことではない。

境界線を越えたものにも段階がある。

まず、少しだけこちらの世界に入ってきているもの。これは素質のある人間にだけ姿が見え、直接俺たちに触れることはできない。だが、物を動かしたり、気配を出すことはできる。

つまり”間接的”にこの世界に干渉できる状態ということだ。

そして、完全にこちらの世界に入ってきたもの。これはかなり厄介で、素質がなくても姿が見え、直接俺たちに触れることができる。

これがなおかつ妖魔なら早急に排除しないとイケない。

つまりは”直接的”にこちらの世界に干渉できる状態である。

「その…どうやって”裏”の存在がこちらの世界に来ることができ
るの？」

ここまで話して、美里が質問してきた。

質問するってことはある程度やる気があるということか…まあ自分の命がかかっているしな。

「大きく分けて2通りの方法がある。境界線を越えられるほどの力で無理矢理抜けてくるか、ときどき現れる”歪み”のようなものを抜けてくる奴。前者だと相当厄介なことになるな」

境界線を力づくで越えられるほどの力ならばかなりのものだろう。当然ながら強力な妖魔ということになる。しかも”少しずつ入ってくる”わけではないのでいきなり”直接的”にこちらに干渉できる。

まさに”強くてニューゲーム”だ。優遇されすぎてる。

俺の説明に美里は納得してくれた。それを確認した俺は一呼吸置いて「力づくで抜けてくる奴は間違いないく妖魔だろうが、”歪み”から紛れ込んでくる奴が妖魔とは限らない」

話を再開した。

人は死後”裏”の世界へと行く。そのとき悲しみや憎悪といった負の感情が強い魂が”妖魔”となる。だがそれ以外の魂だってもちろんある。

何の害もない霊ならば説得して導いてやることも可能なのだ。

「これは実は妖魔も例外じゃなくてな。まだ理性が残ってる奴ならば説得もできる」

妖魔は化け物だが、同時に救われない魂の成れの果てでもある。そういう魂はなるべく救ってやるべきだと俺は思っている。

「…まあ、俺たちの本職はそういう感じかな」

「…大変なのね…」

美里は俺たちの話を聞いて驚いているようだ。

まあ、楽な仕事ではないわな、こっちも命がけなわけだし。

「でもさ、俺たちが働いて被害者が減るならいいことだと思わねえか？」

俺が聞くと、美里は少し考え込んで

「そうね…」

そう言っただけだ。

「とりあえずこんなところか。…次は」

俺は次の話を始めることにした…。

「次は俺たち霊能力者の歴史についてだ」

古来よりこの地には霊能力の文化がある。霊能力とは”霊力を使用する力”であり、その分野も多彩だ。

「神社や寺関係…占い師や祈祷師も霊能力者の一種だ」

まだ人類が誕生して間もない頃、この地でもっとも古い記録の残っ

ているころから呪術というものは多くの人に信じられてきた。

かの有名な邪馬台国やまたいこくの卑弥呼ひみことかも霊能力者だって話だつてある。まあそんな証明しようがない話はどうでもいいとして

「霊能力の歴史つてのはこの国の歴史よりも古い。昔からこの地を影ながら支えてきたんだよ」

決して表舞台で脚光を浴びることはない。それでも霊能力者はその力で表裏のバランスを守つてきた。

「じゃあやつぱり篠原以外にも霊能力者はいるのね？」

「そりやもちろん」

美里の質問に俺は頷く。

テレビで騒がれるような奴らはイカサマも多いが、実際に霊能力者は大勢いる。そういつた人間たちを集めた組織がこの日本にもいくつか存在していた。

「…というと？」

美里は”組織”と言われてピンとこないようだ。

結構有名なのがひとつあるんだがなあ…誰でも知ってるやつが

「代表的なのは陰陽師おんみょうじだよ」

そう言われて美里は納得したような表情になった。

陰陽師はその”古来より続いた霊能力の文化”を今でも重んじる正統派霊能力集団だ。規模こそ大きくはないが、メンバーは実力者揃いだという。彼らは京都を中心に表裏の秩序を守っている。

「…あれ？ じゃああなた達は違う組織なの？」

どこか他人事のような話し方を疑問に思ったのだろう。美里はそう聞いてきた。

「ああ、こいつらは俺が誘つたから無所属だが…俺は”日ひのノ輪”つー組織に属してる」

今、この国には大小様々な霊能力者組織が存在するが、その中でも最も大きな組織が”日ノ輪”であった。

陰陽師が古来の文化を守るのに対し、日ノ輪は新しい技術を次々と取り入れ、他の弱小組織を吸収しながら着々とその規模を広げて行

ったのだった。

…正直、俺はこの組織が気に食わなかったりする。影響力増強に眼を奪われ、霊能力者本来の本分を忘れてしまっているように感じられるからだ。

「…でも、陰陽師もそれほど大きな組織じゃないんでしょ？ どうして吸収しないの？」

美里の疑問はもつともだろう。陰陽師は影響力こそ日ノ輪と互角がそれ以上だが、規模に関しては日ノ輪の足元にも及ばない。

「まあ…組織同士の相性が悪いんだよ。思想みたいなのが正反対だからな。後は…陰陽師は絶対に吸収されない”盾”があるから」

「…”盾”？」

俺は一呼吸おくと

「…”信仰”と”歴史”だよ」

そう言った。

陰陽師は周囲の信仰もかなりのものがある。それはまったく無関係の一般人にも、だ。

さらには陰陽師には古来より積み上げられてきた”歴史”がある。そういう点で日ノ輪は陰陽師に手を出せないでいた。

「まあ…このままだと時間の問題でもあるだろうがな…」

日ノ輪の組織の繁栄に対する執着はかなりのものだ。…まったく、幹部の老いぼれどもは本当にどうしようもないのしかいないらしい。

「実際、日ノ輪の幹部に反感を持つてる奴らは大勢いるよ。瓦解するの時間問題だろうな」

いつか日ノ輪で一騒動あるだろうと俺は睨んでいた。

「まあ、今は関係ないことだな。じゃあ最後に」

気を取り直して、俺は最後の話を始めた…。

「最後に、霊力について話しよう」

霊力は全ての人間がわずかながらも持っている”力”だ。

だがそれは本当にわずかなので、本来ならその力に気付くことなく

一生を終える。

だが、一部で高い霊力、またはその素質がある人間が存在した。主に神社や寺といった霊能力関係の血筋に多く見られるが、偶然素質をもつて生まれる人間もそれなりにいる。

「…妖魔はなんで人間を襲うの？」

「あいつらにとって俺たち人間は特にどうでもいい。…まあ人を殺すことを楽しむクズもいるが…まあ大抵それは二の次だ」

美里の質問に答える。俺は一呼吸おくと

「基本的に…妖魔は俺たち人間の”霊力”を狙ってる」

妖魔のもつ霊力を”妖力”という。霊力はその個人によって色や性質が異なり、負の感情に汚染された霊力が”妖力まじりまじり”と呼ばれていた。妖力は生きた人間には宿らないと言われているが…負の感情にまみれ、妖力に限りなく近い霊力をもつ人間は大勢いる」

誰だつて不安になつたり悲しんだりする。そういう負の感情を背負つて死んだ人間が妖魔となるのだ。

もしくは生前でも、そういう”心の弱さ”が妖魔を呼び寄せ、”憑かれる”ことだつてある。

妖魔は人間を襲い、殺してその霊力を食らう。そうすることで自身の力をより強力にするのだ。

だが普通の一般人を殺しても得られる霊力は少ない。だからこそ俺たちのような霊能力者が狙われるのだ。

「まあとにかく…”妖力”つてのはあんま良いものじゃないつてことだ。…それとは逆に”神力しんちく”つっーのがある」

妖力が”汚れた霊力”ならば。神力は”清らかな霊力”だった。

霊能力関係の血筋で、とても清らかで美しい心… 主に女性がもつ霊力である。

「…？ なんで女性？」

「昔から女性は神聖なものとされているからな。…まあ例外もある。男でも神力持ちはあるし、血筋関係なしつてのもいる。…まあそんなのは奇跡に近い確立だな」

神力はそういう意味でもとても貴重だ。だがそれ以上に神力には大きなメリットがある。

「光”属性の術式は神力でしか使えないし、神力の術式には怪我を治したりするものがある」

「いわゆる”回復役”である。」

霊術には火、水、風、雷、地、光の6つの属性がある。

光は妖魔に効果的なダメージを負わせられるが、神力でしか扱えなかった。

「あれ…？ 坂本さんってこの前私の足治してくれたんだけど…」
そこまで聞いた美里がふと声をあげた。

「ああ…。奈々美は実家が神社だからな。彼女は神力持ちだ」

そう言っつて奈々美に視線を移す。本人は

「そつ、そんな…私なんてまだまだですよ…」

そう言っつて照れたようにもじもじしていた。

ホントにまだまだだよ。回復の腕はいいのに援護はからつきしなんだもんなあ…。

「…まあ、各々の実力は後々話すとして…基礎はこんなところかな」

「…そつ…」

漠然としてるようだ。…まあどれも一瞬で理解するには現実味が薄すぎる。

それでも、これからは彼女は確かにこういう世界で生きていくしかないのだ。

「まあ…大変なこともあるが、気楽に行こうぜ？ 先のことを悩ん

でても意味ないっての」

俺はそう言っつて彼女の肩を叩いた。

「え…ええ…」

彼女は渋々ながら頷く。

「じゃあ、改めて…」

俺は立ち上がると…

「ようこそ、”依頼部”へ」

新たなメンバーを歓迎したのだった…。

四ノ話 「新夕ナ」日常」、裏二生キル者達」(後書き)

今回はちょっと説明っぽい話になってしまいました…。
次回からはしばらく日常編の予定です。

五ノ話 「束ノ間ノ”平穩”」 (前書き)

妖魔との戦いも終え、俺たちは普通の高校生としての日常へと戻っていく。

「ただ俺たちは”依頼部”だ。束の間の平穩も1つの依頼で中止になる世界だ…。」

五ノ話 「東ノ間ノ”平穩”」

「 え〜ここは……って、篠原…また寝ているのか…」
授業中の教室に教師の呆れたような声が響いた。

俺は今、先日の仕事の疲れで机にてスリープモードの真っ最中である。

いや、もうね、眠いのよ。夜中に走り回って疲れてて、それでも遅くまで起きていたせいでもう限界だった。

俺はただ顔だけを机につけて、一瞬死体かなんかと間違われそうな体勢で情眠を貪っていた。

…まあ、薄く靈力を周りに張ってるからだいたいこの物体の動きはわかる。

…というより気を張って寝ているからレム睡眠に到達しねえ。なんという悪循環だ。

「…篠原、起きろ」

教師の声もちゃんと聞こえている。…つか熟睡してる奴には呼んでも聞こえない気がする。

教師はそれから諦めずにしつこく呼びかけてきたが、俺は今の悪循環をどうしようかで頭がいっぱいだった。

やがて教師の声が止む。…諦めてくれたか、そう思ったんだが…。

「…起きろ！」

そう叫んだ教師が”何か”を投げってきた！ …大きさから察するに…チヨークか。

そついやこの教師は今時でもチヨークを投げることで校内じゃ有名だったな…。しかも無駄に命中率が高い。

飛んできたチヨークは3つ…うち2つは軌道的に当たらないだろう。…最後の1つは当たるな…。

俺は最初の2つに対しては寝たまま無視した。案の定チヨークは俺の横を通り過ぎていく。…掠ったぞオイ、ほとんど命中じゃねえか

よ。

そして最後の1つ…。

「…チイ！」

俺はすかさず顔を上げると、避けに定評がある某映画の主人公も顔
負けの回避を披露する。

頬を掠るチヨーク…あぶねえ…。

「やらせはせんよ…！」

「チ…また外したか…」

今舌打ちしたなアイツ！ 教師がそれでいいのか！

「当たらなければどうということはない。…おやすみ」

俺は言うだけ言って再び眠りに落ちたのだった…。

教師は今ので諦めたのか、もう何も言ってはこなかった…。

Another Side

「…あれ？ 篠原は？」

放課後、私はいつものように依頼部の部室にやってきていた。

扉を開けると、いつもはいない久藤君がいて、かわりにいつもいる
篠原がいなかった。

坂本さんと朝比奈さんはいつものように部室にいた。

「こんにちは、美里さん。…俊樹さんなら今日はまだ来てないです
よ？」

「へえ…珍しい…」

いつもは必ずとっていいほど部室にいるのに、今日はまだ来てな
いなんて。

「大方、先日の仕事の疲れで寝てるんでしょう」

疑問符を浮かべていた私に、久藤君が言った。

「…なるほど」

いつもあんな夜中遅くまで戦ってたら流石に疲れるわよね…。

「俊樹さんは特によく寝てますからね…。もしかしたら今日は来ないかもしれないです」

「え？　じゃあなんで皆は集まってるの？」

篠原がそんななのに、皆は疲れていないのだろうか？

「…まあ、僕たちは好きで集まってるようなところもありますし」「皆休んじゃうとお客さんが来ても対応できませんしね」

私の疑問に、久藤君と坂本さんが言った。

「お客、ね…。でも滅多にこないんでしょ？」

そう言った私に、久藤君も坂本さんも苦笑していた。

実際、客は滅多に来てないらしい。…まあ非公式であまり大っぴらにできないというのもあるんだろっけど…。

「まあ、気長に待ちましょっか…」

私がそう言ったときだった。

ガラガラガラ…。

「…失礼しまーす…」

扉を開く音、そして控えめな声。

篠原ではない、私たちがそちらに視線を向けると、そこには大人しそうな女子生徒が立っていた…。

「…ねえ、ホントにこんなところにいるの？」

いつもは私たち以外が開くことのない扉。それが見慣れない女子生徒によって開かれ、彼女はこの部活の噂を聞いてやってきた”客”だという。

この緊急事態に、女子生徒は坂本さんと朝比奈さんに任せ、私と久藤君は篠原を呼ぶことにした。

私はもう帰ってしまったんじゃないかと思ったが、篠原は基本的に校内にすることがほとんどらしい。

私たちが今いるのは中庭、…の奥まった場所のさらに奥。このあたりはちよつとした林のようになっていた。

久藤君はここにいると言ったけど…。本当にこんなところにいるんだらうか？

「絶対とは言えませんが…校内にいるとするなら大抵はここですね」
久藤君は先を歩きつつ言った。私はとりあえず久藤君について行く。
「…つきました。ここです」

少し歩くと、木々を抜け、ちよつとした広場のようなところに出た。
「うわあ…」

周りを木に囲まれ、広場の真ん中にも大きな木がある。木々で日の光を覆っていた林を抜け、広場は日光に照らされている。ここはなんだかとても幻想的だった。

「こんなところがあつたなんて…」
思わず、そんな言葉を呟いていた。

「…僕も知りませんでしたよ。俊樹君を探してて見つけたんです」
そう言いつつ、久藤君は広場の中央…大木に近づいていく。

「…ここです。俊樹君は大抵この木の上で寝てますよ」

「…は？」

一瞬、何を言ったのか理解できなかった。…この木の…上？

「…なんでまた…？」

私の不思議そうな表情に苦笑しながら、久藤君は

「このあたりは人もそんなに来ませんしね。木の上なら誰にも気付かれないですし、ある程度安心して寝られるんですよ」

「…ふうん…」

なんとなく言いたいことはわかったけど…やっぱりまだ半信半疑だ。そんな私の心情を読み取ったのか、久藤君は

「…まあ、信じられないのも仕方ないですよ。僕も最初はそうでしたから…。では、いるかどうか確認してみましようか？」

そう言うと、久藤君は大木に向き直り…

ドガア！

思いつきり大木の幹を蹴った。

大木はその衝撃で揺れ、木の葉がガサガサと音を立て、うち数枚は地面に落ちてきた。

しばらくガサガサとした音が響く、しかし、それ以外に何の変化もない。

私はここにはいないと思い、そう言おうと思つて口を開いた。…次の瞬間。

「ぬぎゃあああああああああああつ!!??」

ものすごい叫び声。…というか悲鳴。それと同時に大木から明らかに木の葉とは違うものが落ちてきた…。

Another Side Out

基本的に俺はあんまり怒ったりしない。

でも例外つてモンがある。それは大きく分けて2つ。

トツポを粗末にされた時と…。

…熟睡してるのを邪魔されたときだよつ!!

授業が終わつて放課後になつてもまだ眠かつた俺は部室には行かず、いつも秘密の場所として使っている中庭奥の林を抜けた先…ちよつとした広場になつている場所の中央にある大木の上で寝ていた。

ただでさえ人氣がなく、それでいて大木の上という見つかりにくい場所のおかげで、俺はある程度は安心して眠れるのだった。ここはいわゆる俺の”隠れ家”である。

…で、そんな俺の”隠れ家”で俺が眠っていると…。

ドガア!

大木にすごい衝撃が走つて…ものすごく揺れた。

寝ていて油断していた俺がそんな異常事態に対応できるはずもなく…。

「ぬぎゃあああああああああああああつ！！？？」
なんていうすごい叫び声を上げながら地面に落下。

咄嗟に受身をとったとはいえ、背中にもものすごい衝撃が走る。

…すぐにでもこんな真似をした野郎を血祭りに上げてやるうかと思
ったのだが…。

「おはようございます。俊樹君」

目の前で晃がいつもの笑顔で俺を見下ろしているのを見て、俺はな
んとなく全てを理解した。

…ああ…またコイツの仕業か…ってなあ！

よく考えればそうだ。あの衝撃はどう考えても”木の上に誰かがい
ること”をわかった上でやってる。

そして俺がここにいることを知ってるのはコイツ…あとは奈々美と
霞くらいだった。

「…晃君。言い訳は考えてるか？」

殺意で人が殺せたらどんなにいいだろうね？

そんな俺の殺気に気付いているはずの奴は笑顔を崩すことなく

「アハハハハ。冗談が過ぎますよ？ 俊樹君」

そんなことを言い出した。

…はい、ぶつつーん。

「…テメエ。今ここで冗談かどうか証明してやらあああつ！！」

俺は思いつきり拳を振りかぶると、そのまま目の前の奴の顔面目掛
けて拳を…

「ちよつと篠原！ 久藤君もふざけてないでちゃんと理由言わない
と！」

振り下ろせなかった。俺を制止する声、そっちに視線を移すと、美
里がいた。

そんな美里の言葉に、晃はやれやれと肩を竦めて

「まあ、冗談はこのくらいにしておきましょうか」

「…冗談…だと…？」

冗談でこんなことされちゃたまつたもんじゃない。

だが、そんな考えも美里の言葉で吹っ飛ぶこととなった。
「お客よ。依頼部にお客さんが来たの」

「まったく…そういうことは早く言えよ！」

事情を聞いた俺は晃と美里とともに部室に向かって走っていた。
正直まだ晃への恨み云々は消えちゃいないが貴重な客を待たせるわけにもいかない。

「…どうかしましたか？ 僕の顔をジロジロ見て…？」

「…」

「しゃあしゃあと…」

「…まあいい。さっさと行くぞ」

俺たちは部室へと向かった…。

ガラガラガラ…。

「奈々美…って…」

扉を開けると、大惨事だった。

別に比喻とかではない。まさに大惨事だったのだ。

お茶とトレイが派手にぶちまけられていた。その惨事は先日の比ではない。

理由、原因は言うまでもあるまい。奈々美である。

「うろう…」

奈々美はほとんど泣いていた。…”接待係”だよな？

「ずいぶん派手に転んだな…。まったく…」

俺はため息をつく、いつものように片づけを始める。依頼部ではもう日常茶飯事の光景だ。

だからみんなも何も言わずに手伝っている。こういうことには無駄にチームワークがいい。

「制服も濡れてんな…。とりあえず上だけ脱いで俺の制服着とけ」

俺は制服を脱いで奈々美に手渡す。

「すみません…俊樹さん…」

本気で落ち込んでやがるな…。…まったく…。

「…まあ、失敗は誰にでもある。とりあえず制服乾かさないとな」
俺はそう言つて、隣の倉庫に続く扉の方へ奈々美を促した。

「ありがとうございます…」

奈々美はそのまま倉庫へと入っていった…。

「…で、何でここにきたんだっけ？」

えーと…。

「…あの…」

恐る恐るといった様子で聞こえた声。こんな声の持ち主はウチのメンバーにはいない。

…あゝ、そうだったそうだった。

振り返ると、案の定そこには見慣れない女子生徒。学年バッジは2年を示していた。

「あゝ…。待たせて悪かったな。ようこそ、”依頼部”へ」

俺は改めて、その生徒を歓迎したのだった。

五ノ話 「東ノ間ノ”平穩”」 (後書き)

しばらくは日常パートが続きます。

戦闘もない予定なので期待している人はご了承下さい。

六ノ話 「神ノ使イ」 (前書き)

今回の依頼は迷い猫の搜索。

割と楽な仕事だったからあっさりと仕事は終わった。

そんな仕事の風景にふと、昔の光景が重なったのだった…。

六ノ話 「神ノ使イ」

「あゝ…。待たせて悪かったな。ようこそ、”依頼部”へ」
俺はそう言つて、その女子生徒を歓迎したのだった。

いやあ、美里の仕事からこつても連続して依頼がくるなんてホントにレアだな。

…まあ、美里の一件は妖魔を取り逃がしたこつちの責任なんだけどな。

「あ…はい…」

女子生徒は頭を下げて答える。…うゝん真面目な娘だ。

”適当”がウリの依頼部には貴重だねまったく。空気がリフレッシュされてるよ。なんかもうその辺の空気清浄機より便利だと思うね。

「さて…じゃあ話を聞こうか」

だいぶ思考が脱線したが、とりあえず俺は彼女の話の話を聞くことにした…。

「…なるほど、迷子の猫の搜索、ねえ…」

「はい…」

どこまでも控えめな女子生徒…渡瀬わたせは小さく頷く。

依頼内容は単純明快。家で飼っていた猫が行方不明になったらしい。普段も外へ散歩に行くらしいが、今回はあまりにも遅すぎるということだ。心配なのだそう。

「…猫つていつ帰ってくるかわからないものなんじゃ…?」

当然の疑問を口にしてみる。

「そんなんですけど…あの子、そんなに遠出する子じゃないから…心配で…」

別に必ず連れて帰る必要はないらしい。ただ無事を確認さえできればそれで構わないとのこと。

「…まあ、OK。やれるだけのことはやってみるわ」

俺はその依頼を引き受けた。

「あ…ありがとうございますっ！」

彼女はそう言って、大きく頭を下げた。

…おおう、背中折れそうな勢いだな、流石に少し遠慮してしまう。
とりあえず頭を下げ続ける渡瀬をどうにかすることから始めるのだ
った…。

「えっと、じゃあ猫さんを探すんですか？」

とりあえず渡瀬から目的の猫の写真を借り受け、今日は帰ってもらった。首輪もついているらしいから絶対に見つけられないわけはないだろう…が。

大体この街全部探すとしてもすごい広さだぞ…。

とりあえずそれは後で考える（現実逃避する）ことにして、俺は後でやって来た奈々美に依頼の内容を説明していた。

上の制服は干してあるので、今奈々美は俺の制服を着ている。少し大きかったが何とかかなりそうだ。

…この格好、奈々美狙いの男子生徒が見れば悶絶モンだろうなあ…。
不本意にも依頼部の女子メンバーはみんなミスコン出場経験アリという美少女揃いだ。

まあ、それは認める。実際奈々美にもファンの男子生徒はいっぱいいるけど…。

…このド天然のどこがいいのやら…。この格好写真に撮って男子生徒どもに売ってみようか？

「…？ 俊樹さん？」

そんな俺の考えに気付くことなく奈々美は首を傾げる。

「あ…。いや、なんでもない」

俺はそう言って今の考えを振り払う。まあ実際やるつもりはなかったけどな。

奈々美はしばらく不思議そうな顔をしていたが、特に気にすることはなかった。

はい、というわけでやってきました”夜の学校”！まさかこんなにも早く再びここに集うことになるとは…。

「ねえ、篠原…。こんなところでなにをするのよ？」
今回は美里にも来てもらった。いずれ美里にもここに加わってもらう日がくるからな。

ちなみにあれから一日中探してみたが、この街全部探すなんて埒がないので結局”この方法”に頼ることとなった。

「ま、見てなつて。これが一番手っ取り早いんだから不思議そうな顔をしている美里に俺は言った。」

「うし、始めるか」
俺たちは頷きあうと、意識を集中させた…。

「どうだ…霞…いたか…？」
俺は意識は一定の集中を保ったまま隣で同じく集中している霞に聞いた。

「…確認しました…。南東に30キロ…」
霞はその方向を見つめながら、静かに言った。

「ええ…つと…？ …お、あれか」
俺も霞の言った場所に意識を集中させる。すると確かに”それ”はあった。

「…なにがあったの？」
「探してた猫」

怪訝そうに聞いてくる美里にはつきりと即答してやった。

「…は？ ……つて、えええ！？」
「…おおう、初々しいねえ。」

「まあ、正確には、”猫についでた渡瀬の霊力”だけだな」
「…え？」

疑問符だらけの美里に、またもや俺の霊能力講座が始まった…。

全ての人間には素質のあるなしに関係なく霊力が少なからずある。
その霊力は”物に移すことが可能”なのだ。

方法は大きく分けて2種類。

1つは、霊能力者が意図的に霊力を”込める”方法。

道具に込めれば”霊具”れいぐ。札に込めれば”霊札”れいふ”といったように術式を組み込んだりそのまま武器にしたりする場合、霊能力者たちはまず決まってこの方法を使う。

2つめは、素質や知識のない人間が無意識に霊力を移すパターン。

これは一般的に”残留思念”ざんりゅうしねん”とかそういった類の物で、持ち主が特に思いを込めて使っている物にその持ち主の霊力が少しばかり移る、といったものだ。

今回利用したのはこのパターン。

このパターンの場合、霊力は”物”だけでなく”生物”にも移る。

今回は探している猫に移った渡瀬の霊力をこうして探し、そしてうまく見つけることができたのだった。

「…それはわかったけど…。どうして最初からこうしなかったの？」
俺の説明も終わり、美里が疑問を投げかける。

「何でって、そりゃ…神経使うからだよ。今回すぐ見つかったのも運がよかつただけだしさ」

俺たち霊能力者でも思い入れのあるものには霊力を移してしまう。

これは誰にも防げない”自然現象”なのだ。

だが、俺たち霊能力者と一般人とじゃ霊力の最大値が違う。

つまり”移してしまう霊力の量”も全然違うのだ。

ただでさえ少ししかない一般人の霊力のさらにごく一部が移ったものをこの広い街から探し出すなんて”砂漠にスプーン一杯分の砂糖を撒いたんで探してみてください（笑）”

と言われたようなものである。

今回は一日目で見つかったがそれは偶然で、本当は何日もかけて探すつもりだった。

「まあ、すぐ見つかったならなによりだ…。さ、行くうぜ」
俺はさっさと屋上を後にする。

「あ…待ってってば！」
それに美里、そして他の面子も続くのだった…。

「え〜と…？ たしかこの辺だったよな？」

俺たちが訪れたのは、古くなって廃墟となってしまった神社跡だった。

「ずいぶん意味ありげなトコだなオイ…。さっさと見つけちまおうぜ」

俺の言葉に、その場にいるみんなが頷く。

俺たちは手分けして猫を探すことにした…。

「俊樹君、俊樹君」

しばらくして、晃が声をかけてきた。

「どうした？ いたか？」

いや…この奴の雰囲気…。まさか…。

「この木陰とか人目にもつきにくそうですし、隠れて昼寝するのに適してませんか？」

晃はいつも笑顔のままそんなことを抜かしやがった。

「おー、確かにここなら隠れてサボっても誰にもバレない…って
ちっげーよ！ 何探してんだよお前はよお！？ またお前の隠れ場
所増えちまったじゃねえかこの野郎！！」

夜中にもかかわらず、俺の声が木霊する…。

「アツハツハツハ。俊樹さんは元気ですねえ」

「ああ…元気だな。…ならこの元気をテーマで発散させてやらああ
ああああ！！！」

はい、喧嘩勃発…

「ちよつとあなたたち！ 真面目に探してよ！！！」

…するところを、美里にぴしゃりと止められた。

「…ハイ」

…なんだろう、この敗北感。

「俊樹さん、俊樹さん」

またしばらくして、今度は奈々美が話しかけてきた。

「…お前までくだらねえこと言うんじゃないやねえだろうな？」

「そつ…そんなことあるわけじゃないですかっ！ ほら、あれ

…」

俺の言葉を慌てて否定した後、奈々美は茂みの奥を指差した。

「あ…」

そこに、いた。写真取りだして見比べてみる。うん、間違いなさそ
うだ。

「怪我してるみたいですよ…？」

「ん…」

近くで見ると、確かに足を怪我している。

「なるほど…。だから帰れなかったのか」

「今、治してあげますね…」

そう言つと、奈々美は猫の傷口に手をかざし、そつと眼を閉じた。

「…」

途端、奈々美の手から明るく、そして暖かな光があふれ、傷口を優

しく包み込む。

「あ……」

そんな光景を見て、俺は昔のことを思い出していた……。

「……はい。もう大丈夫ですよ？」

奈々美は集中を解き、優しい笑顔を猫に向ける。

猫はニャア、とひと鳴きすると、そのまま奈々美の腕の中に納まってしまった。

「あ……。どうします？ 俊樹さん？」

そんな猫を見て、奈々美が俺に聞いてきた。

「……このまま渡瀬の家の近くまで連れて行けば良いんじゃないか？」
俺がそう言つと、奈々美は

「……そうですね」

そう言つて頷いてくれた。

「……なんだか、前もこんなことありましたね？」

「……奇遇だな。俺も同じこと考えてたよ」

「え……。そうなんですか？」

俺の言葉に、奈々美が意外そうな顔をする。そのまま見つめあい、同時に笑みを浮かべた。

あれは俺がまだ1年生だったころ、まだ依頼部を立ち上げて間もなかった俺は、霊力の素質のある生徒を探して回っていた。

そんな中、神社で巫女の手伝いをやっている坂本奈々美という生徒の情報を得た俺は、なんとか彼女とコンタクトをとろうとしていたところだった……。

ある日の帰り、ちょうど奈々美の神社の前を通りがかったときに隅の木陰でしゃがんでいる彼女を見つけた俺は、なんとなく近くま

で行って様子を見てみたのだった。

すると、そこには神力の治療術で怪我をした野良猫の傷を癒している奈々美がいた。

『なにしてる…お前…』

『え…！？ ひゃあああっ！？』

どうやら俺の存在に気付いてなかったらしい…。派手に驚いて、そのまましりもちをついてしまう。

『おいおい…大丈夫か？ …ほら』

俺はそんな奈々美に手を差し出す。

『あつ…。ありがとうございます…』

奈々美は、恐る恐るといった様子で俺の手をとる。俺はそのまま奈々美の手を引いて立たせてやる。

立ち上がると、奈々美は頭を下げ礼を言った。

『あの…見ました…？』

多分さっきの術のことを言っているんだろう…。

『ああ、見たよ』

『ひうう！』

奈々美はそれを聞くと、絶望したような表情になり、そのまま泣く一歩手前まで表情を歪めた。

『…ったく…。神術しんじゆつを使うならもっと人気がないところでやれよ…』

『…でも…。…って、あれ？ なんて神術を…』

偶然にも、こうして俺は奈々美とのコンタクトに成功したのだった。それからお互いのことを話したりして意気投合し、奈々美は今依頼部の接待係、そして俺たちの貴重な回復・援護役として頑張っている。…まあ援護はさっぱりだが。

だが、個性的な面子揃いの依頼部メンバーの中で奈々美のピュアさは…なんかいい感じに癒しになっていた。

「はい、もう大丈夫ですからねー」

そう言っつて奈々美は抱きかかえていた猫を降ろした。

ここは渡瀬の家の近く。…何だかんだで結構遅くなってしまったな。奈々美に降ろされた猫はもう一度ニャア、と鳴くと、そのまま夜闇の奥へと消えていった…。

「フフ…。」ありがとう”って言われちゃいました」

”余計なお世話だったよ”って言っつてたかもしれないぜ？”

嬉しそうに言う奈々美にそう言っつてからかかってやると、なんだか泣きそうな顔をされたので

「…わーっつたよ…」

と、俺はさっさと白旗をあげた。

…まったく、本当に子供みたいな奴だな…。

「…もう、1年になるんですね…こうしてみんなと一緒にいるのもふと、奈々美がそんなことを呟いた。

俺が依頼部を立ち上げ、奈々美、晃、霞の3人を誘っつて、こうして仕事をこなしている生活もあつという間に1年になっていた。

仕事自体はそれほど多くはなかったが…もうこんな生活が当たり前前になっつている。

「新しく美里も加わつたしな。また賑やかになりそうだ」

「そうですね」

そんなやりとりをしていると

「2人とも！ 帰るわよ〜！」

後ろから美里の声。振り返ると、みんなが待つていた。

「おつと。…じゃ、帰るか」

歩き出す俺に奈々美は頷き、歩き出す。

「ねえ、俊樹さん」

「ん？」

途中、不意に奈々美が話しかけてきた。

「これからも、よろしくお願いしますね？」

そんなことを言っつてくる奈々美に、俺は笑みを浮かべて

「もちろんだ、お前のノーコンも治さんとなあ？」
そう言っただけだ。

「…あう」

そんな俺の言葉に俯いてしまう奈々美。

…だが、そんなやりとりももう1年になる。

俺たちにとってはこんな日々が既に”日常”だったのだ…。

六ノ話 「神ノ使イ」(後書き)

お久しぶりです。

ペースが落ちてきてるなあ…。

なんとか一週間に一回は更新したいものです。

七ノ話 「静力」ノ少女」(前書き)

依頼部に入部して2週間。

私にとってはここでの生活も”日常”の1ページになるつもりとしていた。

しかし、そんな今でも打ち解けられない少女がいたのだった…。

七ノ話 「静力」ノ少女」

Another Side

「」

「…(カタカタカタ)」

「…zzz」

放課後の依頼部室。今、部室にいるのは私とPCに向かっている朝比奈さん、そして机に突っ伏して寝ている篠原の3人。

「」

「…(カタカタカタ)」

「…zzz」

なんていうか…すごく気まずい。かなり居心地が悪い。

依頼部に入部して2週間。篠原や久藤君。坂本さんとは割りと話すようになつていたのだが、いつも無口な朝比奈さんとはまだ一言、二言程度しか話したことはなかった。

(ひよつとして私、嫌われてるのかな…)

先日、そんなことを篠原たちに話してみたのだが…。

『あ…。霞は人見知りするからなあ…。シャイなんだよ、シャイ』
『僕たちも最初は美里さんと同じことを考えましたからねえ…』

『少しずつ話してれば、自然と心を開いてくれると思いますよ？』
と、そんな返答が返ってきたのだった。

まあ簡単にまとめると、朝比奈さんは”人見知りだ”ってことなので、ゆつくり時間をかけて接していこうと思つてただけ…。

(流石に…気まずい…)

あれから何度か話しかけたりしたのだが、結局会話が續かずに沈黙

が訪れてしまう。

なにかきっかけみたいなのがほしいなあ…。そんなことを考えていた。

（そういえば…朝比奈さんのことはまだよく知らないんだよなあ…）
他の3人とはよく話すから、大体どんな人物なのかはわかってきたつもりだ。

でもまだ朝比奈さんに関しては、“無口” “人見知り” “いつもPCに向かっている” “背が低い” “眼鏡” “髪型は藍色のショートカツト” etc…。

といった風に”外見的な”特徴しかわかってなかった。

…やっぱり同じ部活に所属している以上、このままなのはいけないと思う。

（ん…きっかけさえあればなあ…）

そんなことを考えていた時だった。

ガラガラガラ…

「失礼しま〜す…」

扉が開かれ、1人の男子生徒が入ってきたのだった…。

「えっと…何でもやってくれる”依頼部”ってこのことかな…？」

「あ…いらっしやいませ」

今は坂本さんもおらず、代わりに私が接待係として男子生徒を迎えた。

私のそんな様子を見て、その男子生徒はここが目的の場所であったと確信したらしく、安堵の表情を浮かべた。

「とりあえずここに座ってください…」

私はいつものソファへと男子生徒を案内する。これも坂本さんのを真似てみた。

とりあえず篠原を起こさないと…。

「朝比奈さん、ちょっと篠原起こすの手伝ってくれない？」

私はPCに向かっている朝比奈さんに声をかける。…あ、自然と声

ていた。

「…部長が何度揺すつても起きなかつたので」

朝比奈さんはいたって冷静に篠原の嫌味に対応していた、ちなみに今は嘘だ、朝比奈さんは問答無用で黒板を取り出したし…。

「…まったく…そんなだから友達ができないんだ…」

「部長もここ以外で人間関係を作らないあたり、お互い様だと思いますが」

「…orz」

あ、凹んだ。

「あ、あのさ…そろそろ話聞いてあげた方がいいと思うんだけど…」
流石に気の毒になってきた私は、とりあえず話を先に進めることにした…。

「なくした書類の搜索、ねえ…」

男子生徒が去り、再び3人になった部室の中、篠原は呟いた。

彼はクラス委員長で生徒会に提出する書類があつたのだが、それをどこかになくしてしまつたそうだ。

数日は自分で探したのだがどうしても見つからず、今日噂を頼りにここまでやってきたのだとか。

「…つーかな大事なモンなくすなよ…」

それについては同感である。

学校でなくしたのは間違いないそうなのだが…。

「まーとにかく、あんまのんびりしてられなさそうだからな、今からパパッと見つけるか」

そう言つて立ち上がる篠原。確かに書類の提出はもうすぐらしいからのんびりはできないけど…。

「坂本さんと久藤君はいいの？」

また、あの微量な霊力を探知するのなら人手は多いほうがいいんじ

やないかと思つての判断だった。

だが篠原は首を横に振って

「いや、今回はその方法は使わない…というか使えない。けど、校内”っていう搜索範囲の確定もできてるし、それでコイツがいればもっと楽に見つかるさ」

そう言つて篠原はポン、と隣にいる朝比奈さんの頭に手を置いた。

「…」

朝比奈さんは相変わらず無言でされるがままになっている。

「ホラ、行くぞ」

篠原はさつさと部屋を出て行く、朝比奈さんもそれについていった。

「…？」

私はどういふことなのかわからないまま、篠原の後を追いかけるのだった…。

七ノ話 「静力」ノ少女」(後書き)

更新遅れてすいません。

リアルの方でテストだったものでなかなか執筆に集中できず…。
また少しずつ書いていきます。

八ノ話

「千里見通ス眼」(前書き)

美里と霞。 2人が未だに余所余所しいまま仕事に取り掛かる。

この依頼をきっかけに2人が打ち解けられればいいのに…。

そんなことを俺は考えていた。

そしてそんな考えをもつ何度もしていることに気付いて俺は苦笑するのだった…。

八ノ話 「千里見通ス眼」

今回の依頼は紛失した書類の搜索。

今回は時間がないこともあって、メンバーは俺、霞、美里の3人。そんな俺たちは今、すっかりおなじみとなった屋上にいる。

「で…3人でどうやって見つけるの？」

怪訝そうな顔をして美里が尋ねる。

「言つたる？今回は前の方法は使えない」

あれはそもそも”持ち主が特に思い入れのあったものに移った持ち主の霊力”を感知するものであって、なんの思い入れもない書類に霊力なんて移っているとは思えない。

というか移ってたらそれはそれであの生徒に対して変な視線を向けることになる。

「というわけで、だ」

俺は再びポン、と霞の頭に手を置いた。

今更ながら、霞はかなり小柄だ。背だけ見ると中学生くらいにしか見えない。ショートカットで大人しい性格からもそれを連想させる。まあ本人はそれを少なからず気にしているのだが、依頼部において霞が子ども扱いされているのは明白だった。

で、今回はそんな霞の能力の出番となる。

「結構疲れると思うが、頼めるか？」

「…（コクン）」

霞は頷き、スツ…と目を閉じた。

しばらくの沈黙、そして霞はゆっくりと目を開いた…。

「あれ…」

この数日、依頼部で訓練を受けていた。そうしているうちに、私は自身の霊力、そして他人の霊力の変化を感じ取るまでにはなっていた。

まだ篠原達のような霊能力者の大きな霊力の動きしかわからないが…そんな私にもこの”動き”は確かに感じ取れた。

朝比奈さんの顔　　目のあたりだろうか…？　　を中心に霊力が激しく動いている…。

「お、どうやら自主練もちゃんとやってたみたいだな。感心感心。」
そんな私の様子を見て、篠原は満足そうに頷いていた。

「あの…これは？」

私はそんな篠原に聞いてみる。

「ああ、霞はもともと情報収集や索敵、探知能力が高いからそれが主な担当なんだよ。まあ術の援護もこなせるんだけどな」

「へえ…」

確かに今まで探知系の仕事ではいつも朝比奈さんが真っ先に見つけていたっけ…。

「で、だ。その探知能力の高さこそが霞の能力なんだよ」

篠原は、静かに意識を集中している朝比奈さんに視線を向けて言った。

Another Side Out

霊力による探知、それは同じ霊力はもちろんのこと、極めればそれだけ探知できるものも範囲も増えていく。だが、術というものは当然ながら霊力を消費し、高位の術である”秘術”^{ひじゅつ}の類は人間の最大霊力でも発動が困難になる。

なら、そんな秘術をどうやって発動するのか、答えは簡単。霊具や

霊札、あるいは自身に施した術式を用いて発動すればいい。

「そして、霞はそんな秘術を目に施してるんだよ。探知能力はその副産物」

「…その秘術って？」

美里に、俺は一呼吸置いて言った。

「…”千里眼”さ」

あらゆるものを見通し、探知する眼。まなこ千里見通す眼、”千里眼”。

霞はもともと探知能力の素質があり、その素質の開花、強化として千里眼の術式を施した。

術式を施すといっても方法はさまざまで、直接身体に刻み付けるものもあるし、霊力で間接的に施すものもある。

霞の場合は後者で、眼に俺が霊力で術式を施している。

素質があっただけに割りと簡単に適合したし、別に異常もなければ視力が落ちることもなかった。

今、霞が眼鏡をかけてるのはもとからである。

まあ、仮にも”秘術”。素質があるとはいえ、まだまだ未熟な霞が使いこなすには荷が重く、発動すると身体に無理な負担がかかってしまう。

…まあ、具体的には一気に疲労感が押し寄せるといった感じだ。

「…見つけました」

「…お」

そんなことを説明していると、不意に霞が声を上げた。

それと同時に術を解いた霞の身体が糸の切れた人形のようにぐらりと揺れ、崩れそうになる。

「おっ…と！」

俺は慌ててその小柄な身体を受け止めた。まったく…こんな小柄なのによく頑張る奴だ。

「…すい、ません…」

霞はやはり疲れているのか、息が荒く、ぐったりとしている。

「すまん、無茶させて」

「……」
俺の言葉に霞は小さく、けれど確かに首を横に振った。
「やめてください……。らしくもない……」
「オイオイ……どういう意味だよ、ソレ」
まあ、そんなことが言えるなら大丈夫か。
俺たちはしばらく霞をそのまま休ませた後、霞の案内で屋上を後にしたのだった……。

「……ここです」
「うわぁ……」
「……」
ちなみに霞、美里、俺の反応である。

霞の案内で到着した場所、そこは”資料室”だった。
「おいおい……なんで書類の山なんだよ。”木を隠すなら森の中”ってか。隠してどうすんだよ、見つけないと大変なんだろ？ストライキすんぞコノヤロー」

あまりの面倒臭さにあらゆる愚痴が口から出てくる。

「ま……まあまあ……。で、朝比奈さん、細かい場所はわからないの？」
「……」

美里の問いに、霞はただ首を横に振った。……って、マジかよ……。

「ハア……じゃあ頑張つて探すか……」

ここに来て、奈々美と晃がいないことが悔やまれた……。

Another Side

「うっん……」

探し始めて1時間。流石に一筋縄ではいかないらしい。

それに…せつかくなんだからこういう共同作業をきっかけに朝比奈さんと話せるようになりたかった。

「朝比奈さん、あつた？」

「…」

朝比奈さんはやっぱり無言で首を横に振った。

うーん…やっぱり話せないなあ…。

というか、やっぱり千里眼の影響なのか、朝比奈さんは疲れているようだった。

流石に危ないなあ…私がそう思っていると…。

ガタン！

「あつ…！」

朝比奈さんが床に積んである資料の山に足を引っ掛け、そのまま山が朝比奈さんのほうに倒れそうになった！

「危ない！」

篠原じゃ間に合わない。そう思った私は、咄嗟に飛び出していた…

Another Side Out

「おいおいおい、大丈夫か!？」

物音に慌てて振り返ると、倒れそうな資料の山を必死で押さえて止めている美里と、その後ろに霞。

「…っと。大丈夫か？」

それを見てすぐに状況を理解した俺は、慌てて美里の加勢に加わったのだった。

「大丈夫か?霞」

「…(コクン)」

霞は頷いたが、やっぱりしんどそうだ。

…今回3人で仕事をしたのは、”急ぎ”という理由もあったが、それ以上に霞と美里を仲良くさせようという意味もあったんだが…。さすがに無理させすぎたか…？

そんなことを思っている…。

「大丈夫？怪我はない、朝比奈さん？」

そう言いながら心配そうに霞を見ている美里がいた。

…こうして見ると、やっぱり霞が年下に見えるな…。

美里の言葉に、霞はやっぱり無言かとも思ったが…。

「…大丈夫です。ありがとう、九条さん…」

「…あ…」

見事に俺と美里の声が重なる。

…こうして素直にお礼が言えるなら、やっぱり時間の問題だな…。

俺はそんなことを思っていた…。

「なあ？霞」

「…？」

俺はしばらくして霞に声をかけた。

「美里と少し打ち解けてきたじゃないか。話せそうか？」

そんなやりとりをするのも、もう3回目なんだと思うと少し笑えてくる。

実は依頼部に最初に加入したのは霞である。

霞は元々こんな内気な性格ゆえ、クラスでもずっと1人だった。

そんな霞を招きいれるのにも苦労したが、それ以上に苦労したのが後々加入した奈々美と晃との人間関係だ。

確かそのときにもこんな風に俺が霞のフォローをしてたっけ…。

「…」

俺の問いに、霞はしばらく黙っていたが、やがて口を開き

「…大丈夫です。危ないところを助けてもらいましたし、頑張っ

みます」

そう、確かに言ってくれた。

…うん、これでは書類が見つければ…。

「あっ…あつた！」

そう思った時、後ろで声が聞こえた。振り向くと、美里が何かを手に持ってこちらに見せていた。

「…どうやら、見つかったようだな…」

こうして、俺たちの”仕事”は大成功となったのだった…。

Another Side

「あの…」

部室へ帰る途中、珍しく朝比奈さんが声をかけてきた。

「え…どうしたの？」

私はそれに内心驚きつつも答える。

「…」

しかし、朝比奈さんはそれきり俯いてしまった。

疑問に思っただ篠原のほうに視線を向けるが、篠原も黙ってこちらの様子を伺っている。

「…？」

そんな沈黙がしばらく続き、やがて意を決したように朝比奈さんは口を開いた。

「その…さっきは、ありがとう。私…こんなだけ…別に美里さんのこと、嫌ってないから…」

それだけ言っただ、朝比奈さんは行ってしまった。

「あ…」

今気付いた、さっき初めて朝比奈さんに”美里”って…。

「だから言っただろ？霞は人見知りしてるだけだっただって」

朝比奈さんの行った方向を見つめっていると、不意に篠原が話しかけてきた。

「俺も、奈々美も、昇だつてみんな最初はああだつたんだ。でも、本当はいい奴なんだよな」

それは素直に頷ける。篠原達の言つとおり、朝比奈さんは少し不器用なだけだつた。

…この日から、私も朝比奈さんと自然と会話することができるようになつていたのでつた。

八ノ話 「千里見通ス眼」(後書き)

とりあえず今日は2話更新です。

もう気付いているかもしれませんが、順番に依頼部メンバー1人1人を中心とした

話を書いています。

奈々美、そして今回が霞…。ということで次はいよいよ彼の出演です。

九ノ話 「笑ミ浮カベシ者」(前書き)

今日も今日とてサボる晁。

客が来てもしいちいち呼びに行かなきゃいけないからイヤなんだよ…
くそ。

でも、そんな風にサボる晁の真意をなんとなく察してしまっている
俺は無理矢理どうこうするつもりも無かったりするのだった…。

九ノ話 「笑ミ浮カベシ者」

「…ハアツ…！ハアツ…！」

息が荒いのは断じて俺が変態だからではない。

俺はもはや恒例行事となったこの作業に半ばうんざりしているのである。

「…フ箇所目…ハズレ…」

ここもハズレかよ…。自信があったのと、疲労とで俺はその場に入り込む。

あゝ…今日も空が青いなあ…。

窓から見える景色は、いつもと何一つ変わらぬ晴天だった…。

「いやがった…」

俺が”奴”を発見したのはいつぞやの廃墟と化した神社の隅。

…野郎、さっそく実行か。

俺がものすごい殺気を込めて睨んでいると、ソイツはのんびりとした調子でこちらに気付き

「あ、こんにちは。俊樹君も昼寝ですか？」

なんてことを言いやがった…！

その後、何かが切れる音とともに俺の叫び声が木霊したのは言うまでもない…。

…今から数時間前。なんか一人足りない依頼部室でのこと。

「…暇ね…」

それぞれ思い思いのことをして放課後を過ごしていた中、美里が呟いた。

「仕様です」

俺は机に突っ伏したまま答え

「美里、依頼部に客なんて2・3ヶ月に1回が関の山なんだから暇なのは慣れておけよ？」

そんなことを言ってみる。…言つてて悲しくなってきた。

実際、この依頼部が非公式で生徒の中には噂程度の広まりしかない以上、客なんて数えるくらいしかないのは事実だった。

そんな俺に、美里は呆れたように

「…ならなんで貴方たちはここにいるのよ？」

なんでかって？ 決まってるじゃないか！

「…暇だから」です」

俺、奈々美、霞の声が見事に重なって響く。

…暇だからここに来て暇になつてるって結局どうなんだろう…。

そんなくだらないことを考えていた…。

なんやかんやで前の依頼から既に1ヶ月ちよつと。依頼はまったく来ていない。

桜が散りきつたのを見ると、もう春も終わりに差し掛かっていた。

「……暇…」

全員の声が部室に、校舎に木霊する。…え？ なんか一人足りないって？ 晁ならサボってるよ、別に仕事もないんだから好きにさせてやるよもう。今日は俺は眠いんだあ。

俺が再度惰眠を貪ろうとしたところで…

ガラララララ…。

「失礼しまーす」

聞きなれない声が入り口のほうから聞こえたのだった…。

久々の客だった、俺たちにとってそれは神の祝福とも言える。…いや、なんか言い方がおかしいが。

俺たちはその声を聞かないや神速のごとき速さで姿勢を正し、美里は部室に入ってきた生徒の元へ、奈々美は即座にお茶を淹れに行つた。

唯一動じなかったのは霞ぐらいである。

「ようこそ、依頼部へ！」

日々の疲れも吹き飛ばすような100万カラットの笑顔で挨拶をする美里。

この時、女つて怖いと改めて実感したのは秘密である。

「え、あの…？」

流石にその不自然すぎる笑顔に、女子生徒は固まってしまふ。

「あの、もしよかったらお茶でもどうぞ！」

そんな様子を悟ったのか、奈々美が手際よくお茶を用意していた。

…お前、よく転ばなかったな。

「ホラ、篠原！ お茶菓子とか無いの！？ お客さんよ！」

「トツポしかありません」

あ…、前買い置きしてたのが適当に残ってたっけか。

そんなこんなでやたらやる気になつてる美里と奈々美に半ば強引にその女子生徒は引きずり込まれたのであった…。

…で。お客ということ、どこかでサボつてる晁を探すことになったのだった。

当然ながら俺はみんなにも手伝うように呼びかけた。奴の行動範囲（サボり場所）はあまりにも広い。この学校内でも骨が折れるといふのにもし校外だったら…と言つてみた、のだが…。

「私はまだ久藤君のことよく知らないし」

「私はお客さんの接待がありますし」

「…晁さんの隠れ場所なら、部長が一番よく知つてると思いますが」と、一蹴。

お前ら、間違つてる。”サボり場所の予想がつくぐらい何度も探し回つてる今の状況がおかしい”んだ。これじゃあまるで晁がサボるのは至極当然のことみたいじゃないか。

このままでは晃「サボリ魔の方程式が出来上がってしまつ。
お兄さんは優しいからそんなのは許しませんよ！

「ハッ！」

なんかわけのわからない方向に思考が行ってしまったが、とにかくにもこうやって晃は見つけた。

で、今はコイツを学校まで引きずってるわけである。

「まったく、俊樹君もご苦労なことですね。わざわざここまで僕を探しにくるなんて」

白々しくも晃はそんなことを口にする。

「うるせえよアホ。誰のせいでここまで来たと思ってる」

「アハハハハ。では、お互い様ですね」

コイツ…絶対楽しんでやがる。

まあ…実際コイツのこんな態度も慣れてしまった。

…慣れるのもどうかと思うが。

「…」

俺はふと、晃の左手に握られた刀に視線を向ける。

これを見ると、晃とはじめて会ったときのことを思い出す。そして、彼がなぜこつもサボるのかもなんとなくわかるのだ。

「…大丈夫ですよ？ これは僕の問題ですから」

「…思考を読むな」

コイツもよく俺を見透かしてくる。まあそれはお互い様なのだが。

晃は珍しく、何かに思いを馳せるように呟く。

「…みなさんには本当に感謝しています。僕はここにきてよかったです。だから、俊樹君もそう思い悩まないでください」

自分は後悔していない。今、この場所が自分にとっての”居場所”なのだ…。

晃の言葉は、穏やかな風の中に溶けていった…。

「親友が行方不明、ねえ…」

そんなこんなで晁を部室へと無事連れ戻し、改めて俺たちは依頼人である女子生徒の話聞いていた。簡単に要約するところだ。

彼女には仲のいい親友がいて、その親友が2日前から行方不明、と何日も出歩くような娘でもなく、ましてや両親にも連絡も無く突然消えたので不審に思ったらしい。

警察には届け出たがそんなすぐに成果が出るわけも無く、藁にもすがる思いでここを訪れたそうだ。

こんなところにまで頼るあたり、相当切羽詰ってるのだろう。

「…わかった。引き受けよう」

彼女がここを尋ねてきたのは幸運だったかもしれない。

俺はこの依頼に、ある”予感”を感じ取っていた。

…いや、それはほとんど確信に近い。

…今回の事件、妖魔が絡んでいる…。

他のメンバーも俺の真剣な様子に大体のことは察したらしい。

唯一それに気がついてない女子生徒は俺の言葉に安堵したのか

「あ、ありがとうございます！」

そう言っつて、深く頭を下げたのであった…。

九ノ話

「笑ニ浮カベシ者」(後書き)

みなさんお久しぶりです。

なかなかアイデアがまとまらずにプチスランプだったり学生の身分ゆえの忙しさから更新できずにいましたが、なんとか不定期ながらも更新を続けていこうと思っています。

なかなか更新できませんが、気長に見ていただきたく思います。

十ノ話 「狂気」ノ存在 (前書き)

久々に妖魔の絡んだ仕事が出来てきた。

足跡は意外とアツサリと見つかったが、その小賢しさから今回は一筋縄ではいかなさそうなことを俺は悟る。

そして、目の前に現れた光景はお世辞にもいい景色とは言えないものだった…。

今回は少しグロ注意です。

十ノ話 「狂氣」ノ存在」

女子生徒の話の話を聞く限り、最後に2人が別れた場所付近で彼女の親友が行方をくらましたと見て間違いないだろう。

俺たちは簡単に準備をし、夜を待ってから出発した。

余談だが、今回は思いのほかスムーズに準備が整い、俺たちは予定よりも早く出発できた。

いつも予定を遅らせる原因は晃に他ならない。

ただ、いつもサボろうと逃げる晃が今回珍しく何もしなかったのだ。晃をそうさせたのはやっぱり昼間のやりとりがあったからなのかもしれない。

「…ら…」

ふと少し前を歩く晃の後姿に視線をやる。

そこからは何も読み取れない、だが、確かな意志というものが感じられて…

「…つと。し…。…?」

ああもつ、うるさいな。人が感傷に浸つてるときに無粋と思わねえのかこの…

「篠原あああああああ!!」

「うぎゃあああああああ!!??」

振り向こうとした瞬間耳元でとてつもなく大きな叫び声が響いた。俺は情けない悲鳴をあげて耳を塞ぐ。

「破れた! 絶対鼓膜破れた! どうしてくれんだテメー!!??」

いきなり耳元で叫ばれたのだ。まだ頭がガンガンする…。

「…アナタがいつまでたつてもボーっとしてるからでしょ…」

叫び声の主 美里は呆れたように言う。

これが人の鼓膜を壊滅寸前まで追い込んだ張本人の台詞か。

ならば俺は断固抗議する! こんな横暴を許しては日本国民(主に俺)に危険が及ぶ!

「お前、それが耳元いきなり叫んだ奴の
「なに!？」

「…モウシワケアリマセンデシタ」
最後まで言い切る前に、俺は美里の迫力に負けて白旗を揚げてしま
っていたのだった…。

「…で、なにボーっとしてたのよ？」
隣を歩く美里が聞いてきた。

「ん…？ いや、別に…」
特に話すことでもないので俺はそっけなく答えた。

「…？ あ、久藤君がどうかした？」
こいつ…。

俺が何気にそのまま晃の後姿を見つめていた視線を読まれたらしい。
こいつは時々こうやって鋭いところを突くからなあ…。

「…ただ何となく見てただけだったの」
「…篠原、そういう趣味なら言っただけだろ？」

「ちがうわ!」

俺と晃が異様に仲いいことから一部の生徒がそういう方向に俺と晃
の関係を解釈してしまっているのがまた痛い。
というか断じて違う。

そもそも、べつ別に、仲良くなってるんだからね! …ごめん、
今の忘れて。

美里はふうん…と返事をした後、しばらく俺と同じように晃の後姿
を見ていた、が、思い出したように口を開いた。

「久藤君ってやっぱり礼儀正しくていい人よね、サボるのはやっぱり
いけないと思うけど、なんだか個性的な面々の中で唯一のオアシ
スって感じがする」

…俺たちは個性的ってか。まあ否定はしないが。

「…お前は”普段の”晃しか知らないからなあ…。ま、今夜あたり
運がよけりゃ見えるかもよ?」

「え？」

わけがわからず、美里は俺を見る。

俺が何か言いかけたところで…

「部長。ありました」

霞の報告が聞こえたのだった…。

「うわぁー…」

「…」

そこには確かに”あつた”。

それにすぐに気付いた俺と霞だけが声をあげる。

「…これは…」

いや、昇もどうやら気付いていたらしい。

ここは依頼人とその親友が最後に別れた場所のすぐ近く。そこには

”わかる人間にはわかる”が、”わからない人間には絶対にわからないもの”があつた。

「…ねえ、篠原。なにかあつたの？」

「私は少し違和感を感じますけど…何のことは…」

すっかり置いていかれてる2人は疑問符を浮かべたままだ。

「ああ、そつか」

俺は納得すると、そのままその空間に右手をかざし…

「…”解”！」

その霊力を、開放した。

「…！」

「…」

そこに現れた光景に、2人はただ息を呑む。

言葉はない、否、発することができなかったのだ。

そこにあつたのは、生々しいまでの赤、赤、赤。

妖魔が張つたであろう結界によって巧妙に隠されてはいたが、俺たちのような霊能力者には簡単に見破れる、そんな低級の結界。

小賢しいが、もし妖魔がこうやって隠したんだとすると…。

「少しばかり理性があるようだ。こりゃあ骨が折れる仕事になるかもな」

わざわざ人襲って、こうやって痕跡を隠すような奴だ、そう簡単にいくとは思えない。

「…この襲われた娘って、やっぱり…」

美里がこの光景を見て、恐る恐る問いかける。

俺はそんな彼女に

「ああ、間違いないだろうな。探してる女子生徒だ
そう告げた。」

まだ確証があるわけではない。ただ、この痕跡の位置や残っている
霊力の名残具合から襲われた日時を計算すれば…。

「…彼女、無事でしょうか？」

晃も流石に若干張り詰めた表情をしている。…いや、晃にとってこ
ういう光景は特に思うところがあるだろう。

「…無事を祈るしかないな。…晃、冷静に行けよ」

俺は晃にそう言うと、その痕跡から続く霊力の名残をたどり始めた
…。

俺たちは霊力の名残を追って、人気のない林に辿り着いた。

ここに来るまでに会話は無かった。無理も無い。あんな光景、場慣
れしてる俺だっつていい気はしなかった。

いや、ああいう光景を見ていい気がしない。この”感情”はきつと
忘れちゃいけない大切なものなんだと思う。

負の感情を抱くから妖魔が生まれる…。でも、その負の感情がある
からこそ、得られるものだっつてあるはずだ、少なくとも俺はそう思
ってる。

「…みなさん、止まってください」

名残を辿る俺たちを不意に霞が引き止めた。

「どうした、霞？」

俺は振り返り、緊張した面持ちの霞に問いかける。
そんな霞の口から告げられた言葉を聞いて、俺たちはすぐに駆け出したのだった。

「…少し先に妖魔の気配。それと、人の気配があります。どうやら襲われているようです…！」

Another Side

いったいどれほどの時間がたったのだろう。

グシャツ……グシャツ……

どれほどこの音を聴き続けたのだろう。

グシャツ……グシャツ……

どれほどの人間がここで死んだのだろう。

グシャツ……グシャツ……

周りに広がるのは、人間に流れる赤、赤、赤。

草木で緑が生い茂り、木々の香りがするこの場所には、この場所には似つかわしくない異様な赤と、異様な臭気が立ち込めていた。

私の目の前に広がっているのは、ただ真っ赤に汚れた草木と、周囲に散らかった”人間だったモノ”。

こんな光景、正常な人間ならきつと10秒と経たずに発狂してしまうだろう。

いや、私ももう発狂してしまっているのだ。

ただ単に、長い時間ここにおいて、この光景に見慣れてしまったから、驚くことがなくなっただけ。

今の私はきつと正常な思考能力を失ってしまっているのだろう。

…どうして、こんなことになっているのだろう？

…どうして、私はこんなところにいるのだろうか？

私の目の前には、赤黒い体表をした、成人男性くらいの体系の鬼のような”化け物”が、ついさっきまで”人間だった”モノに大きな中華包丁のような刃物を何度も、何度も振り下ろしている。

その度に臭気は増し、肉を潰すような不快な音が辺りに響き渡る。

私はただ、友達と一緒に学校から帰っていて、ただいつもの道を歩いていただけなのに。

そこに何かいつもと違っていたことなんて、1つもなかったのに…。突然目の前に現れた”ソレ”は、逃げられないように私の足を軽く切りつけ、私は成す術もなくここまで連れ去られてしまったのだ…。た。

私以外にも何人も人がここにいて、ここに運ばれてきた。

あれから何度も日が昇り、沈んで…。そうして目の前の化け物は1人、また1人とその刃物で人をただの肉塊に変えていったのだ…。…。

何度、その光景に恐怖しただろう。次は自分じゃないか、その刃物で私もあんな風になってしまっんじゃないか。そう思って今の今まで震えてきた。

だが、おそらくこれもこれで終わる。

何人もいたはずなのに、今現在”生きている”のは、私1人だけとなったからだ。

今刃物を振り下ろし続けているあの化け物が次の獲物を選別する時、それが私の最期だろう。

もう他に選ぶ人間はいない。次は間違いなく自分なのだから…。

やがて、肉を潰す音が止んで、化け物がこちらを振り向いた。

『ナンダ…これでサイゴダツタか…』

くぐもった様な、暗い声が響く。それはあの異形から発せられた声らしかった。

異形はゆっくりとこちらに近づき、私の傍に来ると、そのままゆっ

くりとその刃物を振り上げた。

『フふ…グふふフ…。シね。しね。シネしネシネしねエええエエえエエ！…！』

異形はそう叫びながら、その刃物を振り下ろした。

…私は、絶望したような、諦めたような、そんな表情でゆっくりと
瞼を閉じ…

…ズガアアアアアアン！！

その瞬間、ものすごい音が私の耳に飛び込んできたのだった
…。

Another Side Out

「っ！ 着弾！」

俺は目の前の気配を探る。

俺が探知した限りでは、妖魔が巨大な刃物を誰かに振り下ろそうと
していることが確認できた。

走って間に合いそうも無く、俺は気配を頼りに刃物に向かって”右
手で”銃を撃つたのだが…霊弾はどうやら、うまく妖魔の刃物を弾
き飛ばしてくれたようだった。

…それにしても、気配に近づくにつれて濃くなっていく異様な雰
囲気、それと臭気…。

「これは…美里や奈々美にや見せないほうがいいかも…」

俺は何となくこの先の光景を想像していた。

おそらくこの先には、常人じゃ一目見ただけで発狂しちまうような
ものがある。

「…くっ！ 奈々美と美里はここで待機！ まずは奴やつさんをここま

でおびき寄せる！ 奈々美は敵の出鼻に一発ぶち込んでやれ！」

「わかりました！」

「じゃあ私たちはここで待ってるわね。…気をつけて」

おそらく、2人には俺が気を使ったのがわかっていただろう。それ故に2人は申し訳なさそうな顔をして、俺たちを見送った。

茂みを抜けると、そこには予想していた通りの異様な光景が広がっていた。

「…趣味の悪い…」

「…あまり、いい気分はしませんね」

「…」

俺、晃、霞の3人は揃ってその光景を不快な表情で見つめていた。そこに広がるのは、異常なまでの臭気と、赤。

そして周囲に散らばっているのはきつとおそろくかつて”人間だったモノ”なのだろう。

数が多いことから被害の大きさが伺える。

…これは、やっぱり奈々美と美里を待機させて正解だったな。いくらなんでもあいつらにはこの光景は刺激が強すぎる。

相手はさっきの銃撃でこちらの存在を警戒していたのか、奥にいる少女 依頼人の友人を無視してこちらを待ち受けていた。

大きさは成人男性程度だろうか。だがその体表は赤黒く。その顔は鬼のように角が生え、負の感情に歪んだ表情をしていた。

さつき俺が弾き飛ばした刃物はしっかりその右腕に握られていた。

…なんだろう。何かはわからないが、俺はこの光景に”何か”を重ねていた。

何かはわからない、何故、重なってしまうのかもわからない。俺はこんな光景に見覚えが…？

『…キサマヲカ…おれノシよくジのジヤマヲしたヤツらハ…』

そんなことに思考を巡らせていると、不意に目の前の妖魔が口を開いた。

「ほう、喋れるだけの理性はあるらしいな。…ま、痕跡を結界で隠すような小賢しい真似をするような奴だからだいたい想像はついてたが」

『ナルホド…あのケツカいニキヅいたのか…。…キサマら。タダのニンゲンジャナイな…?』

やっぱり、あの結界はコイツだったか…。

「まあ、”普通じゃない”のは認めてやるよ。でも、お互い自己紹介して仲良くしましょってわけにはいかねえだろ?…お前の選択肢は2つ、大人しく元いた場所に還るか、俺たちに消されるか。…どっちがいい?」

俺はゆつくりと銃口を向ける。晃は刀の柄に手を添え、霞は靈札を構えた。

『…ずいブんとナマイキナニンゲンドモだ。…ちよウドエさモアレダケになっテシマツタとコロダしな…。キサマラをコロせばさゾウマイノだろウなア…?』

妖魔はそう言くと、ゆつくりと刃物を構えた。

「どうやら、大人しく還ってほくれないらしいな。…まあ、これだけのことをしてタダで還してやるつもりもなかったが」

”妖魔は哀れな魂の成れの果て”…だが、コイツは救われるにはあまりにもやりすぎた。

「今回ばかりは僕も俊樹君に同感ですね」
「…潰します」

俺たち3人は一斉に靈力を解放する。それを確認した妖魔もその妖力を開放した。

「いくぞ、お前ら!」

俺たちは、目の前の異形に向かっていった…。

十ノ話 「狂気」ノ存在 (後書き)

次回、久しぶりの戦闘描写が入ります。
それと次回もちよっぴりゲロ注意です。

十一ノ話 「豹変ノ刃」(前書き)

対峙する妖魔と俺たち。

予想通り俺たちは苦戦を強いられる。そんな中、ちょっとしたミスで負傷した俺を見た晃に”変化”が現れる…。

今回もグロ注意です。

十一ノ話 「豹変ノ刃」

「いくぞ、お前ら！」

俺たちは一斉に妖魔へと向かっていく。

最初に射程に入ったのは術を使用する霞。

「…炎よ…！」

霞は一枚の霊札を妖魔へとかざす。すると目の前の空間に陣が現れ、そこからいくつもの火球が現れ、妖魔へと飛んでいった。

だが、妖魔は意に介さず、刃物を一薙ぎしただけで火球を消し去ってしまった。

なるほど…あの妖魔。スピードこそ前回の妖魔の足元にも及ばないが、全体的にはやはり前回より高位の妖魔らしい。

続いて射程に入った俺が霊銃を構え、引き金を引く。

バアン！ バアン！

俺の放った霊弾を防ぐ為に、妖魔は刃物を振り回す。

狙い通りの展開に俺は笑みを浮かべ…。

「晃！ 今だ！」

霊弾を弾くので精一杯の妖魔の懐に、すかさず晃が入り込み

「…ハッ！」

その刃を、解き放った。

ザシユツ！

『グ…』

翻る鮮血。と同時にごとりと、妖魔の右腕が切り落とされる。

晃はそのまま返す刃で左腕も切り落とそうとする、が

『ウオオオオオオオオオオ！！』

と、叫び声をあげた妖魔が残った左腕を振り下ろして晃を掴もうとする。

それを間一髪で避け、一度距離を置く俺たち。

『おノれ…よくもおノレノうデを！！』

妖魔は左腕で刃物を拾い上げると、ものすごい形相でこちらを睨んできた。

「右腕一本ごときで大げさな。今どき腕一本無くたって生きていけるわ。お前には”五体不満足”を読むことをオススメするね」
俺も読んだことないけどな！

妖魔は怒りで我を失っているのか、ものすごい叫び声を上げてこちらへ向かってきた。

「よし、逃げんぞお前ら！」
これなら追ってくる。そう判断した俺は2人に退くように指示を出す。

『二がすモの力アああアアアああ！』
案の定、妖魔は追ってきた。よし、このまま奈々美と美里のところにまで連れて行く…！

俺たちは追ってくる妖魔をつまぐ誘導していく。やがて、2人のいる場所までやってきた。

2人は俺たちの姿を確認すると後方の気配に意識を集中させる。

「美里さんは隠れてください！」

奈々美は美里にそう言って、弓を引く体制をとった。

すると、奈々美の手に光り輝く弓と矢が現れる。

「あれ…もしかして神術？」

美里が奈々美の弓を見て俺に問いかける。

「ああ…貴重な光属性の術式だ」

当たれば確かに妖魔には効果的なのだが…如何せんノーコンだからなあ…。

一応外した時のために俺たちも構えておく。

俺たちを追ってきた妖魔は、どうやら怒りで目の前の奈々美の気配に気付いていないようだった。

そのまままっすぐこちらに突っ込んでくる。

そして…妖魔が俺たちの目の前に飛び出してきた…！

「今だ！」

俺が合図を送り、奈々美は目の前の妖魔に向かって、弓を引く右手を放した…！

ヒュン！

『ぬウウウウウウ！！』

「なに！？」

緊張した雰囲気は功を奏したのか、奈々美の放った矢は珍しくまっすぐ妖魔に向かって飛んでいった、が。

妖魔は迫り来る矢を咄嗟の跳躍で回避したのだった。

結果、矢は妖魔の身体を少し掠り、その部分を傷つけただけで終わってしまった。

『まだなかマがいたの力…』

「チツ…なまじ知能があるだけに怒らせても避けられちまうのか…」
流石に高位の妖魔。この程度の奇襲で終わってはくれそうにもない。

「仕方ない…一氣にたたみかけるぞ！」

俺がみんなに呼びかけ、一斉に妖魔に向かっていく…。

「…当たって！」

奈々美が弓を引き、妖魔に向けて矢を放った！

ヒュン！ ヒュン！ ヒュン！

けども。

「…ええい、やっぱお約束かい！！」

さっきのナイスショットはどこへやら、矢はやっぱりこっちに飛んでくる。

…アレ、まてよ？ 敵に向けて飛ばしたらこっちに来るんだから、

逆に俺に向けて矢を放てば敵に…。

「奈々美！ 俺を狙え！ 俺に向かって矢を放ってみろ！」

「え、ええっ！？」

いきなりの俺の指示に戸惑う奈々美。そりゃそうだろう。周りの奴らもこの緊張状態にもかかわらず「コイツ、アホか…？」みたいな可哀想なものを見るような視線を向けてくる。…今は気にしないでおこつ。

「いいから早く！ 遠慮すんな！」

「は…はいつ！」

奈々美は戸惑いながらも俺に向けて弓を引き、矢を…放つ。

ヒュン！

…よし、コレで敵に…

「あ、危ない！！」

「いかねえのかよおおおお！！??」

間一髪、見事なまでに”俺に”向かって飛んでくる矢をかわす。

「おかしいだろ！！ なんて敵相手にゃノーコンなのに俺相手だと百発百中なんだよ！？ モロ脳天直撃じゃねえか今の！！??」

「…ごめんなさあ…い…」

ええい、やっぱり奈々美の矢は俺ホーミングが標準装備か…！！
そんなアホなやりとりをしているうちに、晃は刀の射程に敵を捉え

…

「…ハアツ！」

刃を解き放つ。

『おナジわざをニドモクウカ！！』

その居合いは刃物によって受け止められる。

と、そこに

『又…?』

妖魔の頭上に陣が展開され、そこから妖魔に向かって落雷が降りそそいだ。

『又があアああアああアああ！！???』

「霞ナイス！」

そちらに視線を向けると、霞が霊札を掲げて術を詠唱していた。

ギリギリ落雷の範囲から離脱した晃は、一旦距離をとって様子を見ている。

「…よし、今なら…！」

俺は落雷を食らった直後で怯んでいる妖魔に駆け寄り、右手に霊力を集中させる。

「いくぜえっ…！」

『さセルカアアああアああ…！』

妖魔は怯みながらも左手の刃物を振り下ろして迎撃してくる。

俺はその振り下ろされる刃物に右手をかざし…

「”衝”…！」

衝を放った。

ドガアアアアン…！！

『グウウウウウウ…！！』

その衝撃によって振り下ろされた刃物の刃は欠け、一気に押し戻される。

そのから空きのボディに…

「そらよ…っ…！」

俺は回し蹴りをお見舞いして後方へ突き飛ばした。

そして後方には突きの体制で待ち構えていた晃。

「…食らえ！」

そして、その背中へ刃を突き立てようとした。

『グウウ…っ…！』

「なっ…！」

だが、妖魔は吹っ飛ばされてる状態から体制を90度反転。そのまま手で地面をつき、その反動で晃を飛び越して後方へ着地する。

「しま…っ…！」

『きサマから、シネえエええエえ…！！』

攻撃を外して無防備な晃に、妖魔の刃が迫る…！

「危ない…！」

咄嗟に、俺は飛び出していた。

即座に晃を突き飛ばし、自身が迫り来る刃と相對する。

「く…っ…！ …”結”…！！」

俺は慌てながらも刃が迫る左側に防御の結界を展開する。

ギャガガガガガ…！！

結界は何とか刃の進行を防いでくれた、が、咄嗟だった為にその結

界は長くは耐えられず……。
パリーン！というガラスの割れるような音と共に砕け散ってしまった。
そして……。
ドス……。
「ぐ……は……っ」
俺は妖魔の刃を食らい、そのまま大きく横に吹っ飛ばされた。

Another Side

「俊樹さん！……！」
「部長！……！」
「篠原！……！」
周りから大きな悲鳴のような叫び声上がる。
攻撃を外して無防備になってしまった僕は妖魔の振り下ろした刃物に成す術もなく、このまま殺られることを覚悟していた、のだが……
……一瞬思考が追いつかなかったが、どうやら俊樹君が僕を庇ってくれたらしい。
でも、代わりに俊樹君が妖魔の刃物を受け、大きく吹っ飛ばされている。
そんな光景を見て、僕は
「……あ……っ……はあ……っ……！」
言い様の無い悲しみと、妖魔に対する怒りを抑えられずにいた。
これは、僕が未熟なせいだ。
僕がもう少しちゃんと対応できていれば、俊樹君はああならなかった

「俊樹さん!!!」

「部長!!!!!!」

「篠原!!!」

妖魔の攻撃を受けて大きく吹っ飛ばされた俺は、そのまま木に激突する。

「ぐ!!!」

ああ…痛え…身体を捻って急所は外したとはいえ、傷はそう浅くはない。

左のわき腹を見る。制服は切り裂かれ、そこから流れた血で真っ赤に汚れてしまっていた。

「俊樹さん、大丈夫ですか!？」

「篠原、大丈夫!？」

美里と共に奈々美が今にも泣き出しそうな顔で駆け寄ってくる。

…ああ、そんな顔すんなつての。

「急所は外したよ…痛…。制服がダメになっちまった…」

俺は心配させないようにわざとおどけてみる。が、そんなに効果はなかったみたいで

「すぐ治しますから、ジツとしててください!」

奈々美は大急ぎで治療の術式を俺の傷にかけ始める。

…ホント、いつも助かるよ。

「それより、他のみんなは大丈夫か？」

言いつつ、俺は自分で周りの状況を確認する。

妖魔は遠くに吹っ飛ばされた俺をとりあえず攻撃対象から外したらしい。当然、俺の所にいる奈々美もだ。

…となると、今戦えるのは晁と霞だけか…。

霞は妖魔の斜め前、晃は妖魔の正面にいる。簡単な図にすると

晃

霞 俺、奈、美

妖

こんな感じ。

ふと、妖魔に視線を向ける…？

妖魔が、なにか警戒しているような、焦っているような雰囲気を見せている。

「どうしたんだ？ アイツ…」

俺は、妖魔の視線を追って晃を見た、と…。

「…！！」

晃の様子が明らかにおかしかった。

俯いていて表情は伺えないが、どこかふらふらとしており、その靈力の色は灰色から黒に近くなっている。

まさかアイツ…！

「…ねえ？ 久藤君、様子が変わらない？ ふらふらしてるし、あの靈力の色…」

どうやら美里も異変に気付いたらしい。

「…マズいな…。」 暴走” するかもしれない」

俺は小さく呟いた。

『今夜あたり運がよけりや見れるかもよ？』

なんて軽々しく口にした自分を今になって悔やむほどだ。

「…” 暴走”？」

美里がその聞き慣れない単語に疑問符を浮かべる。

「ああ、晃は」

『ウおオオオおおオおおオ！！！！』

説明する前に、妖魔は晃に向かって駆け出していた。

…どうやら、もう止められそうもないらしい。

俺は、せめてこれから始まるであろう惨劇が、少しでも穏やかでありますように、と…。

そう、願うことしかできなかった。

Another Side

「ウオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

妖魔が久藤君に向かって駆ける。

久藤君は迫り来る刃物をなんとか受け止めたが、様子は依然として変わってない。

久藤君と妖魔の刃が交差する中、朝比奈さんが術で援護しようとした時だった。

「!?!」

突然、私の全身を悪寒が走った。

どう例えればいいのかわからない、ただ、まるで私の中の恐怖心を増幅しているような、そんな嫌な^{プレッシャー}圧力。

私は突然襲ってきたその感覚にも戸惑ったが、何よりも驚いたのが…。

「久藤…君…?」

その圧力が、他でもない久藤君から発せられたものだったことだった。

「ねえ、篠原…。あれ…久藤君なの…?」

どうして、私はそんなことを聞いたのだろう。ただ、今妖魔と刃を交えているのは”久藤君であって久藤君じゃない”。なぜか私はそう思った。

私の問いに、篠原は視線はそのまま

「…晃だよ。晃だけど…あれは”お前の知ってる晃じゃない”」
とだけ答えた。

『グああああアああア!!??』

突然上がる叫び声、見ると、久藤君がああ妖魔の刃を押し返し、その腹部に横薙ぎの一閃で斬り付けたところだった。

『キサマ…いつたいな二ものダ…!?!』

妖魔も久藤君の突然の様子の変化に戸惑っているようだ。

『…何者か?』

その問いに、ようやく久藤君が口を開く。が、その声はどこか”久藤君とは思えない雰囲気があった”。

久藤君はゆつくりと顔を上げる。

『何者か、なんてテーマに答えてやる義理はねえな』

ようやく伺えたその表情は、いつもの久藤君からは想像もできないような、邪悪な笑みだった

Another Side Out

晃はゆつくりと顔を上げ、いつものさわやか笑顔からは想像もできないような邪悪な笑みで目の前の妖魔を見据える。

…ああ、始まった、か…。

「ち…ちよつと、篠原、あれ…何よ…っ」

その雰囲気圧倒されているのか、美里は若干震えながらも俺に問う。

「…何もクソもない。あれは晃だよ。間違いなく晃だ」

そう、あれは別に別人というわけでもない。ただ…

「でも！あれが久藤君だなんてとても…!」

だろうな、何も知らない人間からしてみれば今の晃と今までの晃は同一人物とは思えないだろう。

妖魔もその異質さに気圧され、なかなか踏み出せない。

『さて、久しぶりの目覚めなんだ。楽しませてくれよ？　ククククク…』

そんな妖魔に晃は首をコキコキと鳴らしながらゆっくり歩み寄っていく。

『ク…きミのワルいやツめ…。…いイダろウ…。キサまかうころシテやるウ！』

妖魔は気圧されながらも再び晃に飛び掛る。

『ハッ！　遅えんだよ!!!』

そんな妖魔に晃は刃を構え…。

そのまま、一瞬で妖魔の背後に移動した。

『又…!?!?』

妖魔は若干戸惑いながらも即座に背後の晃に向き直り、左手の刃物を構えようとして…できなかつた。

『ホラ、大事な獲物を落としてるぞ?』

晃は地面を見る。そこには確かにさっきまで妖魔が持っていた刃物…と、それを握り締めた左腕が落ちていた。

『!?!?!?』

妖魔はそこで気付く。さっき一瞬で背後に移動した時に左腕も切り落とされたのだと。

『な…ア…』

武器も握れなくなり、まともに戦う手段を失った妖魔は目の前の異質な存在に恐怖し、じりじりと後退する。

『どうした？　逃げんのかよ？　さっきの威勢はどうした？　殺してくれるんじゃないのかよ?』

晃は邪悪な笑みを崩すことなく、後退する妖魔に歩み寄っていく。

『ヤ…やメ…』

『その足も邪魔だな』

「終わった…か…」

そこにあるのはまさに”惨劇”だった。

奈々美と美里は見てられなくなったのか、必死に目を逸らしている。

「…奈々美、もういい。晁を止めないと…」

俺はゆっくりと立ち上がる。…まだ少し痛むが、仕方ない…。

そして向こうにいる霞に目で合図をする。霞は小さく頷いて答えてくれた。

霞がゆっくりと術式の詠唱に入る…。

と、同時に、俺は晁に向かって駆け出していた。

やがて、霞の術が発動し、今だ刃を振り下ろし続けている晁を霊力が拘束する。

『ぐ…またお前らか!!』

すぐに拘束を振りほどいて抵抗しようとする晁の額に、俺は即座に右手をかざし…。

「”解”!!」

術式を、発動した。

それからはいろいろと大変だった。

まずあの林の死体や血痕の後始末。今回の目標ターゲットだった女子生徒の記憶の消去。

彼女はとりあえず警察に連絡して引き渡しておいたから後はあつちでやってくれるだろう。

そんなことをやっているうちに、空はすっかり白み始めていた。

その間、会話は無かった…。

「…ねえ。久藤君って…」

帰り道、俺が背負ってる晁を見ながら、美里が俺に問いかける。

晁はあれから気を失っていた、左手にはあの刀がしっかりと握り閉められている。

「…晃は、小さな霊能力組織が作った村の生まれなんだよ」

その村は人里離れた山奥にひっそりと存在していた。

霊能力組織といってもホントに小規模で、その村の人間が全員で力をあわせて周辺の妖魔と戦っていたって感じた。

その村には、古くから伝わる妖刀があった。

その名を”死喰”^{シキ}。人はおろか、妖魔さえも喰らって強くなった凶悪な妖魔を封じ込めたこの刀を、この村の人間は常に厳重に封じてきた。

だが、ある日何者かによって封印が破られ、当時幼かった晃がそれを手にしてしまった。

まだまだ霊能力者として未熟だった晃はあつという間に妖魔に身体を乗っ取られ、その刃で両親を、友人を、村のみんなを殺してしまつた。

…封印を破つたのは、間違いなく村のことに詳しい者。つまりは村の中に裏切り者がいたことになるが、今となつては真実を知る術は無い。

「…じゃあ、あれは…」

「…そうだ、あれは晃の中の”負の感情”が妖魔の力で増幅され、生まれた”もう1人の晃”…別人格のようなものだよ」

血にまみれた過去の影響で、晃はあして負の感情が押さえ込めなくなる”暴走”するようになった。

…最近はなかつたんだが…

「篠原と久藤君つて、どこで会つたの…?」
美里が俺に問いかける。

「…晃は依頼部に最後に入ったんだよ。日ノ輪の要請でその村に行つただけど、ホントにあれはなんとも言いようがなかった」

村があつたとも思えないような廃墟。瓦礫と腐った臭い。散らばつた赤、赤、赤…。

そこに佇む晃をはじめてみた時、恐怖しか感じなかった。

「最初は完全に妖魔に乗っ取られていたけど、俺が少しずつ説得して晃としての意識を呼び戻したんだよ。…日ノ輪には”殺せ”って言われてただけだよ…」

晃を見たとき、恐怖と同じくらいに、”可哀想だ”って思った。だからこそ死ぬ気で”晃”を呼び戻したんだっけ…。

「ただ、晃はああやって時々暴走するし、身近にこの刀がないと行動できなくなってる。妖魔はまだ晃の中にいるからな…」

今でも晃は妖魔を必死に理性で押さえ込んでいる。本来ならあんな風に笑顔を浮かべ続けるのも不可能だったのに…。

「晃がああやってサボるのは、もしかしたら突然暴走して俺たちを傷つけることが無いようにしてるからなのかもしれない…」

こいつはホント話しててムカつくし、いつもサボるけど…。コイツだって大切な依頼部のメンバーだ。

「…私、そんな久藤君の葛藤も知らずに、”真面目そう”とか気楽なことを…」

美里が申し訳なさそうに目を伏せる。

「いや、そんなことはコイツは気にしないよ。ただ…」

俺は美里の目を見て

「そうやって自分のために悲しんでくれるのはコイツにとっては嬉しいことだと思っよ。…これからも、いつもどおりに接してやってくれ。…頼む」

そう言った。

美里は、ゆっくりと、しかしはっきりと頷いてくれたのだっ
た…。

十一ノ話 「豹変ノ刃」 (後書き)

とりあえず今日はこれで更新は終わりです。

少しずつですがこれからも更新していくのでよろしくお願いします。

十二ノ話 「冬ノ祭典」(前書き)

冬といえばなんだろう？

雪？ スキー？ クリスマス？

俺たちはこんな夏に指しかかるうかという時期にもかかわらず、場
違いにも程があるイベントを開催していたのだった…。

十二ノ話 「冬ノ祭典」

ぐつぐつ…。

部室に鍋が煮える音と、いい匂いが漂う。

今日は日曜日。本来なら今日学校休みだぜヤツホオオーウ！とか歓喜の喜びに満ちた学生たちが有意義な休日を満喫する昼下がり。

「……」「……」「……」

そんな休日だというのに、

なぜか俺たちは、

部室で、

コタツに入って、

すき焼きを囲んでいた！

「いや、どこからツツコンだらいいんだろうな、この状況」

「…篠原があんな依頼受けるからでしょうが…」

俺の右隣に位置する美里が呆れたように口にする。

「仕方ないじゃあ〜ん。最近依頼増えてきてるしさあ。ちょっと評判上げて知名度アップをと…」

俺は依頼部のためにこの依頼を受けたんだ。なのになぜこんなに非難されないといけないのか。

「まあ、休日も暇なんですから丁度いいじゃないですか」

おお、晁。お前はわかってくれるか。ごめんよ、お兄さん誤解してたよ。お前はいい奴だ、こういう時はちゃんとわかってくれる。俺はお前を見直したよ。

「だよな」。それに一応すき焼きなんてご馳走をただ同然で食べるんだからいいじゃんか」

まあそんな感謝の気持ちも晁本人に言うつもりは無い。っていうか本気でそんなこと思っちゃいない。

普段サボるやつにかける慈悲など無いわ！

俺の耳に届いちやっただばかりに、俺の心はめでたくノックアウトとなったのだった…。

…あれ？ 俺”部長”だよ…？

篠原俊樹は依頼部”部長”です。大事なことなので2回言いました。

…なんで俺たち、休日にこんなことやってるんだっけ…

時はさかのぼって昨日の放課後。

いつものように部活で何をするでもなく集まってみんなで適当にダラダラやってた時のことだった。

…赤6

「じゃあ、リバーズで」

「あ、テメツ！ また俺はおあずけかよ！！」

俺たちは美里を除く4人で机を囲んでUNOをやっていた。

で、霞 晃で、晃がリバーズを出しやがったから俺はお預けだ。

…なんかコイツ、執拗に俺の番を減らしてくるんだけど。イジメ？

「じゃあ黄色の3で」

そんなことを考えていると、順番が奈々美から俺へと回ってきた。

ここで俺は温存していた”アレ”を用い、隣でニコニコしてる晃の野郎に攻撃を仕掛ける。

「ドロー2×4！」

「おや…」

晃は俺がここまで温存していたことに若干驚いたようだ。はは、ざまあみやがれ。俺の順番を避けてきたから俺には手札が貯まってるんだよ！！

このまま8枚引きやが…

「では僕もドロー2」

そんな俺の態度も意に介さず、晃は涼しい顔でドロー2を置く。

し、しまった…晃はまだ隠し持ってやがったのか…！

晃がドロー2を置いたので、次は霞に順番が回る。

「…ドロー2」

だが、霞もドロー2を持っていたらしく、そのまま順番は奈々美へ。

…な、なんか嫌な予感が…。

「あ、その…」

奈々美はこの状況に戸惑っている。…ひょっとして、持ってない？

12枚引くのか!?

俺は奈々美の態度に淡い希望を抱くが…

「あの…ごめんなさい。色変えのドロー4です…」

そんな希望は、最も最悪の形で打ち砕かれてしまいましたとさ…。

「…」

俺は無言で16枚山札から引く。うう、手札がこんなに…。

心が折れかけてる俺を見て、晃が

「あつれえ〜？ このドローって誰が始めたんですたっけえ〜？」

とか白々しく笑いながら言うもんだから

「orz」

俺の心は見事にへし折られたのだった…。

うう、なんか最近酷い目に遭ってばかりな気がするよ…。

そんなことを考えて落ち込んでいると…

ガラララララ…

「みんな、いる？」

美里が、1人の男子生徒を連れて入ってきた。

「なんだ美里。彼氏でも紹介しに来たのか？」

俺が半ばやさぐれたように言うと

「違うわよ…」

呆れたように返される。

「…部屋に男を連れ込むのはいくらなんでm

「なんか言った

？」 ナンデモナイツヨ

…うん。まだ死にたくない。

「で、そいつは？」

気を取り直して、俺は美里の後ろにいる男子生徒を見た。

「ああ、お客さんよ。B組の高橋君^{たかはし}」

「よろしく」

高橋と呼ばれた男子生徒は軽く会釈する。

「よろしく。…じゃ、話を聞こうか」

俺たちは高橋を机のほうへと促す。奈々美は即座にお茶を淹れに行つた。

…ちなみに、最近は美里も手伝ってくれてるから失敗は少ない。これが意外とありがたかった。

接待用のソファに腰を降ろした俺たちは、改めて高橋に向き直る。高橋はゆっくりと語り始めた…。

「ホント、何でこんなことやってるんだろっね？」

高橋の依頼とはこうだ。

以前、家族で焼き焼きをしたものの、姉や母に肉をもつごい勢いで掻つ攫われ、自分はほとんど野菜ばかり食べる羽目になった。

で、悔しいからなんとか”焼き焼きにおける肉争奪戦の必勝法を見つけてほしい”とのこと。

幸いにも材料費は向こうが出してくれたからただ飯同然なのだ、が…。

「とりあえずこの暑い何かならないの？」

美里がうんざりしたように言う。俺だって別に好きでこんなことをやっているわけではない。

最初は”ただ飯”とか”知名度UP”とかに釣られて意気揚々と受けたのだが、これが失敗だった。

高橋曰く、「限りなくこの前の状況に近い状態でやって欲しいから

「コタツも用意してやってほしい」とのこと。しかもそれを”受けてから”言いやがった!

こっちはもう準備万端だった分、今更断ることもできず、そして現在に至る、ということだ。

部室の冷房はフル稼働。それでもやっぱ暑いもんは暑かった。

「高橋…。恐ろしい子!」

いや、んなこと言ってる場合じゃないな。

「…っていつか、必勝法くらい自分で見つけなさいよね…」
「いよいよ美里が悪態をつき始めた。」

「まあまあ、美里さん…」

「それができないから僕たちを頼ったんでしょっし…」
「そんな美里に、慌てて2人がフォローを入れる。」

「まあ、今更どうこう言っても仕方ないか…」

食材には罪は無いしな。こうなったらせめておいしくいただくとしてよいか。

「…そろそろだな。じゃ、食べようか」

俺がそう言つと、霞も向こうの机に移動して食べる支度を始める。

「コタツには入らないけど、一応食べるのね…」

「…まあいい。それじゃあ」

俺は両手を合わせる。それを見たみんなも両手を合わせて

「……」
「……」
「……」

「…そして、”戦い”が始まった…」

「……」

いや…っていつかさ。いただきますしたのはいいんだけど…

(必勝法なんて…どうすりゃ見つかるんだよ…!?)

マジイ、何も思い浮かばない。ただ単に飯を食べるだけなんてことになったら最悪材料費を請求されかねない。

みんな考えてるのは同じなのか、微動だにできずにいた。

「……」

テクテク

「…」

ヒョイヒョイ

「…」

テクテク

「…って」

「…（モグモグ）」

霞が何食わぬ顔で持ってたよ！

何食わぬなのに食ってるよ！

ってうまいこと言ってる場合じゃねえよ！！

「ええい、ままよ！！」

俺は意を決してとりあえず肉に箸を伸ばす。

このままじゃ霞が全部もって行っちゃう！

とりあえずわからないならわからないなりに何か手がかりを掴まな

いと…！

とか思ってたら

ガッ！！

「…あ」

「…おや」

向かいに座る晁と箸が交差してしまった。

「…」

お互い見つめあうこと数秒。

ガガガガガガ！！

俺は別方向から箸を伸ばす。が、向こうの箸と交差する。

「オイ！ 真似するんじゃないよ！！」

俺がじれったくなって叫ぶと、晁は困ったように

「そんなつもりはないのですが…」

そう言う。

くっ…なんかコイツにはとられたくない…！

「…ハッ！」

ひょっとして、肉争奪戦とはこういうことじゃないのか!!
フツ…ならばやってやるう!

こいつには、肉は渡さん!!

「いくぞ!」

俺はさつきよりも素早く箸を伸ばす。

「っ!」

だが晃はそれに反応して箸を交差させる。

野郎…。これではつきりした。コイツもどうやら俺と同じ気持ちらしい。

「ならば!」

「…っ!!」

ガガガガガガガガガガ!!

俺は素早く箸を伸ばし、晃がそれを止める。もはや箸の戦いというよりも刃を交えているかのようだった。

「あわわ…ど、どうしましょう?」

「ほっとけば…? 私、肉は重くて好きじゃないから野菜とかでいいわ。坂本さん、食べましょ?」

すっかり俺たちの勢いに圧倒されている奈々美に呆れたように呟く美里が見えたが、そんなことは正直今はどうでも良かった。

これは…男と男の戦いだッ!!

「ぬおおおおおお!!」

「くうっ…!!」

まるで鐳迫り合いが如く箸を交差させる俺たち。

正直、外野から見ればバカ丸出しの光景だった…。

…で、そんな箸の戦いが数分続いてどうなったかというところ。

「ゼハ…ゼハ…」

「ハア…ハア…」

俺たちは両者共にぐったりとダウンしていた…。

そりゃあただでさえ暑いのにこんなことやってたらバテるわ…。

(だが…これは好機…！)

相手もバテている今。先にバテれば負ける！！

俺は起き上がり構える。だが、晃も起き上がって箸を構えた。

「オイオイ、もう限界だろ？ 諦めたほうがいいんじゃないか？」

俺は不敵に笑ってやる。対する晃も不敵に笑って

「いえいえ。まだまだこれからですから」

そんなことを言った。

フツ…いいだろう…。

今度こそ…引導を渡してやるぜツ！！

「いくぞー！！」

「っ！！」

俺は箸を伸ばし

「…アレ？」

その箸が、止まった。

「…？ あ…」

晃もどうやら気付いたらしい。

「肉が…無い…？」

バカな…晃が既に！？ いや、晃も戸惑っている。では誰が……ま

さか…！

俺たちは揃って周りを見渡す。

「おいしいですねー」

「そうね、量は食べられないけど、おいしいわ」

「…おいしいです」

「…！！」

俺たちは揃って絶句する。だって、女性人がおいしそうに肉を食べ

てたんだもの。

「お…お前ら、どうして…？」

俺は恐る恐る問いかける。すると3人はこっちを向いて、さぞ当た

り前のように

「ん？ だって2人ともぐったりしてたから、もういらぬのかと

思って」

「…早い者勝ちです」

「ご、ごめんなさいね？」

そんなことを言いやがった！

「そ…そんな…」

俺は一気に力が抜けたようにぐったりする。向かいを見ると、晃も同じらしかった。

後に残ったのは、残りわずかな野菜類と、女性人の楽しそうな声、そして言いようの無い疲労感だけだった…

「すき焼きしたんだろ？ どうだった？」

次の日、高橋が尋ねてきて成果を聞いてきた。

「…」

「材料費出したぐらいだしなあ。うまかっただろ？ で、なんか掘めたか？」

「ああ…」

楽しそうに聞いてくる高橋に、俺は力なく答える。すると高橋はさらに嬉しそうに笑って。

「お、マジか！？ なんだよ、教えてくれ！！」

俺はゆっくり顔を上げる。そして、期待に満ちた表情を浮かべる高橋に、悟りきった表情で言っちゃった。

「あきらメロン」

十二ノ話 「冬ノ祭典」(後書き)

今回はちょっとギャグ多めにしてみました。
次回もお楽しみに。

十三ノ話 「散ル桜。最後ノ春」 (前書き)

季節は夏にさしかかるうかという頃。

桜の花びらは散りきって、学園前の美しい桜並木もすっかり寂しくなった。

そんな感慨に浸る俺の元に、最後の春を思わせる依頼がやってきたのだった…。

十三ノ話 「散ル桜。最後ノ春」

Another Side

目が覚めると、白い天井。
からだを起こすと、独特の匂いが鼻腔をくすぐる。
それももう幾度となく繰り返してきた私の”当たりまえ”。
窓から外を伺うと、桃色の桜の花びらが風に舞って、外の風景を美しく彩っていた。

(もし…)

それは、最早叶わぬ夢。

(それでも…)

もしも、願いが叶うのなら…。

(もう一度…)

そう、もう一度だけでいい。

あの景色を、もう一度見たかった…

Another Side Out

「…ねむ…」

いつもと変わらぬ通学路。

すっかり見慣れてしまった風景。

それを何の感慨も無く眺めながら、俺は歩いていた。

最近夜の仕事もなかったから疲労感はない。…けど、やっぱり授業なんて面倒なモンを受けなきゃいけないと思うと気が重くなる。

校門が見えてきた、という辺りで綺麗に掃除された桜の花びらを見

かけた。

学園の近くには桜の木が沢山ある。春真っ盛りの頃はここも桜が美しく風景を彩っていた。

別に桜に特別思い入れがあるわけでもないけど…やっぱりこうして散りきった花びらを見ると虚しいような気分になる。

「…つと。いつまでも眺めてる場合じゃなかったな」

俺は我に帰ると、少し小走りで学園へと向かったのだった…。

「はい、じゃあここの英文を… 篠原、訳してみる」

「の〜せんきゅ〜」

「起きてるんだったら訳せYO!!」

今は英語の授業中。俺は静かに昼寝中。…別にテンポを意識して言っただけではない。

どうやら教師側でも俺は睡眠人間と認識されているらしく、そんな俺に対して教師がとる対応は主に2種類。

諦めるか、こうやって集中攻撃をするか、だ。

まあもちろん華麗に回避しているがな!

「…篠原よ。お前、そんなに寝てばかりで勉強はかどってるのか? 同情するなら惰眠ぶりいず。」

「はかどってるから成績いいんだと思いますよ〜…」

俺は仕方なく顔だけ上げて答える。

一応言っておくが俺は学年でも上位に入るほど成績はいい。

毎日授業寝てるのになんでかって? 簡単さ。

”学校などの教育施設に潜入時、成績不良等の理由で任務の妨げにならないように”という理由の元、俺は幼少の時点で”日ノ輪”の教育を受けていたからだ。

かなりハードだったがその時の記憶はあんまり覚えてない。

ただ、とりあえずもう高校の勉強はほとんど頭には入ってしまったているのだ。

…日ノ輪のやったことがこうして役に立つのは気に入らねえが、今

回ばかりは救われてるな…。

もちろん零命学園には潜入とかではなくて普通に通ってるだけである。

ただ、毎日のように授業寝てるのに異様に成績いいのは教師側からすればあんま気持ちのいいことでもないらしくて、なんか軽く教師側からも注目されてるらしい。

「ぐ…まあいい。確かに成績がいいから言うことも無いしな…。…だが！」

教師は俺に歩み寄って…

バツ…！

「あ…」

俺の口にくわえたトツポを取りやがった！

「俺からトツポを奪い去るとはどういう了見だああA A A A A A A A A A A…！」

「授業中にトツポ食ってる奴が言う台詞じゃないだろうがあああA A A A A A…！」

静かだった教室に俺と教師の叫び声が木霊する。

「まあ、まだまだあるんだけどね」

そう言つて、ポケットからトツポを取り出して…
また取られた。

「…篠原、ポケットの中を見せてみる」

「ん」

俺はポケットの中からトツポの袋を取り出す。…6袋。

「…どんだけ好きなんだ…篠原…」

なんか教師がげんなりしてた。

「篠原、なんか元気ないみたいだけど、なんかあつたの？」

「手持ちのトツポを全部先生に没収されたみたいで…」

「ああ…なるほど…」

なんか向こうで小声で話をしている美里と奈々美。

時は過ぎて放課後。あれからトッポは見事に全て没収された。

「ト…トッポがあ…トッポが足りん…ぎぶみいとつぽ…」

掠れた声で悲願する。今の俺はさしずめ砂漠に迷い込んだ旅人。水

…みずを…。

「部長、これ」

「んあ？」

そんなことをやっていると、目の前に差し出される直方体。

ま、まさかコレはあ…!?

「霞…お前…!」

俺の眼差しに無言で頷く霞。

く…くそう…! 泣きそうだぜ…!!

「部長が元気になってくれるなら」

この子って奴あ…なんていい子なんだああああああ!!

「ありがとう…! じゃあありがたくもらつとくよ…!」

そう言つてその箱に視線を移…し…。

…。

…。

…。

…ポツ…キー…?

「なん…だと…」

俺は恐る恐る霞のほうを見た。すると霞は…

「…フツ」

鼻で笑いやがった。

「あ…あああ…!」

だが、そんな霞の態度よりも上げて落とされたショックのほうが大
きかったらしく

「ぐ…。。…無念」

俺の意識はフェードアウトして…

「俊樹君。いますか？」

いかなかった。

「…あい…?」

「…どうしたんですか? そんなおもしろ　ゴホン。無様な顔をして」

「言い直したのにひでえ!!???」

「元気になったようだなによりです」

…なんか複雑なんだけど。

…っていうかいつもサボる晃が俺にわざわざ会いに来るなんて珍しい。

「どうした? 金なら貸さんぞ」

「金銭面は特に困ってないので大丈夫です。お客ですよ」

晃はそう言つて横に一步退いた。すると…

「あの、久藤君の紹介で来ました…」

そこには、1人の女子生徒が立っていた…。

「じゃあ、話を聞こうか」

なんでいつものテンションに戻ってるかって?

俺の机の引き出しにはまだ沢山のトツポがあるからさ! …まあ没収されたシヨックは拭えないけども。

「えつと…ここは何でもやってくれる”何でも屋さん”だつて聞きました。だから、ちよつと無理があるかもしれないんですけど…どうしてもお願いしたいんです」

なんだ? 言つとくが死者の蘇生とかは無理だからな?

俺たちが怪訝そうな表情で眺めていると、女子生徒は依頼の内容を告げた。

「桜を…。桜を探してほしいんです」

「桜…?」

俺たちは顔を見合わせ、不思議そうに彼女を見る。

桜つて…花の桜? それなら学園前に山ほど…

そんなことを思っていたら、そんな俺たちの疑問を察したのか、彼女が続ける。

「あ、あの…花の桜なんですけど、まだ咲いている桜を…探してほしいんです」

ああ、なるほど…って

「…たしかに無理があるかもな…」

季節はもう夏にさしかかろうという頃だ、流石にもう桜は散りきってるんじゃないかと思う。

俺たちは揃って表情を曇らせる。そんな俺たちに彼女は

「お、お願いです！ 探すだけでも…お礼なら何でもしますから！

！」

と、必死の形相で言った。

「…なんでまたこんな時期に？」

その表情からただ事ではないことを悟った俺は、彼女に問い返した。そんな俺に対して彼女は口ごもる。

「そ、それは…その…」

「話しにくい事か？」

彼女はしばらく俯いていたが、やがて意を決したように顔を上げ、言った。

「あの、みなさん、これからお時間よろしいでしょうか？」

「姉さん、来たよ」

「わざわざありがとね。…そちらの人たちは？」

「ああ、友達なの」

部屋に入って最初に、独特の匂いが鼻腔をくすぐった。

まあ無理もないだろう。ここは病院で、病室なのだから。

俺たちはあの後、彼女にここまで案内された。

ベッドには1人の女性が優しそうな笑みを浮かべている。

「そう…あなたが友達を連れてくるなんて珍しいわね…。…あ、みなさんもどうか座ってください」
それからしばらく彼女と談笑して、俺たちは病室を後にした…。

「私の姉なんです。同じ学園の3年生なんですけど、身体が弱くて…」
しばらくして、彼女が説明を始めた。

「桜って、あの姉さんのために…か？」
彼女に聞いてみる。

「あ、はい。姉さん、通学路の桜並木がとても好きで…」

「…そうか」

うん。何となくわかった。

「あ、姉さんには内緒にしておいてほしいんです。驚かせたくて…」
それに関しては別に断る理由はない。俺たちは揃って頷く。

「それで…引き受けていただけじゃないでしょうか？」

彼女は改めて俺たちに問い返す。

正直、かなり大変な依頼になるだろう。なんせこの時期だ、あまり期待はできない。

だが、俺たちの返事はもう決まっていた。

「…わかったよ。できるだけのことはする」

俺の返事に、周りのみんなも揃って頷いた。

「あ、ありがとうございますっ！」

彼女はとても嬉しそうに笑顔を浮かべると、深く頭を下げたのだ…。

「…で、だ。桜を探すと言ってもこの街だけでもかなりの数がある。どこから手をつけたもんか…」

桜ならこの街に沢山あるが、”沢山ある”からこそ”咲いている桜”の搜索は困難を極めるだろう。

…地道に探すか。

「じゃあ手分けして探そうか。霞は千里眼も使ってみてくれ」

「…（コクリ）」

こうして、捜索が始まったのだった…

桜の捜索を始めて数日。

成果はゼロ。流石に季節が季節なだけあって”咲いた桜”は見つかりやしない。

そんな中、俺は数日経ったある日、捜索を他の連中に任せ、依頼者の姉のいる病院へと向かった。

彼女を一目見たときに感じた、ある”予感”。それを確認する為に

コンコン

病室の扉をノックする。

「はい、どうぞ」

すぐに返事が返ってきたのを確認して、俺は病室へと足を踏み入れた。

「あれ、貴方は確か…」

「篠原さん？」

病室にはちょうど姉妹が揃っていた。

…ある意味都合がもしれないな。妹がいると。

「よっ！ 様子見に来たぞ」

俺は手ごころな椅子に腰掛けて、姉妹のほうに視線を向ける。

「わざわざありがとうございます」

姉妹揃って頭を下げる。そんな光景に少し笑ってしまった。

「「??？」」

「ああ、ゴメン。なんかスツゴイ仲良い姉妹だなーと思ってさ」

「篠原さんは一人っ子なんですか？」

…うわあ、なんか思い出したくないこと思い出しちゃった気がするな。

…うん、即効で忘れよう。消え去れニューロン…!

「まあ…姉が1人」

俺はぎこちなくも笑顔を浮かべて答える。

…思い出して後悔した。

まあとにかく、俺たちはしばらくそんな風に談笑して、妹と二人揃って病室を後にしたのだった…。

「それにしても、どうしたんですか？ わざわざ一人でやってきて？ もしかして桜が見つかったんですか？」

病室を後にしてしばらくした頃、俺たちは揃って廊下を歩いていた。

「ああ、そのことなんだが…。ちよつと、聞きたいことがあって」

「なんですか？」

彼女が立ち止まり、俺に向き直る。

…自慢じゃないが、俺は妖魔との戦いとかそういう”戦場”を経験しているの、何となく勘が鋭い部分がある。

そして、特に”嫌な予感”ってのはかなりの確率で的中してしまうというなんとも困った有様だ。

そして、今回の予感はその”嫌な予感”に分類される…。

俺は一呼吸置くと、覚悟を決めて、その”確信”に近い”予感”を口にした。

「…お前の姉さん。もう助からないんだろ…？」

十三ノ話 「散ル桜。最後ノ春」 (後書き)

1日遅れで更新。

いい切り時を探してたら少し短くなったかな…。

十四ノ話 「舞イ落チル桜ト最期ノ春」(前書き)

もう助からない命。

それはとても残酷で、空しくて、儚い現実だった。

消えそうな命の灯火。俺にできることは、彼女にとっての一番の”幸福”を与えてやることだけだった…。

十四ノ話 「舞イ落チル桜ト最期ノ春」

「お前の姉さん。もう助からないんだろ…?」

「…!」

瞬間、凍りつく空気。

…正直、即座に否定してほしかった。

そんなわけないじゃないですか、って。

だって…そんなの、いくらなんでもあんまりだろう?

「…どうして、わかつたんですか?」

だが、彼女は俺に問い返す。それはつまり、遠まわしながらもその事実を”肯定”してしまっていた。

「マジか…」

俺は大きく肩を落とす。しばらく俺たちはその場で立ち尽くしていた…。

「…今までは、軽い病気ばかりで何とかなつたんですが。今回は…」

病院を後にして、俺たちは近くの公園のベンチに腰掛けた。

…なんかカッパルのデートの「コマみたい、と言いたいところだが、俺たちはとてもそんな明るい表情ではなかった。

「なんとか頑張っても来年まではとても…。なので、卒業式まで持つかわからなくて…」

彼女は俯きつつも、ぽつぽつと語り続ける。

俺はそんな彼女の言葉を黙って聞いていた。

「卒業式まで仮に持ったとしても、式にはおそろく…」

…出られない、だろうな…。

「そのこと、本人は知ってるのか?」

俺の質問に、彼女は黙って首を横に振る。

…なんだろう。けど、あの人はまるで…。

「…姉さん。私と違って何でもできて、クラスでも人気者だったんですよ。春になると、通学路の桜を眺めて、凄く嬉しそうに笑ってました」

彼女は勤めて明るく振舞おうとしている。が、目尻は既に震えていた。

「…これが最期かもしれないから、せめて桜だけでも…か」
俺の呟きに対して、彼女はゆっくりと頷いた。

「…さて、どうしたものか…」

あれから彼女と別れ、俺は1人公園で物思いに耽っていた。

…正直、まだ頭の中がぐるぐるして考えがうまくまとまらない。

だが、とりあえずこれから俺が何をすべきか、大体要点にして順番付けていく。

「…とりあえず。この”違和感”から確認しに行くとしますか」

俺は立ち上がると、再び病院へ向けて歩き出したのだった…。

Another Side

「…ハア…。…見つかった？」

もう桜の搜索を始めて数日。私たちは一度集合して情報交換を行っていた。

朝比奈さんは千里眼の使用で疲れているのか、少しフラフラしている。

「大丈夫？ 朝比奈さん？」

「…大丈夫です」
朝比奈さんって本当に強いなと思う。おそらく一番頑張っているのは彼女のはずなのに…。
依頼とはいえ、こんなにも無謀に近い依頼にこんなに真剣になっている。
いったい何が彼女をそこまで奮い立たせているんだろう…？
「…っていつか…篠原は？」
ふと見回してみると、一番肝心の奴がいない。
「まだ、来てないみたいですね？」
今回は珍しく久藤君がサボってないのに篠原がサボるなんて…。
「あの…なにかあったんじゃない？」
坂本さんが心配そうに呟く。
「…ハア。私、ちよつと電話してみる」
仕方がないので、私は携帯を取り出して、篠原に電話をかけたのだ
った…。

Another Side Out

プルルルルルルル…プルルルルルルル…
病院への道中、携帯が鳴った。
「ん…。…美里…？」
ディスプレイに表示される”九条美里”の名前。
ピッ！
遠慮なく切断。
そして電源OFF。
「…病院もつすぐだし」

みんなも病院では携帯の電源はOFFにしようね！

コンコン

「はい」

ノックしてすぐに返って来る返事。俺は扉を開けて中へと入った。

「あら？ 忘れ物ですか？」

つい先ほど帰ったはずの俺を見て、彼女は怪訝そうな顔を浮かべる。

「忘れ物…。まあ間違っちゃいないな」

曖昧な俺の返事に、彼女はさらに怪訝そうな顔をした。

「あの…どうしたんですか？ 一体…」

若干警戒しつつも彼女は俺に問いかける。

俺は静かに椅子に腰掛けると、真剣な表情で言った。

「アンタ。わかってるだろ」

「え？ 何がですか…？」

「自分がもう永くないこと」

そこまで言うと、彼女は瞳を大きく見開く。

その仕草は共学の事実を告げられた驚き、というよりも、どうして

わかったのか、といったような風を感じられた。

「やっぱり、か…」

俺は息を1つ吐くと、深く椅子に座り直した…。

「どうして、わかったんですか？」

「…フツ」

その発言に俺は思わず笑ってしまう。

またも怪訝そうな表情を浮かべる彼女に対し、俺は申し訳なく手を上げて

「いや、ゴメンゴメン。妹も同じ風に問い返すもんだから、思わず

笑っちゃまったよ」

そう言った。

俺のその言葉に毒気を抜かれたのか、彼女も微笑を浮かべて

「そうですね…。やっぱり似てます？ 私たち…」
問いかける。

「まあ、姉妹だしな。やっぱり似てる部分はあるんじゃないかねえの？」
俺は兄弟とか姉妹とかはよくわからんからなんとも言えないが、この姉妹は雰囲気か似ていると思う。

「それで…どうしてわかつたんです？」

改めて彼女は俺に問い返す。

「ん…。まあいろいろ根拠はあるんだけども。やっぱり一番は…勘、かな…」

自分の身体の事は自分が一番よくわかるとは言うが、彼女の陰のある雰囲気はどことなく全てを理解しているような…そんな諦めたような雰囲気だった。

勘で見抜いた俺に、彼女は瞳を見開いて驚いていたが、観念したように

「そうですね…。もう永くはない、と、漠然と感じてはいました」

どこか遠くに想いを馳せるかのように、彼女は窓の外に視線を移す。

「…アンタ、桜が好きなんだってな。今、俺たちは妹さんの頼みで桜を探してる。…」
「咲いた桜」を、な…」

「え…」

俺の告白に、彼女は慌てて視線を戻す。どうやらそこまでは悟ってなかつたらしい。

「咲いている桜って…この時期ですよ？ 流石に無理じゃあ」

「いや、俺に考えがある」

無謀だと訴える彼女の言葉を遮って、俺は言った。

ここに来るまでに、桜を見つけ出すのは不可能だと正直諦めていた。だが、人望があつてクラスの人気者だった彼女だからこそできることがあるんじゃないか、と…。

俺は、ある1つの“考え”が浮かんでいた。

「あの…」
「考え」って？

不思議そうに問う彼女を手で制し、俺は

「まあまあ。それはそんな時の”お楽しみ”の一つー事で。ともかく任せてください」

俺はそう宣言すると、立ち上がって病室を後にする…前に、振り返って

「そっぴやアンタ、3年の何組よ？」

そう彼女に聞いた。彼女は首を傾げつつも

「3年D組ですが、それが何か？」

そう答える。俺はひらひらと手を振って

「イヤイヤ、なんでもないよ。…じゃ、また来るわ」

そう言つて、今度こそ病室を後にしたのだった…。

「さて、とりあえず下準備、と」

すっかり日が暮れかかっている頃、俺は学園の前にいた。

「体育館とかは使えないし…。…個別に作って向こうで仕上げるか」
俺は部室を目指して歩き始めた。

…”大量の木材”と、”大工道具”を持って…

Another Side

…その頃、別行動の依頼部メンバーは…

「電話切られたと思つたら繋がらないし！ 篠原の奴、電源切つたわね…」

ギリギリと携帯電話を握り締める私、そんな私を見て坂本さんが

「ま、まあまあ、美里さん、落ち着いて…。俊樹さんも事情があるのかもしれないし…」

恐る恐る宥めてきた。

もう日も暮れかかる頃、結局合流しなかった篠原を放って、私たちはもう少し桜を捜索することにした。

「ハア…見つからないし。…やっぱ無謀よね…」

「まあ、現実的ではありませんねえ」

「…時期が時期ですし」

全員揃ってぐったりするしかなかった。

「…まったく。篠原は今頃何やってんだか…」

「サボってるんじゃないですか？」

うんざりしたように呟く私に、久藤君がいつもの調子で言う。

「…久藤君は今回珍しく働いてるわね…」

「アハハハハハ。美里さんも言うようになりましたねえ」

私の力ない皮肉を、久藤君は余裕を持って回避していたのだった…。

十四ノ話 「舞イ落チル桜ト最期ノ春」(後書き)

ものすごい久しぶりですがあけましておめでとうございます。
相変わらずの不定期ながらも頑張つて執筆を続けております。

誤字、脱字や作品についての感想は遠慮なくお願い致しますm(

—) m

十五ノ話 「満開ノ桜」 (前書き)

迫り来るタイムリミット。

そんな中で俺は唯一無二の”桜”を見つけ出す。

それはとても不恰好で、他人には無価値なモノ。

けれど彼らにはとてもかけがえのない、唯一無二の”桜”だった。

「ちょ…わかった！ わかったから！！ 悪かったよ！ 俺だっていろいろやって…ヤメ…ヤメテ。」

マジでやめて！！ 死ぬ！！ 死ぬうううう！！！！！！」

声の主 美里に思いつきり襟を掴まれて揺さぶられている状態。ていうか他の奴らも見えてねえで助けるよ！！

「まあ、僕らも待たされたわけですから」

「あの…私はどうすれば…」

「…傍観」

ダメだ…！ ここには俺の味方はいねえ…ッ！！

最早ここまで。俺は美里のされるがままに揺さぶられ続けたのだ…。た…。

「…で？ 私たちをほったらかしてどこ行ってたのよ？」

「…おえ…」

どのくらい時間が経ったのか、美里から解放された俺はぐったりとしたまま今度は尋問されていたのだった。

…なんか俺の扱い酷くないか…？

「いや…まあ。色々とな」

とりあえずまだ俺の考えについては内緒にしている。昨日のアレは隣の倉庫へ移動させた。

だが、そんな考えはこいつらにわかるはずもなく…

「色々ってアンタね…こっちは必死になって桜を探してるってのに」

「ああ、それについてはもう大丈夫だ」

美里の言葉を遮って俺は告げる。俺のそんな突拍子のない発言に、

一同は絶句して

「ちよつと篠原！ どういうことよソレ！？」

「桜、見つかったんですか！？」

「説明はしてくれるんでしょうね、俊樹君？」

「…」

まあ、こんな感じに各々の反応を見せてくれた。
「まあ待って待て。それについては後で話すから、とりあえずお前らは放課後に病院へ行つてってくれるか」
そこまで説明して、チャイムが鳴った。
「さてと、俺はもう少しやる事があるな…。」

Another Side

「ッ…ゴホッ…ゴホッ…！」

最近、こうして咳が出る事が多くなった。

自分の身体だから、なんとなくわかる。

…きっと、私はもう長くない。

窓の外を見る。季節はもうすぐ夏、きっと次の春を見ることはないだろう。

…桜、見たかったなあ…。

コンコン

「姉さん、入るよ？」

扉の向こうから聞こえてきたのは、聞きなれた妹の声。

私は辛い様子を隠すように努力して、開かれた扉の方へと視線を向けた。

するとそこには、妹と…

「みなさん？」

「どうしてみなさんがここに？」

病室に入ってきたのは、妹のほかに、以前やってきた依頼部という部活の方たちだった。

今、私たちは病院の中庭にいる。

妹やみなさんに少し強引に連れ出されたのだ。

「それが…私たちにもよくわからなくて…」

私が質問をした人　九条さんは、ばつが悪そうに答えた。

「俊樹さんがここで待つてるようにって頼んだんですよ」

その横で坂本さんが答える。

「篠原さんが…？」

そういえば篠原さんだけいなかった。彼はどこに行ったのだろうか？

「おう。待たせたな、お前ら」

しばらくして、聞きなれた声があった。

そっちに目を向けると、そこには

篠原さんと、私のクラス…3年D組のみんなが立っていた。

Another Side Out

「おう。待たせたな、お前ら」

病院の中庭には、指示通り全員集まっていた。

俺は学校から3年D組のメンツをこうして”全員”引っ張り出してやってきたのだった。

なんてことはない。この姉妹のことを話せば全員飛んで来てくれた。

それほどまでに彼女はクラスの人気者だったのだ。

「みんな…なんで…」

驚いている彼女に、俺は言ってやる。

「アンタがそんだけ人気者だってだけだろ？　アンタの名前を出して動かなかった奴はいなかったぞ？」

それを聞いた彼女は、とても驚いた顔をして、でもとても嬉しそう

に笑うと

「みなさん…ありがとう…」

そうはつきりと口にした。

その瞳には、涙を浮かべて…

「それで、篠原。桜は？ ……ていうか、何コレ？」

しばらくして、美里が訊ねてきた。

俺の背後には巨大な布のかかった物体が置いてある。

「ああ、それなんだけどな。見つけられなかったよ」

まあ季節が季節だし。

「は…はあ？ どうするのよ、それじゃあ」

怪訝そうな美里に、俺は頷くと

「まあ、代わりとっては何だが、コイツを用意した！」

そう言つて、俺は背後にあった巨大な布を取り払つた…

そこにあつたのは…

「わあ…！」

最初に声を上げたのは、彼女たち姉妹だった。

そこにあつたのは、巨大な木造の看板だった。

ただの看板ではない。満開の桜の形。それに、所々にクラスメイト

からのメッセージが書かれてある。

「…苦労したんだぞ。寄せ書きはみんなが書いたが、看板はほとん

ど徹夜だったからな」

「…篠原、もしかして”桜”つて…」

俺は大きく頷く。

「本物の桜なんかより、ずっと価値があるんじゃないか？」

俺のその言葉に、美里も他の連中も頷いていた。

…さ、メインイベントだ。

俺はみんなの前に立つと声を上げた。

「はい、ただいまよりイ！ 3年D組たった一人の卒業式を執り行

う…！」

俺のそんな言葉を聞いて、この場にいた全員の視線が集まる。

「えっと…卒業式って…？」

「もちろんアンタの、だよ」

俺は、控えめに問いかけてきた彼女を指差す。

「そら、お前らも準備手伝え」

俺の言葉に依頼部の面々は頷き、準備に取り掛かるのだった…。

卒業式は何の問題もなく進行していく。

卒業するのはたった一人。学校の卒業式よりも少し早めの卒業だった。

証書も手作りならば、進行も見よう見まねで不恰好。

それでも、3年D組の面々は楽しそうだったし。涙を浮かべる生徒もいた。

「篠原さん」

卒業式も一通り終わり、姉妹が俺のところへやってきた。

「本当にありがとうございました。ここまでしていただいて…」

そう言っただけで深く頭を下げる彼女。その手には、一足早い卒業証書。

「どうだ？ その辺のよりずっと綺麗な桜だろ？」

得意げに言う俺に、彼女は笑顔で頷いた。

「はい。本当に、こんなに綺麗な桜が見れるなんて…」

姉妹はそういうと、3年D組の想いが描かれた”満開の桜”をしばらくの間見つめていたのだった…。

彼女が亡くなったのはそれからしばらくのことだ。

予定よりずっと長く。そして最期にはとても幸せそうに、まるで眠っているかのように安らかに旅立った。

俺たちはそう聞かされた。

「…」

「どうしたんですか？」

季節は変わるうとしてしている。すっかり緑の葉をつけてしまった桜並木を見上げていると、不思議そうに奈々美が話しかけてきた。

「…いや。早く学校に行こうぜ、遅刻しちまう」

俺の言葉に、奈々美はまだ何か言いたそうだったが、やがて笑顔になる。

「そうですね。行きましようか」

そう言って歩き出した。

フワリ…

「…？」

「どうかしましたか？」

歩き出そうとしたところで、不意に足を止めて振り返った俺を、奈々美は不思議そうに見ていた。

「いや…何でもないよ」

そう言って、今度こそ歩き出す。

…今一瞬、桜の花びらと、彼女の姿が見えた気がした。

(夏…か…)

季節は春から夏へ。

じりじりと照りつける太陽が、夏の訪れを告げていた…

十五ノ話 「満開ノ桜」(後書き)

お久しぶりです。

自分も今年で受験生と言うことでかなりペースが落ち込んでおります。

現在は時間を見つけてつつストックの製作ですが、できる限り頑張っていきたいと思っています。

十六ノ話 「見ツメル男」(前書き)

なんてことない日常を生きてるオレ。

毎朝起きて、友達と喋る日々…。そんな日常にはアイツもいた。
けど、最近そんな日常に割り込んでくる奴がいて…。

十六ノ話 「見ツメル男」

Another Side

季節は夏。

制服がまだ夏服に変わっていないこの時期、凄く暑いのは言つまでもない。

通学路を歩く同校の生徒達もみんな暑そうに登校している。

この夏服移行前の微妙な季節こそ、生徒達の気分をブルーにするの
は言つまでもない。

ただ…

「…」

オレの気分は周囲とはまったく違った方向でブルーになっていたの
だった。

オレの名は藤原亮。零命高校2年B組に所属している。

成績は…中の下。体育とかはいつもいいんだぞ。

さて、基本的にいつも元気なオレがブルーな理由。

暑さじゃないなら何なのかって？

それについては教室に着いてから話そうか…。

学校に着いて、教室の扉を開ける。中の良いメンツと軽い挨拶を
交わして自分の席へ。

「おはよう。亮」

「お…」

あまりオレは女子生徒との交流はない。そんなオレが唯一接点を持
っている女子生徒。

それが彼女。幼馴染の九条美里である。

「美里から声かけてくるなんて珍しいじゃん。どうかしたのか？」
最初こそからかわれたが、高校2年生ともなると流石にオレたちも
そんなに気にならなくなってきた。

今ではこうして普通に喋っていても誰も何も言わなくなっている。

「ん…。最近忙しくてあまり相手してなかったからね」
そんなことを言ってくる幼馴染。

「ちょ…。オレはペットかなんかかよ!？」

でも確かに最近こういうやりとりもしてなかったよなあ…。

「まあまあ…。ん？」

そんな風にオレが思っていると…。

「お、ここにいたのか、美里」

そんなことを言いながらやってきた1人の男子生徒。

この男こそオレの気分をブルーにしている原因である。

名前は確か…。篠原俊樹といったか。

最近美里は妙にこの男と一緒にいた。

なんというか…。あんまし気に入らない。

いや、別に彼以外とも最近交流があるみたいだけでも…。

「篠原。何か用？」

何が気に入らないってこの男、結構イケメンなのだ。

黒よりの灰色の髪。整った顔。なぜかいつも口になっているトッポ。

ウチのクラスにも彼のファンが何人かいた。

オレ以外にもこの男のことをよく思っていない男子生徒は大勢いる
だろうよ。

「なんか用ってお前…。朝は部室に集合って言うといたるうが。
後はお前だけだぞ？」

それを聞いた美里ははっとなって

「いけない、忘れてた!」

そう言っで大慌てで走り出した。

「オ…。オイ、美里!」

話の腰を折られたオレは慌てて美里を引きとめようとする。

「ゴメン、亮。また後で！」
そう言っつて、美里と篠原は教室を飛び出して行っつたのだった…。

Another Side Out

「オイ、よかつたのか？ 幼馴染なんだろ？ あの男子生徒」
部室に着いた時には全員集合していた。

俺はここに来る前に置いてきてしまつた美里の幼馴染について聞いてみる。

名前は確か…藤原亮とか言つたか？

「仕方ないでしょ？ アンタたちが呼んだんだから…」
ごもつとも。

それにしてもあの男…なんつか引つかかるんだよなあ…。

…まあいいか。

「今日はいつにも増して暇だから美里の訓練に付き合おうと思つて付き合う…というよりは現状確認かな。

最近なんやかんやで美里の状態を把握してなかつたこともあり、暇な間に美里がどのくらい成長したのか見てみよう…と。そんな感じで今日は集まつたのだった。

「付き合つつて…具体的にどうするのよ？」

「決めてねえ」

うん。具体的にどうするかは特に決めてはないんだけどね。

「あのねえ…」

「まあ、適当にやってみたらいいんじゃないかな」

げんなりしている美里をたしなめて言う。

そんなノリで訓練が始まつたのだった…。

「じゃあまずは霞、頼む」

「…わかりました」

俺たちは中庭奥の広場 俺の秘密の寢床がある場所に結界を張り、訓練を開始した。

まあ具体的にどうするかというと、一人一人が各々の方法で美里の能力を測定する…と。
なんとも単純明快だな。

「…では、これを」

そう言つて、霞は美里に握力計のようなものを手渡した。

「…これは？」

「靈力を測る零具です。靈力を流し込んでください」
怪訝そうな美里に説明する霞。

見た目どおり、握力計を改造して作った靈力測定器…だったか。
なんかある日突然霞が作ってたんだっけ…。霞はこうやって時々色んなものを作ってる。

中にはガラクタもあるのだが、こういった役に立つものも作ってくれている。

「じゃあ、行くわよ？」

俺たちが頷くのを確認すると、美里は目を閉じて集中する。

…ふむ。靈力のコントロールは中々みたいだな。

美里の身体からは彼女特有の緑色の靈力が浮かび上がる。

「…測定完了しました」

やがて、霞のその声と共に美里は集中を解いた。

それと同時に彼女の周りの靈力も霧散して消える。

「どんなもんよ？」

俺は霞に尋ねる。

「…まだ未熟ですが。潜在的な靈力も考慮するなら奈々美さんと私
の間と違ったところでしょうか」

「ほえ」

俺は感心する。

ちなみに靈力の量を図にすると

俺>晃>奈々美>霞

である。

「とりあえず平均より少し上って所か？」

素質としては十分といえる結果だった。

そんなことをしているとチャイムが鳴ったので、俺たちは後片付けを早々に済まして教室へと戻るのであった…。

Another Side

「…なあ、美里」

昼休み。朝のこともあって、オレは珍しく美里を誘って学食へとやってくる。

ちなみに美里は弁当を作ってきているのでオレだけ学食である。

「…？」

話しかけられてこちらに視線を向けた美里にオレは問いかける。

「最近、依頼部？ …とかいう連中とよく一緒にいるけどさ、なんかあったのか？」

美里は確か帰宅部だったし、特に部活に入る予定もなかったはず。

それがいきなり非公式の部活に入ることオレは不思議に思っていたのだ。

それを聞かれた美里はばつが悪そうな表情をすると

「あ…。まあ、色々あったのよ。色々」

そんな曖昧な返事しかしなかった。

…ホント怪しいなあ…。

結局そんな風に何の進展もないままオレは美里と別れたのだ…。

Another Side Out

「…さて」

昼休みもこうして美里を呼び出して能力測定をしているわけだが。あれから晃や奈々美もそれぞれの測定方法で美里の能力を調べた結果…。

「…お前。割とマメに訓練してたのな…」

そんな言葉が漏れるほどに十分すぎる結果が得られたのだ。素質に関しては最初から申し分ないとは思っていたが…これはあまりにも想定外だった。

コイツには俺たちに匹敵するだけの”素質”があるし、なにより熱心に訓練していたことでその実力が十分に引き伸ばされていたのだ。

「”生き残るため”。なんでしょ？ ちゃんと時間を見つけてやってたわよ…」

美里は平気そうな顔でそんなことを言った。

「…こんな真面目な奴。依頼部始まって以来じゃねえか…？」

俺はそう呟いて、ウチの嘆かわしい面々のほうに視線を向けた。

「…」

「あの…これでも頑張ってたんですよ？」

「僕はこう見えても陰ながら努力してましたよ？」

「嘘つけよ…！」

霞と奈々美はともかく。晃に関してはホントどうしようもなかった。…いやまあ、訓練なんて必要ないほどに実力があつたのも事実だけ

れども。

「…それで？ まだ篠原の訓練があるでしょ？」

俺がそんなことを考えていると、美里がそんなことを口にした。

「あ…。…俺？」

そついや俺は特に考えてなかったなあ…。

そんな風に悩んでいると、ある1つの考えが浮かんだ。

「よし。じゃあ俺の訓練を発表するぞ」

「悪質霊能力者の確保？」

部屋に戻った俺は、全員が集まったところで今回の訓練を発表した。

「ああ。最近”日ノ輪”から回ってきた仕事がいくつかあったからな。そいつに同行して貰う」

”日ノ輪”の仕事は霊能力関係。だから当然霊能力関係の仕事はほとんど管理しているわけで。

”悪質霊能力者”。…要するに霊能力を悪用している輩をしょつ引くのも仕事の1つだ。

「そんなのいるんだ…」

初めて聞く悪質霊能力者の存在に美里は若干驚いているようだ。

「まあ、人間離れた力だしな。大きな力を手に入れたらそれを悪用しようとする輩も出てくるもんさ」

知能のない、ただ人を襲うだけの妖魔なんかよりも、なまじ知能があるから余計にたちが悪いのも特徴のひとつだな。

…正直、日ノ輪の仕事なんて胸糞悪いんだが、まあ今回は利用させてもらおう。

「放置しとくと面倒だからな。決行は今日でいいか？」

俺の問いに、美里もみんなも頷いた。

「ふう〜…終わった終わった」

本日の授業は終了。

最近マジで美里との交流がなかったから、たまには一緒に帰ろうかとも思ってたらなんか即効でいなくなってたし。

ハア…。ホント最近どうしたんだか…。

…やっぱり篠原が何か知ってるんだろうか？

そんな風にモヤモヤと考えを巡らせているオレ。なんか女々しいな…。

おそらく傍目から見ると今のオレはさぞ暗くてキモイ顔をしているんだろう。

あゝ ああゝ〜…なんでこうアイツのことでこんな悩まないといけないんだか…。

「ハア…。こういうときはさっさと帰って寝よう…ん？」

帰路を急ごうとしたオレの目に飛び込んだのは…。

「美里…？」

美里と…あれは依頼部のメンバー？

何か話しているようだが、ここからは聞き取れない。

普通に一緒に帰っている、ように見えたのだが…。

ドクン…

「ぐっ…！？」

ドクン…

なんだろう。

ドクン…

このままだに見過ごしたら、取り返しのつかないことになるよっな…。

ドクン…

そんな”予感”が、オレの心臓の鼓動を早くする。

ドクン…

「か…はっ…！」

ドクン…

心臓は早鐘を打ち、呼吸が苦しくなる。

一瞬、頭の中に映った映像は、ありえないほど現実味がなくて。でも…

ドクン…

なんで…

ドクン…

なんで…そんなこと考えたんだろう。

ドクン…

美里が………なんて。

ドクン…

美里が…死ぬなんて。

ドクン…

そんなこと…あるわけないじゃないか…。

ドクン…

そんなこと…

ドクン…

「あるわけ…ねえよ…!!」

そう叫んで、コンクリートの壁を思いつきり殴る。

拳に鈍い痛みが走ったが、それで思考が整い、胸の鼓動も熱い吐息も収まった。

しかし…今だ脳は警告を上げている。

そんな非現実的な映像が頭の裏で流れ続ける。

「…ああもう！ こんな状態で寝られるわけねえよ!!」

オレはそう叫んで鬱陶しい思考を振り払うと、慌てて美里たちが向かった方向へと走り出したのだった…。

十六ノ話 「見ツメル男」(後書き)

何とか今回は週1投稿完了。
感想お待ちしております。

十七ノ話 「畏」 (前書き)

美里の初の実戦。相手は妖魔と違う”生きた人間”。

内容はごく単純で、楽に終わるはずだったその任務は突如として様子を変える。

同じ頃、”日常”を生きていたはずの男は少しずつ”非日常”へと足を踏み入れつつあるのだった…。

十七ノ話 「畏」

ガキン…ガキイン…!

「くっ…そお…!」

ドガア!

目の前の男を拳で吹き飛ばす。

不意に背後から殺気を感じる。

「くっ…!」

身体を反らすと、顔の真横をナイフの刃が掠っていった。

その男を裏拳で殴りつけ、周りの様子を観察する。

晃は…奈々美を守ってるか。

霞は…高台から男たちを迎撃してる。

「つて…あれ…?」

そんな中、一番身の安全が不安な美里がいないことに気付く。

やばい…この状況ではぐれたっつての…!?

「チクシヨウ…!」

慌てて駆け出そうとした俺を取り囲む男達。

くそ…どこからこんな湧いて出やがったんだ…!?

「そこをどけつての…!」

俺は男たちに向かって駆け出した…。

今から数時間前。

準備を整え終えた俺たちは、その”悪質霊能力者”がたむろしている廃墟に向かって出発した。

日ノ輪からの報告じゃあそれほど規模は大きくなく、俺たちだけでも十分余裕を持ってこなせると判断したからこそ美里を連れて行くわけだ。

「流石に緊張してるか？」

俺はそう言っつて美里に話しかける。

「だ、大丈夫よ。何てことないわ」

こりゃ相当だな…。

妖魔との戦いじゃ最近をサポートくらいはこなせるようになってはいたが、今回はそういうわけにもいかないだろう。

まして相手は俺たちと同じ人間だ。

まだ時期的に早いかとも思ったが、ここは美里を信じてみるとしよう。

…いずれは通る道なのだから。

歩くこと1時間ほど。俺たちは町外れの廃ビルの前にいた。

「うし、とりあえず結界張るぞ」

俺たちは廃墟入り口に霊札とチヨークで描いた”陣”を組む。

そこを中心に5人で立つ。

最近美里も加わってくれたおかげで陣を張る速度も短縮され、より高度な効果を付加することができた。

こうやって美里が早々に実戦に加わってくれたのは正直かなりありがたい。

「…」人払い”、”閉鎖”、”防音”、”不可視”…と。こんなところか」

”結”。その一言でこの区画を結界が包み込む。

これよりこの廃墟一画は完全に外と隔離される。この中では人知れず常識外れの戦いが行われるのだ…。

「うし…。行くか」

俺たちは顔を見合わせると、黙って小さく頷きあった。

「…？」

足を踏み入れる時に一瞬感じた”違和感”。

だが、それはすぐに消え、俺は特に気にもせず足を踏み出した…。

Another Side

「ハアツ…ハアツ…！」

依頼部の面々　美里を追って走っていたオレは日が落ちかけている街の中を走っていた。

この辺りはかなり複雑に入り組んでいる為、オレは美里たちを見失ってしまったのである。

「くそ…どこ行っただよ…！？」

未だに”嫌な予感”は収まっていない。むしろ美里を見失って、時間が経てば経つほどその予感は強くなっている。

（取り返しのつかないことになったら…っ！）
ただの杞憂だったならそれでいい。けど…

焦ってきたオレが走る速度をさらに速めようとしたときだった。

「っ…！？」

突然感じた”何か”。

さっきまで感じていたいやな感じとは違う。なんというか…全身を駆け巡っていくような感覚。

「あつちは確か…廃ビルが…？」

もし今感じた”何か”が美里の居場所を示しているのだとしたら…。

「…他に手がかりは無いか…」

オレはさっき感じた”何か”を信じて、そっちの方角へと走り出したのだ…。

Another Side Out

「…いるな」

現在廃ビルの外周を進行中。

気配を探った限りじゃ間違いなく”いる”。

一見すると妖力に見えなくもないような禍々しい霊力が肌に纏わりつくように感じる。

それは俺だけじゃないようで、他の面々も皆緊張した様子で周囲を警戒していた。

やがて廃ビルののりをぐるりと一周して入り口前へ戻ってくる。

「外にはいない…かな？ …と、なるとやっぱ…」

俺は廃ビルの入り口へと目を向ける。

正直室内は相手のほうが遥かに有利だから避けたいところではあるが…やっぱ仕方ないな。

「さつき以上に警戒しとけよ、どこから襲われてもおかしくないからな」

境界を張った時点で相手にはこっちの存在を十中八九気付かれている。

俺たちは一步一步慎重に廃ビルの中へと足を踏み入れて行った…。

「…2階もハズレ…か」

廃ビルに入った俺たちは1階の完全を確認した後、2回の安全も確認した。

この廃ビルは5階建て。あまり大きくないとはいえ1フロアだけでも結構広い。

広いということは隠れ場所もかなりの数があるということだ、が…。

「…不気味だな」

外周、1階、2階とここまで何の動きも見せない敵に、俺は違和感を感じていた。

「霊力は感じるのに、姿は見えず…。…」姿”…？”
”姿は見えず”。そのフレーズに俺は引っ掛かりを覚えた。
(…まさか)
俺はある一つの仮説を立てる。…これまた”嫌な予感”だ。
だが、これが真実なら…早々に手を打たないと…！
「…？ どうしたんですか、俊樹さん？」
思いつめた俺に気付いて、奈々美が問いかける。
「いや…次はこっちだ」
そう言っつて、俺は歩き出す。
「あれ？ そつちはさつき見たんじゃ…？」
俺の歩き出した方角を見て、美里が不思議そうに問いかける。
「まあまあ。ちょっと見逃したかもしれないさ」
俺は軽くそう言っつと、再び歩き出した…。

Another Side

日も暮れ、闇夜が包み込む廃ビル。その屋上で侵入者を監視している者がいた。

「…？ 何処へ向かう気だ？」
次の階へと続く階段とは違う方角へと移動する彼らを怪訝そうに見つめるいくつかの影。

「気付かれたか？」
先ほどとは違う若い男の声。

「仮に気付かれていたとしても最早手遅れ…。様子を見るだけで十分かと」

それも当然だろう。俺が”解除”の術式を発動した瞬間、一気に敵の気配が周囲に現れたのだから…。

「…これは…」

「…やっぱりな」

「ちよ…ちよつと篠原！？なんで急に、こんな…！？」

突然の事態に誰もが動揺している。

「…畏だ。あちらさんが先にこの区画に結界を張ってやがったんだよ…！」

ここに入る前に一瞬感じた”違和感”。それはおそらくこの結界だったのだろう。

おそらく付与されていた効果は…

「”隠密”とか”消音”か…。気配がまったく無かった辺り、相当手が込んでやがるな…！」

入るときにほとんど気付かなかったことから、この結界がかなり高等なことがわかる。

(けど…だとしたらどうやってこれほどの結界を…?)

話じゃ相手は小規模のはず、それがこれほどの結界を張れるはずが…

「思考中のところ悪いですが来ましたよ。霞さん、数は？」

俺の考えは晁のその一言によって止まる。

「…どうやら”小規模”というのは誤情報だったようですね。かなりの数がいます」

「嘘だろ!？」

霞のその言葉に、俺はうろたえる。

高等な結界…予想以上の敵の数…。

くそっ…どうなってやがる…!？

「…とにかく移動するぞ！ここじゃ分が悪い…！」

俺はそう叫ぶと、みんなを引き連れて移動を開始した。

どうやら今夜はタダじゃ帰れそうにない…。

「…ここか…」

オレはさっきの感覚を頼りに廃ビルに到着した。の、だが…。

(…なんか、妙に静かすぎるな…)

もうとつくに日は暮れている。ここに美里たちがいるとしたらあまりにも静かすぎた。

気配一つ感じないほど静かだなんておかしい。ましてここは廃ビルだ、誰かいるならわかるはず…。

「やっぱり、ハズレか…?」

そう言いながらもオレは廃ビルに足を踏み入れようとする。と…

ドクン…

「ッ!?!」

再び早くなる鼓動。だが、今度は歩けなくなるほどではない。

やっぱりここに、美里たちが…?

オレは意を決して、廃ビルへと足を踏み入れた。その瞬間

「なっ…!?!」

突如、不気味すぎるほど静かだった廃ビルには喧騒が響く。

怒号や悲鳴、それに何かが崩れる音。そしてこの周囲に満ちる殺気

…!

「どっ…なっ…なんだよ…コレ…!?!」

さっきまでとはまるで違う雰囲気、俺は動揺を隠せなかった。

ドクン…

「くっ…！」

だが、そんなオレもお構いなしに鼓動は早くなっていく。

（そうだ…。ここに…美里が…！）

もしこんな異様な場所に美里がいるんだとしたら…！

「美里が…危ねえ…！」

そう思うと、オレの足は自然とその喧騒のほうへと向かっていたのだった…。

Another Side Out

十七ノ話 「畏」 (後書き)

早々にストックが切れた…。
空いた時間を見つけてペースアップをしないとなあ…。

十八ノ話 「胎動」 (前書き)

美里を追ってここまで来た。

けれど、そこで待っていた光景はわけのわからない”非日常”。

その中で振り回され、感情が爆発した時。

オレの中の”何か”が産声を上げようとしていたのだった…。

十八ノ話 「胎動」

ガキン…ガキン…!!

「くっ…そお!!」

ドガア!

目の前の男を拳で吹き飛ばす。

不意に背後から殺気を感じる。

「くっ…!!」

身体を反らすと、顔の真横をナイフの刃が掠っていった。

その男を裏拳で殴りつけ、周りの様子を観察する。

晃は…奈々美を守ってるか。

霞は…高台から男たちを迎撃してる。

「つて…あれ…?」

そんな中、一番身の安全が不安な美里がいないことに気付く。

やばい…この状況ではぐれたっつての…!!?

「チクシヨウ…!!」

慌てて駆け出そうとした俺を取り囲む男達。

くそ…どこからこんな湧いて出やがったんだ…!!?

「そこをどけつての…!!」

俺は男たちに向かって駆け出した…。

俺たちはあれから続々と押し寄せてくる敵を迎撃する為に場所を移動した…筈だったんだが。

(誘導されてるな…これは)

開けた場所には出たが、廃ビルの中から脱出できていない辺り、上手く誘導されたと考えるべきだろう。

大方、あのまま俺たちを屋上まで移動させて完全に袋小路に追い込むつもりだったんだだろうが…。

「どの道、このままじゃまずいよ、なあっ…!!」

向かってくる男を殴り倒す。

この男たちもなんだかおかしい。

瞳に生気が宿っていないし…。どんだけ殴り倒しても立ち上がってくる。まるでゾンビだ。

操られてるのか…。死体が動いているのか…。

(何にせよ…。不可解なことが多すぎるな…。)

ブオン!

「うおう!?!」

などと考えていたら突然拳が飛んできた。

間一髪で避けた…。のだが。

「あゝっ!?!」

無茶な体勢で避けたからポケットからトツポの袋が…!

バキィ!!

そして無残にも踏まれて砕け散る俺のエネルギー源。

「うおおおおおやつちまつたあああああああ…。」

がつくりと頂垂れる俺もお構いなしに男たちは襲い掛かってくる。

「…トツポの敵なあ! テメーら覚悟しろやあああああああ!」

…早く美里を探さないと…。

Another Side

「くそ…何なんだよ、ここは!」

現在は廃ビルの2階。壁や天井が崩れて剥き出しになった広い部屋の前にいる。

喧騒は上に移動したようだが、廃ビルの中には人がいた。

だがどいつもこいつも瞳に生気がなくて、どうにも異様な雰囲気だ。

ここまで何とか見つからずにこれたものの…美里はどこにいるんだろっ？

ここに近づくとつれて、次第に美里の気配のようなものが強くなっている。

今もそれを辿ってここまで来た。根拠はない、けど、確かにここに美里がいる。

オレは広間に慎重に足を踏み入れる。

崩れた壁から月明かりが差し込んで部屋の中を明るく照らす。

オレは警戒しながらも、ゆっくりと歩を進めていく。すると…

「…？」

喧騒の中からわずかに聞こえてくる、静かで、でも早い誰かの息遣い。

オレは物陰に身を隠し、そっとそちらの方を覗いてみた。

「…！」

そこには、確かに美里がいた。

相当疲労しているのか、ぐったりと壁にもたれかかって荒い息を吐いている。

「美っ
っ」

…その声をかけようとしたところで、美里の近くに人影が現れた。

Next Another Side

「ハアッ…。ハアッ…」

どこをどう走ったかもわからない。

身体は悲鳴をあげ、もう走る体力もないくらいに疲弊していた。

あれから私は篠原たちに守られながら移動していた。…筈だった。いつそうなったのかはわからない。が、私は確実に篠原たちから分断されていっていた。

戦闘に集中している篠原たちがそんな私に気がつくのはおそらくもう少し先になるだろう…。

そう思った私は、篠原たちとは別の方向へ向かって走り出したのだった。

幸いにも男たちはほとんどが篠原たちの相手で手一杯になっている。私を追ってきた男たちも、この廃ビルの入り組んだ構造のおかげでうまく撒くことができた。のだが…。

「流石に今見つかったら…」

不安定な足場のせいもあって、私自身もう走る体力が残っていない。元々こんな状況で戦力になりはしないことは私自身が一番よくわかっている、が、ならばせめて足手まといにはなりたくなかった。

「カツコつかないわよね…これじゃ…」

とにかく何とかこの場所から離れないと…。そう思って軋む身体を起こそうとした時だった。

「見つけたぞ」

突如聞こえた男の声　　と同時に、私の前に黒いコートを見に纏った男が立っていた。

「なっ…!?!」

私は驚きながらも即座に後ろに跳んで男から距離をとる。

これも日々の訓練で身についたものだ。

そんな私の動きを見て、男は

「ほう…。まったくの素人、というわけでもなさそうだと、呟いた。

鋭く、意志の強そうな瞳は美しくもある。が、この霊力の禍々しさ…。

意志が強いからこそ、その禍々しい霊力にも強い意志を感じる。

(まずい…)

勝てるわけがない。

私はこの人の足元にも及ばない。
本能がそう告げる。

鼓動が早くなつていく。

「あなた…何者？」

それでも私は勤めて冷静に男に問う。

男はそれに対して表情を変えずに

「答える必要はない。…教えられることがあるとすれば、”一番未熟なお前を孤立させ、始末する”…といったことくらいか」

「ッ…！」

それだけ告げると、男の霊力が解放された。

禍々しい、意識を持っていかれそうなくらいの禍々しさが私を包み込む。

「…行くぞ…！」

「…！」

男はそう言うのと、重心を低くした後、一瞬で私の前まで跳躍してきた。

「くっ！？」

私は軋む身体を必死に動かして、繰り出される拳を避ける。

脚、拳、そのどれもが鋭く。今の私が一撃でもマトモに食らえばタダじゃ済まないことは明白だ。

（けどこの人の動きは…避け切れないほどじゃない…！）

早いが、回避できない程ではない。

何とかこのまま隙を見つけて、足を止められれば…！

そう思った矢先に、上段からの拳の振り下ろし。

（よし、今だ…！）

大きく回避されて隙だらけの男に、私は”拘束”の術式を発動しようとして。。

ガッ…！！

気付けば男は私の背後に移動しており、鋭い回し蹴りが私の脇腹を

決っていた。

「なっ…かっ…!?!」

鈍い衝撃と、身体の中身が搾り出されそうな感覚と共に、私は吹き飛ばされて壁に叩きつけられた。

「う…ゲホツ…ゴホツ…!!」

「ほう、今でも意識を保つか。大したものだ、見くびっていたよむせ返る私を見下ろしながらそんなことを言う男。

「舐めるんじゃないっ…ないわよっ…!!」

私は必死に強がって見せる。

が、さっきの一撃で既に身体は言うことを聞かなくなっている。

蹴られた脇腹は未だ鈍い痛みが残っている。

男は今だ折れない私を見て、感服したように

「…よかるう。お前のその強い意志に敬意を表して、一思いに殺してやるとしよう」

そう言って、右手に靈力を収束させる。

(…ここまで、か…)

身体は動かない。どうやら私はここで死ぬようだ。

…みんな、ゴメン…。

私が諦めと共にゆっくり瞳を閉じようとしたところで

「うおおおおおおお!!」

「…!!?」

突如響き渡った聞きなれた叫び声。

慌てて瞳を開けると…。

「させるかああああああ!!」

鉄パイプを振りかぶり、背後から男に襲いかかる亮の姿が目映ったのだ…。

「させるかあああああああ！！」

オレはすぐ近くに落ちていた鉄パイプを振りかぶって男の背中に襲い掛かる。

正直もう何がなんだかわからなかった。

いきなり美里の近くに男が現れて。

美里の身のこなしが信じられないくらい良くなっていて。

美里が吹っ飛ばされて。

男の右手には変な光が収束していつて。

美里が危なくて…！！

とにかく美里を助けないといけない。オレはそれだけを考えて男に向かつて駆け出していた。

男に向かつて振りかぶった鉄パイプを遠慮なく叩き落とす。

が…

「っ…」

ガシイ！

男は身を捻って鉄パイプを掴む。

「くっ…このっ…！？」

オレは掴まれた手を振り解こうとする。が、鉄パイプはどれだけ力を入れてもビクともしない。

（なんつー馬鹿力だよ…！？）

「…フンッ！」

男は腕を大きく動かす。

オレは鉄パイプごと振られ、そのまま地面を転がる。

「く…っそ…！」

何なんだよ、コイツは…！

ここに来るまでに見た異様な男たちもそうだったが、コイツはそれとはまた別の意味で異質だ…！

「…？ もしや、お前…」

よるよると立ち上がるオレを見て、男が何かに気付いたように呟く。

「霊力が無いのか…？ どうやってここに入ってきた？」

男はわけのわからないことを聞いてくる。

「どうやって？ まっすぐ入り口から決まってるんだろ！」

オレはそれだけ言つと、再び男に向かつていこうとする。

「ちよつと…亮っ…いいから逃げなさい…！」

男の後ろで美里が叫ぶ。

逃げろだつて？ 馬鹿言っんじゃねえよ…！

「逃げられるわけねえだろ…！」

「…やめておけ、お前では時間稼ぎにもならん。今なら見逃してやる」

男はそんな俺を見て言う。

…そうだな、多分オレじゃあ勝てない。

そのくらいは今ので十分悟ってるさ、けどな…。

「ここまできて、無様に逃げられるわけねえだろうが…！」

オレは強い意志で叫ぶ。

そんなオレを男は心底呆れた様子で

「俺は弱者を鬪る趣味は無い。勇気と無謀はまったく違うぞ？ 小僧」

表情を変えずに告げる。

弱者…。弱者か。…そうだな。けどなあ…！

「オレにだつて意地があるんだよ…！」

おれはそう言つて駆け出す。

時間稼ぎにもならん。そう男は言ったが…なんとしても美里が逃げる時間くらいは稼がないと…！

オレは拳を振りかぶり、男に突き出す。が…

ガッ！

「なっ…！？」

男はアッサリとその拳を掴み…

「フンッ!!」

腹に鈍い衝撃が走った。

「が…」

「亮!!」

美里の悲痛な声が響く。

オレはそのまま美里のように壁まで吹き飛ばされ、叩きつけられる。化け物だ…そう思うしかなかった。

たった一撃でオレは身体がまったく動かせなくなってしまっていた。「邪魔が入ったな…」

男はオレを一瞥すると、そのまま先ほどのように右手に光を収束させる。

「今度こそ…!!」

男はゆっくりと右手を振りかぶる。

(なん…だよ…)

結局、成す術無しじゃねえか…!!

……ン…

美里が死ぬかもしれない。そう思ってここまでやってきた。その予感の間違って無かったのに…!

…クン…

結局オレは何にもできなくて…! 黙ってみてることしかできなくて…!

ドクン…

時間稼ぎにもならなくて…!! 一瞬でやられて…!!

A
n
o
t
h
e
r

S
i
d
e

O
u
t

十八ノ話 「胎動」 (後書き)

久しぶりの戦闘パートです。

廃ビルでの戦いはいよいよクライマックス！

次回をお楽しみに！

十九ノ話 「暴走」 (前書き)

何も理解できない。

けど、理解する必要なんてない。

…考えることはただ一つ。

…今のオレは、ただその”想い”だけを胸に抱いていたのだった…。

人男どもを蹴散らしながら美里を探していた。

「靈力がかなり微弱になってやがる…。危ない状態なのか…？」

俺はその微弱な靈力を何とか辿りながら進む。

そのすぐ近くには禍々しい靈力。

…このままじゃマズイ。急がないと…！

その時だった。

微弱な靈力のすぐ近くから発生した膨大な靈力。

今まで何も無かった場所から発生したその力に、俺は動揺を隠せなかった。

（これだけの靈力、一体どこから…！？）

禍々しさと言うよりは…感情の昂り…？

敵ではないとは思いたい…。

「邪魔だつてんだよ！」

俺は立ちほだかる男に向かって駆け出した…。

Another Side

「…亮…？」

「…これは…！？」

私も男も突然変化した亮の様子に動揺を隠せなかった。

あれは…靈力…？

でも亮から靈力なんてほとんど感じなかったし、なにかあったら篠原が言うだろうし…。

「今まで隠していた…？ いや…それにしてもこの量は…！？」

男の言うとおり、量の靈力は未熟な私にもわかるくらいの量だった。

「美里から…、離れる…ッ…！」

亮はそう言つと身を屈めて一瞬で男の懐に潜り込んだ。

「なっ…!?!」

男は何とか繰り出される拳を手で弾く。

「くっ…ッ!」

一旦後ろに跳んで距離を置こうとした、が…。

「逃がすかあッ!」

亮はその動きにすら対応して男に張り付き…

ドゴオッ!!

「が…は…!?!」

男の腹に、亮の拳が叩き込まれた。

吹き飛ばされ、壁に衝突する。

その様子を私はただ呆然と見つめていた。

(なんで亮が…? それに、いきなりこんな…)

私を助けに現れて、突然膨大な靈力を放出して男を圧倒する亮。

正直、脳がまだ全てを把握し切れていなかった。

「ハアツ…ハアツ…!」

「う…ぐ…」

男はよろよろと立ち上がる。

亮も私を庇うように立つ。どちらも消耗しているようだった。

「油断した…。まさかこれほどの靈力を隠していたとはな…」

「んなもん知るかよ…! お前を倒して、さっさと美里をッ

!?!」

男の呟きに、亮がそう言つて一歩踏み出した時だった。

「亮…!?!」

「ぐ…あ…なんだよ…これ…ッ!?!」

突然頭を抑えて苦しみ出す亮。

「ぐ…あ…あああああああああああああああああああ…!?!?」

「なっ…。これは…!?!」

叫び声と共に亮からさらに溢れ出す靈力。

一般人の彼がなんで結界の中に

「…まさか…”潜在型”か…!？」

突然現れた藤原亮の存在に、俺は1つの仮説を立てた。

(もしそうだとしたら…急いであいつを止めないと…!)

「美里! とにかくこっちまで来い!」

俺はなんとか押し寄せる霊力の流れに抗って美里に近寄ろうとするが…

「美里に近寄るなああああああああああああ!」

藤原亮がそう叫ぶと、美里を守るかのように彼の霊力が俺を押し戻そうとする。

「く…そ…!!」

「ちよつと亮つ! どうしたって言うのよ!？」

美里はそんな彼に向かって必死に呼びかける。

「無理だ美里! コイツ完全に”暴走”してやがる!!」

「”暴走”って…久藤君と同じ…!？」

俺の言葉に、美里が信じられないといった様子を見せる。

「違う! 霊力を制御できてねえんだよ!!」

俺は押し寄せてくる霊力に必死に耐えながらも美里に向かって叫ぶ。「何とかしてそいつの動きを止める! このままだとそいつ死ぬぞ!!」

これだけの量だ、制御できずに吞まれるような事になれば…!

俺の指示に、美里はどうしていいのか迷ったような表情を浮かべたが、すぐにはつとなくて”拘束”の霊札を取り出す。

「くっ…!!」

「な…んだよ…これは…っ!？」

美里が発動させた”拘束”の術式のおかげで一瞬動きを止める藤原亮。

よし、今だ…っ!!

「ちつと痛えが…我慢しろよ…!」

俺は即座に彼の懐に飛び込み…

ドスッ…

「く…は…」

鳩尾に鋭い手刀を叩き込んだ。

崩れ落ちる藤原亮。それと同時に霊力もその流れを止める。

「亮っ…！」

崩れ落ちた彼に駆け寄る美里。

「安心しろ、気を失ってるだけだよ」

…なんとかこの場は乗り切れたな…。

「俊樹さんっ！！」

振り返ると、奈々美たちが駆け寄ってきていた。

「お前ら、無事だったか」

俺は元気そうみなんなの顔を見てほっと胸を撫で下ろす。

「突然膨大な量の霊力が発生したかと思うと、男たちが次々と倒れていったんですよ」

やっぱり術で操られていたのか…。操っていたのはおそらくさっきの…。

「…先ほどの霊力は、彼が？」

そう尋ねる霞に、俺はゆっくりと頷く。

「これからどうしましょう…？」

不安げな奈々美の声に、俺は少し考えた後

「とりあえず撤収しよう。今回のことは不可解なことが多すぎたからな。早くここを離れたほうがいい」

俺はそう言つと、早々に撤収する準備を整えるのだった…。

「…ねえ、亮も霊能力者の素質があつたって事なの？」

俺たちはとりあえず学校の部室に移動していた。

流石にこんな状態の彼を送り返すわけにもいかないしな…。

「…まあ、そうみたいだな」

俺は美里の質問に答える。

美里も動揺が隠せないようだ。

「なんで…？ 篠原たちでさえ気付かなかったなんて…」

「気付けなかったのも無理はないさ」

俺の言葉に、美里は怪訝そうに顔を上げる。

「こいつは”潜在型”だったってこと」

本来、素質のあるものは常人よりも霊力が多い。

だが、彼のように素質があるのに霊力が潜在してしまっているケースがある。

こういったケースは”潜在型”と呼ばれ、いわば霊力が眠ったままという状態だ。

霊力が眠った状態でそれを判別するのはほぼ不可能。霊力が眠ったまま生涯を終える人間も少なからずいる…と思う。

「その眠った状態の霊力が覚醒する”条件”は様々だが…主に”感情の爆発”だな」

「…それって」

どうやら思い当たる節があるらしい。…当たりだな。

「”覚醒”自体は問題は無い。こっやって保護してお前みたいに鍛えてやればいいだけだしな。…ただ」

”潜在型”は皆一様に膨大な霊力を持っている場合が多い。こいつも霊力の量だけなら恐らく俺たちの中でトップだ。

…だが、それが自身を滅ぼす原因にも成り得る。

膨大な”力”を今まで極小さく凝縮して抑え込んでいた状態なのだ。その”抑え”を失ったら、今まで凝縮されていた力がどうなるか…。

「抑え込まれていた霊力は一気に溢れ出し、感情の昂りで冷静さを失った能力者の制御をすぐに離れる。暴走した霊力はやがてその持ち主すら呑み込み、最悪…死に至る」

それだけじゃない。感情の昂りによって自身を滅ぼした人間は負の感情にまみれ、その膨大な霊力を抱えたまま高確率で妖魔になってしまうのだ。

「…とにかく、”潜在型”は判別が難しいからほとんどの場合”覚醒”してから　つまり後手に回ってしまう。すぐに意識を奪ってでも霊力を止めさせないと…」
「…ま、今回のことはイレギュラーが多すぎたからな。」日ノ輪に報告しておくとするさ」
俺はそう言うと、今啜えているトッポを噛み砕いて新しいものに変えた…。

Another Side

「…失敗したか」

闇が堕ちる空間に複数の人の気配。

「…申し訳ありません」

その中に、先ほどの男の姿があった。

「まあ仕方ないんじゃない？ 私たちですら”潜在型”の存在は判別不可能なんだから」

女の声が響き渡る。

男はただ無言で佇むだけだ。

「…まあいい。この程度のミスは修正可能だ。次に期待するぞ、閃^{せん}」

「…御意のままに」

閃。そう呼ばれた男は一礼して去って行った…。

「…よかったのかい？」

若い男の声。

「構わん。我らの目的は”無益な殺生”などではないからな」

やがて月明かりが空間を薄く照らし、人影を浮かび上がらせる。
「全ては、我ら”鴉”^{かじす}の為に」
中央の男がそう言つて天を仰ぐ。

月明かりが消え、空間を再び闇が支配する頃には、一切の気配が消え去っていた。

A n o t h e r S i d e O u t

十九ノ話 「暴走」 (後書き)

廃ビル編は完結です。

謎の男と組織。

物語は緩やかに進んでいきます。

ちなみに次回は新キャラ登場予定です。

二十ノ話 「水面下ニ潜ム」陰」（前書き）

異質な夜から一夜明け。

俺たちの元には新しく”非日常”に足を踏み入れた者がいた。

少しずつ進んでいく日常。

その足元で確実に蠢く”陰”の存在があつた…。

二十ノ話 「水面下ニ潜ム」陰」

「…以上、報告終わり」

俺は昨日の件を一通り目の前の老人どもに報告していた。

この権力の上にふんぞり返って威張ることしか考えてなさそうな老いぼれどもこそ、俺の所属する”日ノ輪”の幹部達である。

…”威張ることしか考えてない”という辺りは最近の政治家を髣髴とさせるな…。

『ほう、我々が事前に調査した情報と食い違う点が多々あった。と？』

俺の前にいる半透明のジジイどもは俺の報告を聞き、それに対する対応を思案しているようだった。

半透明なのは”通信”の術式によるものだ。

幻術の一種なのだが…まあ細かい説明は省略しておく。

『…して、これら一連の事件の首謀者と思われる人物については？』
別の老人が問いかける。

「…残念だが、取り逃がしちまったよ」

俺のその言葉に、あちらさんは鼻で笑うと

『ハッ！ 所詮は若造の集まり。大人しく我々に従っておれば初めから優秀な人材を寄越していたものを…』

ご覧の通り、俺はこいつらに忠誠心なんて欠片もないし、こいつらもそんな俺のことは気に入らないらしい。

「テメーらの寄越した人材なんざ扱いにくくて使う気が失せるわ。

第一、今回の事はアンタらの調査不足もあるだろうに」

まったく、コレだから現場を見ない老いぼれは…。

俺の相変わらぬ態度に、ジジイは

『フン…。それで？ 今回新たに”潜在型”の能力者が発見された

そうだが…』

「見つけたのは俺だ、アイツは俺が預かる。テメーらの駒にされて

たまるか」

俺ははつきりとそう言ってやる。

このやりとり、既に奈々美、晃、霞、そして美里と、つまり依頼部に新参が入る度にやっている。

…こいつらのところに引き渡せば、間違いなく駒にされちまう。

これまた相変わらずな俺の態度に、老人どもは苦々しくも

『…フン！ せいぜいこれからも”日ノ輪”のために働くがいい！
そんな叫び声と共に、”通信”の術式は切断された。

…勘違いすんな。お前らの為でも、”日ノ輪”のためでもねえよ
俺は、何も無い空間に小さく呟いた…。

「報告終わったぞ…と…と…」

そう言つて、俺は倉庫から部屋に戻ってきた。

「あ、俊樹さん。ご苦労様です」

すぐ近くにいた奈々美が笑顔で答える。

「それで、アイツはどうなのよ？」

俺はひとまず今回の騒動のキーパーソンでもある人物からどうにかしようと思っていた。

あの時、廃ビルから消えていった人影…。美里からある程度の話は聞いたが、もう1人の当事者からも話を聞いておきたい。

「少しは落ち着いたのか？」

俺は心配そうに奈々美に問う。

「はい、美里さんがゆっくり話してくれたので、今は落ち着いたみたいですよ」

「そうか…」

それなら大丈夫だな。俺はそう判断すると、奈々美と共に部屋の奥に移動する。

部室の奥には、晃に霞、美里と…藤原亮がいた。

昨日は何とか家に送り返して、今日部室に呼んでおいたのである。

「よっ」

俺がその声をかけると、彼ははっと顔を上げて

「お前は…」

「依頼部部長の篠原俊樹だ。他の奴らも自己紹介くらいは済ませたよな？」

俺の問いかけに、周りの面々は頷く。

「少しは自分の置かれてる状況が飲み込めたか？」

俺の問いに彼は俯き、やがて小さく頷く。

「正直、まだ半信半疑だけど…。あんな訳わかんねえ事になって…
信じるしかねえよな」

なるほど、ホントに落ち着いている。

「おっけ。それなら…！」

俺は一息置くと、ビシィ！ と彼を指差して

「お前、今から依頼部”雑用係2号”に決定！」

… 空気が、固まった。

…。

……。

……。

「は、はあああああああ！？」

お、動いた。

「ちよつと待てよ！ そんないきなり…！」

「あーもうわかったわかった。わかったからちよつとこつち来い」

俺はそういうと、彼の肩に腕を回して部室の隅へ移動する。

そして、小声で

「考えても見る、正直オイシイ状況だと思わねえのか？」

「な、何が？」

俺は少し笑うと

「ここにいる女性陣。共通点は何だよ？」

俺の問いに、彼は少し考えて、そして気付く。

「全員：“ミスコン最終選考出場者”…か？」

それに対し、俺は力強く頷き

「ご名答だ。ここにいればお前は彼女たち全員と仲良くなれるかもしれないぞ？」

「なん…だと…」

お、ぐらついてきたぐらついてきた。

そして俺は、最後の一押しとばかりに

「確かに危険な戦いも付き物だ。けどな、そういう戦いを乗り越えれば乗り越えるほど絆は強くなる。…美里だって、振り向いてくれるかもしれないぜ？」

「！…！」

俺の言葉に、彼ははっとなって見つめてくる。

俺はそれに笑顔で頷き、親指をぐっと立てて答えてやった…。

「話は終わったぞ」

俺たちはみんなのところに戻ってくる。

みんなは心配そうに見つめてくるが、彼…亮は嬉々としており、異様に輝いた瞳で。

「オレ、篠原…いや、俊樹に一生ついていくことに決めましたあつ！」

「なにしたのよアンタ!？」

…まあ、そう聞かれるよね。

俺はそつと美里の肩に手を置き

「何もしてないさ。…ただ、こここの素晴らしさを説いてやったただけだとも」

そう言っちゃった。

「いや…明らかに変わりすぎでしょうが」

どいつもこいつも不審そうに俺を見つめていたのだった…。

「そっか、あまり収穫は無いな…」

その後、亮から聞いた話は美里から聞いたものほとんど同じだった。

”黒いコートの子”、か…。

「すまん…」

有益な情報を話せなかったことを申し訳なく思ったのか、亮が俯く。「そんな気にすんな。…こうなったら仕方ない、か…」

俺は頭を掻くと、すつと立ち上がる。

「…部長？ 何かアテがあるのですか？」

霞は怪訝そうに問いかける。

「…あれだけのことができたんだ。多分小さな組織じゃない」

大きな組織が、術式で小さな組織を丸ごと影から操っていた…。そう考えるのが妥当か。

それだけのことができるんだ。かなりの規模の勢力のはず…。

「そして、そんだけ大きな組織なら”日ノ輪”にだって情報が行っている筈だ」

「先ほどの幹部たちから聞き出すのですか？」

そう言う晃に、俺は首を横に振る

俺を嫌っているアイツらが素直に教えてくれるわけではないし、そもそも知ってるならさっきの報告の時に

それらしい反応があった筈だ。

…現場のことは何も知らずに権力だけ磨いてる、か…。

「まあ、彼らじゃあ聞くだけ無駄でしょうね…。では、どうするの
で？」

あの幹部に反発してる奴は大勢いるが、それ以上にアイツらの考え方に洗脳されてる奴も大勢いる。

情報を管理している奴が”幹部派”なら、俺には教えてはくれないだろう。

「こつという情報を気軽に調べられるほど組織に影響力があって、尚且つ俺たちにその情報を流してくれる奴…。…そんな奴を一人だけ知ってる」

…正直気乗りしないけど。

「…凄いわね。そんな人と知り合いだったなんて」
美里が小さく呟く。

…状況が状況だ。頼らざるを得ないか…。

「…昨日の時点で調べてもらうようには頼んでる。とりあえず今日聞きに行ってみよう」

俺はそう言つと、トッポを噛み砕いて新しいものを啜えた。

…やれやれ。本当に気乗りしないなあ…。

二十ノ話 「水面下ニ潜ム」陰」」（後書き）

新キャラは次回に持ち越し…。

依頼部にも新しく亮が加わり。依頼部が賑やかになってきました。そろそろ日常パートをはさみたい今日この頃…。

二十一ノ話 「鴉」 (前書き)

向かうは情報を握る”協力者”。

正直気は進まない相手だが、仕方ない。

そこで得られた情報により、俺たちはようやく敵の姿を垣間見るの
だった…。

二十一ノ話 「鴉」

「…ここだ」

俺がやってきたのは一軒の家の前だった。

「…何よ、ここ？」

怪訝そうな美里。

「あれ…？ ここって…」

奈々美を初めとする古参メンバーはみんな”何か”に気付いたようだった。

…まあそうだろうな。なんたってここは…

「俺の家だ」

「…はあ！？」

俺の言葉に素つ頓狂な声を上げる美里と亮。

…ていうか俺も帰って来たの久しぶりなだけどさ。

「と、いうことは…？」

この場所から全てを悟った晃は嫌な笑みを浮かべる。

「…ご名答だ。でもその笑顔はすごいムカつくな」

「いえいえ、心から同情しますよ？」

…心にもないことを。

「…ここが篠原の家って事は…篠原の身内なの？」

流石に美里は察しがいいようだ。

「…まあ。とりあえず入ろうか」

…自分の家の前で足踏みしている俺はなんなんだろう…。

「…よし、じゃあ行くぞ？」

まだ入ってねえのかよ！？ というツツコミは甘んじて受けよう。

「…なんでそんなに身構えてんだよ…」

何も知らない美里と亮が不思議そうに見るのも無理は無い。

俺は今、ドアの真横から手を伸ばしてドアノブに手をかけている状

態なのだ。

「…開けりゃあわかるさ」

この気配…”いる”な…。

「もういいからさっさと開けなさいよ…」

流石に疲れてきたのか、美里が刺々しく言い放つ。

…ああもう、わかったよ！ 開けるよ！ 開けますとも！！

「…せ…」

俺は意を決すると…

「の」

ドアノブを捻って、扉を開…”こうとした”。

なんで未遂なんだって？ そりゃあお前…

「俊樹い…！！！」

バダン！！

「いつてえ！！??？」

突然叫び声と共に勢い良く扉が開け放たれたかと思うと、扉の横にいた俺はそのまま扉に衝突。思いつきり開かれた扉と背後の壁に挟まれる。

そして、その叫び声の主というと…

「ずっと会いたかったんだからあ…！」

「え？ ちょ、ちよつと待っ…ぐぶっ…！！？」

むぎゅううううう…

俺と勘違いしたのか、扉の前にいた亮に思いつきり抱きついていた…。

…なるほど、もし俺が普通に扉を開けようとしてたらああなっていたわけか。

んで、不運にも俺の身代わりとなった亮はというと…

「ぐ…ぐぶ…。 ちょ…胸が…苦し…」

多分”大きい部類”に属されるであろう”女性特有の膨らみ”に顔を挟まれて、なんとも幸せそうだった。

「役得じゃないか、亮」

俺は扉の影から出てくる。

俺の声が腕の間ではなく、後ろから聞こえたことを不思議に思ったのか、奴はこちらを振り返って

「あら？ 俊樹？ じゃあこっちは…？」

そつと視線を下に下げる、と…

「も…ダメ…死…」

「あ、間違えちゃった」

アハハ〜と笑うと、奴はすぐに亮を解放した。

「なるほど、幸福のあまり昇天しそうだった、と？」

苦しそうに荒い息をつく亮に、晃が笑顔のまま言い放つ。

「しかしまあ、あまり女性陣のウケは良くない様で

「えつと…あの…」

「…不埒」

「…最低ね…」

奈々美、霞、美里から放たれる言葉の矢。

「と…俊樹…いきなりこんな調子じゃあ…」

ウチの女性陣と仲良くなりたかった亮は、俺に救いを求めようとする。

「…ご愁傷様」

「イヤアアアアアア！！」

残念ながら、俺にはそんな慈悲は持ち合わせちゃいなかった。

「…それで篠原、その人は？」

がつくりと頂垂れて動かなくなった亮はそのままに、美里が尋ねる。

「ああ、こいつは…」

「俊樹の恋び」

「黙れ姉貴、ていうかブラコン」

誤解を与えかねないことを口走りそうだった”姉貴”を、俺は遮って止める。

「え、姉…？ お姉さん！？」

俺が”姉”と呼んだのがそれほど驚愕だったのか、美里が素っ頓狂

な声を上げる。

「未来の奥さ」

「やめんか!!」

どこまで発展させる気だこの女…。

「改めまして、俊樹の姉の篠原沙希しのはらのみきです。よろしくね」

立ち話もやっつけられないので、俺たちはリビングに移動していた。

「奈々美ちゃんたちは久しぶりね。…そっちのお2人は？」

古参メンバーは何度かここに来ていた為、姉貴とは面識があった。今回新たに加わったメンバーの方へと姉貴が視線を向ける。

「九条美里です」

「ふ、藤原亮といますっ!!」

「お前、緊張しすぎな」

絶賛テンパリ中の亮に言っつてやる。

「うぐ…」

「もう、緊張しなくてもいいのに…。…そんなに苦しかったの？」

姉貴が意地悪そうに微笑みながらわざと胸を強調する。

「なっ…!!」

エサを見つけたかのごとく亮アホの眼は”そこ”に釘付けになる。
で。

「えっと…その…」

「…不謹慎」

「…最低…」

再び亮を襲う言葉の矢。

「う…ぐすっ…」

半泣きになってんじゃねえよ。

「あ、そうだ。お菓子あるわよ？ 食べる？」

そんな亮もお構いなしに、姉貴は何かを持ってきた。…って

「はい。ポッキー」

そこにはグラスに大量に入れられた”ポッキー”。

こいつ…！

「おいこの野郎！ ポツキーなんて俺の前で出すんじゃないよ！！」
俺は大声で姉貴に詰め寄る。

「あらやだ。どうしたの？」

「どうしたじゃねえよ！ 俺がポツキー嫌いだって事は知ってるだろ！！」

やっぱトツポしかねえよ！

「アナタまたそんなこと言っ…。ポツキーの方が美味しいっていつも言っただでしょう？」

「いいや、認めないね！ チョコは外より中と相場が決まっている！！」

自分でも何言ってるのかわかなくなってきた…。

「んもう…俊樹ったら…。外とか中とかいやらしいわよ？」

姉貴は若干頬を赤らめながらそんなことを言う。

「そんな発想をするテメーの方がいやらしいわ！！」
こんなやりとりがしばらく続いた…。

「…それで、本題だが」

なんか時計の短針が1つ進んでる気がするが、見なかったことにしておこう。

俺は姉貴のグラスに無理矢理トツポもぶち込んで、それを啜っていた。

「調べはついていたのか？」

「ええ、バツチリ」

姉貴はピースをして笑顔で答える。

「え…。じゃあやっぱり篠原の言っただのっ…」

「ああ、姉貴だよ」

姉貴はこんなだが、霊能力者としてはかなりの実力者であり、”日ノ輪”でも歴戦の実力者に数えられている。

反幹部派の連中からも絶対的な信頼を得ており、あらゆる機関に通

じていた。

…当然ながら幹部連中と幹部派の連中からはいいように思われては
いなかったが。

「これが資料よ」

姉貴はそう言つて書類を俺に手渡した。

「…」

軽くそれに目を通す。

他の連中は、俺の次の言葉を伺つていた。

「…”鴉”。ねえ…」

俺は一言だけ、そう呟いた。

「”鴉”…。組織名ですか？」

「ああ。思ったとおり大規模な組織らしいな。結構”ひっそりと”

”派手に”やってくれてるらしい」

晃の問いに、俺は資料を見ながら答える。

この”鴉”の活動報告を見る限り、かなり前から動いているらしい。
最初に活動が確認されたのも数十年前だ。

「…”ひっそりと””派手に”…というと、先日のような？」

霞がしばらく考えた後、聞いてくる。

「それも然り、だな。とにかく影みたいに目立たなくしてるらしい
から、いつも後手に回ってるみたいだな」

報告書に目を通してみるが、どれも手遅れだったり、余裕で逃げら
れたり、そんな報告ばかりだった。

「組織の規模も、目的も、まだよくわかってないらしいわ」

「ふむ…。…ん？」

姉貴の言葉を聞いてみると、ふと資料の中に気になる報告書を見つ
けた。

「数年前に一度大規模な戦いがあったらしいな。幹部は全員逃がし
て、部下は拘束後に全員自害しちまつたらしいけどさ」

そのことを姉貴に尋ねると、姉貴は少し目を逸らして

「…みたいね。アタシはその特別任務に就いていたから、どんなも

のかはわからないけれど…」

「…？」

なんか姉貴の様子がおかしいな…。

気になったが、どうせ聞いても教えてくれないだろうから、俺は何も聞かなかつた。

「また…あんなふうに襲われるんでしょうか…？」

奈々美が不安そうに呟く。

どちらかというと言戦闘員で、揉め事が苦手な奈々美には先日の方が相当怖かつたのだろう。

妖魔はともかく同じ人間相手に戦うのは、心境も何もかもが違いきる。

俺は他にも目を通して見たが、それ以外には特に手がかりになりそうな情報は無かつた。

(”鴉”…か…)

その名前に妙な引つ掛かりを覚えたが、それが何かはわからなかつた。

「まあ、現時点じゃこんなもんか」

俺は一息つくと、机の上に資料を置いた。

「あ、お礼はデートで…」

「するかアホ」

こいつなりに緊張を解そうとしているのはわかるが、俺をネタにするんじゃないやねえ。

「これからどうするの？」

用件も終わり、なぜかみんなそのまま俺の家で思い思いに過ごしていた時、美里が尋ねてきた。

「どうしたこもつしたも…俺たちは今までどおりに過ごすだけだろ」
何も進展がない以上、俺たちがどうこうできるわけでもない。

「俺たちが今できることつつたら、またああいう不測の事態に対応するためにも己を鍛えておくことくらいだろうが」

俺はそう言っと、美里の肩に手を置いて、あっちで女性陣にからかわれている亮の方に視線を移し

「今まで以上にお前らの力も必要になってくる。…頼むぜ」

いつもより真剣な俺の態度に、美里はただはつきりと頷くのだった。

二十一ノ話 「鴉」 (後書き)

ちよつとしたお知らせです。

実はここから先の展開がまだ曖昧で上手く練れておりません…。

これは完全に半端で進めた私のミスなのですが、勝手ながらこちらの更新を少し緩やかにして、別に考えてあつた作品と並行更新しようかと思っております。

こちらの方もアイデアがまとまり次第、少しずつ進めていくので、ご了承ください。

二十二ノ話 「トアル日常ノ一幕」(前書き)

ドタバタした日々が過ぎ、俺達はいつ来るともわからない”嵐”に
備えて日々を送る。

そんな日々の中でも、俺達は学生らしく過ごすシーンがあるわけで
…。

そして可哀想な物を見るような目でこつちを見るギャラリィ。

…うん。そろそろ真面目な話をしようか。

「お二人はなんだか楽しそうですね」

「奈々美さん、実はあの2人は互いに愛し合う関係にあるのですよ」

「ふえ！？ そ、そうだったんですかあ！？」

なんか向こうでは奈々美が晁の冗談を真に受けてるし！

「そこ！！ 変な事吹き込むな！ そして真に受けるな！！」

姉貴に”鴉”の話聞いてから1週間。

姉貴には引き続き情報を集めてもらってはいるものの、あまり収穫は無いようだ。

”鴉”という組織が神出鬼没な以上、俺達は情報を待つ他無い。

そんな俺たちが今できることといえば…ということに今に至る。

今は放課後。俺達は中庭奥の広場に結界を張り、美里と亮の訓練を行っていた。

相手がいつ仕掛けてくるかわからない以上、俺達は少しでもこの2人を戦力として育て上げないといけない、のだが…

「…霊力だけなら俺たちの中で一番なんだがなあ…」

彼は高い霊力をその身に宿した”潜在型”。

単純な霊力量ならばこの中ではトップである。

「お前はいわば”金の卵”だったんだよ。そしてその殻を破って出てきた雛なんだ」

だからコイツには鶏どころか鳳凰にでもなれる素質がある。というより確実になれる。なってもらわんと困る。

しかし…その霊力をまったくと…いいほど扱えないんじゃないかなあ…。

霊力はその持ち主の感情に大きく影響される。用は落ち着いて集中すること、すなわち”平常心”が何よりも重要なのだが…。

「な、なんで…」

一番爆発の被害が大きい当の本人は息も絶え絶えだ。

俺はポケットから新しいトッポを取り出そうとして…もう無いや。

「よし、このぐらいにしとくか」

俺は手をパンパンと叩いて訓練の終了を続けた。

キーンコーンカーンコーン…

昼休みを告げるチャイムの音。

「さて、と…」

部室で食うにしろ、食ってから部室に行くにしろ、最終的にはみんな部室に集まるんだよな。

俺は今日の昼食に関して少し思案し、やがて

「たまには学食で食おうかね…」

そういう結論に達して移動を開始した。

晃は…もういない、早え。

まあアイツがサボってどっかで何かやってるのはいつものことなので特に気にせずに廊下に出る、と

「あ、俊樹さん！」

聞き慣れた声。こんな風に俺を呼ぶのは…

振り返ると、友達と一緒にだったのか、数人の女子生徒の中から奈々

美がこちらに手を振って駆けて来　　って！

ズルツ

「きやあ!？」

「あぶねえ!!」

例によって何故か何も無いところで転びかける奈々美を慌てて抱きとめて支える。

…こんな展開が自然と予想できるほど”これ”が見慣れた光景になりつつあるのがなんとも複雑だ。

「…と。大丈夫か？」

しっかりと支えた状態で奈々美の顔を覗き込む。

「は、はい…ありがとうございます
言いかけて、奈々美はふと顔を上げた。必然的に至近距離で目が合
う。

「は、はうう…」

途端、奈々美はボン！ と顔を真っ赤にして俯き、固まってしまう。

「な、ちよ…オイ！ 奈々美！？ しっかりしろ…！」

突然の奈々美の行動に俺は戸惑い、慌てて奈々美の肩を揺する。

…って、何かさっきの女子とかすれ違う生徒とかがひそひそ話しな
がらこっち見てるし！

「…ええい！」

これ以上ここにおいても状況は好転しない。そう思った俺は奈々美を
抱えたまま足早にその場から立ち去るのだった…。

「ほ、本当にすみませんでしたあ…」

しばらくして奈々美は気を取り直し、今は学食目指して一緒に廊下
を歩いていた。

奈々美は弁当だから俺に付き合ってくれる形になるわけだ。

ちなみにド天然の奈々美は料理なんて高等技術は覚えちゃいない。

”特訓中”だそうだが…今はまだ家の人に作ってもらっている。

この様子じゃまだまだ奈々美が料理上手になる日は遠いようだ…。

「気にすんな。ほら、行こうぜ」

俺はそう言っただけで落ち込む奈々美を慰めると、学食へと向かった。

…結構時間食ったなあ、大丈夫か…？

ガヤガヤガヤ…

「…うわあ…」

学食に到着。ちなみに俺と奈々美の台詞は同じものの、その言葉の
意味は大きく違っていた。

奈々美は人でごった返す学食への感嘆。俺は完全に出遅れたことに対する落胆である。

これじゃあ席が空いてるかどうか…そう思っていたのだが。

「あれ？ あそこにいるの、美里さんと亮さんじゃないですか？」

奈々美は俺の制服の袖を引っ張りながら奥の席を指差す。

俺も奈々美の指を追って視線を向けると、そこには確かに美里と亮が2人で昼食を食べていた。

「お、ちょうどテーブル席じゃん。丁度いい」

俺達は揃って2人の下へと歩き出した…。

「ハア…。美里はどうやって靈力を制御してるんだよ…？」

「”集中力”、よ。篠原のほつが実力者なんだから、篠原に聞いたらどう？」

「おう、俺に何か用か？」

そう言つて、2人の会話に割り込む。

奈々美は律儀にも「こんにちは」と言つて挨拶している。

「あれ、篠原に坂本さん？ 今日学食なの？」

2人は俺の突然の登場に驚いたようだが、すぐに気を取り直して聞いてくる。

「ああ、けどちょっと席が空いてなくてさ、相席いいかな？」

俺達が頼むと、2人は快く了承してくれた。奈々美は弁当だから先に座らせ、俺も急いで食券を買いに行く。

俺が今日の昼飯を持ってテーブルへ行くと、亮が奈々美と美里に靈力の制御について話を聞いていた。

…何も知らないやつが見たら何ともオカルトチックな光景だ。

亮は自分だけ上手く靈力を制御できないことを若干気にしているらしい。

「…昼飯くらい明るい話題で食えんのか。高校生らしくイチャイチャするとかさあ…」

やっぱりこういう時くらい学生らしい生活がしたい。俺はプライベ

トと仕事は別けるタイプなんぞな。

「は！？ いや、イチャイチャって、そんな…！」

「…誰と？」

「orz」

勝手に浮かれる亮とまったく通じてない美里。美里のその無意識の発言に亮はシヨックを受けて机に突っ伏す。

…せっかく俺が2人をいい雰囲気にしてやろうかとも思ってたのにこの温度差。

どうやら亮はともかく美里にはその手の感情は持ち合わせてないらしい。

というより…鈍感なのか？

「亮…がんばれよ」

俺のエールに亮は親指をぐつと立てて答えた。

「あの…みなさん何をやってるんですか？」

…一人だけついてこれてない奴がいたのだった…。

二十二ノ話 「トアル日常ノ一幕」 (後書き)

更新遅れてすいませんでした。

PC関係のトラブルが発生して更新ができない状態に…。
なるべくHeartsと交互に更新していく予定ですので楽しみに。

二十三ノ話 「祭りノ前ノ静ケサ」 (前書き)

今日も今日とて訓練に勤しむ俺たち。

そんな中にいつも見る姿は無かった。

それは、毎年行われるちょっとしたイベントの合図である。

二十三ノ話 「祭りノ前ノ静ケサ」

あくる日、放課後での出来事。

ゴガアアアアアアアアア！

「ップギヤー！」

…もう言うまでもないから説明は省略。

だが、今までよりは爆発の規模は幾分か小さくなっていった。

「っ…着けていて正解…か？」

霊力の制御に関して亮が才能ゼロなのは今までの爆発で十分わかっている。

地面に仰向けで倒れている亮。その四肢には霊札で作られた紙の輪が着けられていた。

昨日、俺が”抑制”の術式を刻んで作ったものだ。

現在、亮は膨大な霊力を持っていながらそれを制御できていない。

それは亮が根つからの直情タイプだからである…のだが、それ故にまた以前のように感情の爆発によって霊力の暴走を引き起こしてしまふ可能性があった。

亮に霊力の制御の習得を急がせたのはそれが理由でもあったのだが…それができないとなると仕方が無い。

あの紙の輪 霊具は、材質こそ紙であるものの、霊術が刻まれているために丈夫になっている。

四肢にそれぞれひとつずつ、計4つの”抑制”の術式によって亮の霊力を強制的に抑えさせている…いわばリミッターのようなものだ。一度に使用できる霊力が少なくなれば、少しは上達するんじゃないかという期待もあったのだが…やはりそこまで上手くはいかないらしい。

収穫があったとすれば、毎回吹き飛ばされているこの爆発の規模が小さくなったことくらいか…。

「おーい…大丈夫かー？」

「な…なんとか…」

亮もそれほど消耗してないらしい。どうやら無駄にならなくて済んだようだ。

…まあ、課題は山積みなんだがな…。

「そっぴや、今日は坂本さんはどうしたんだよ？」

亮は向こうで訓練中の美里たちの方へ視線を向ける。

向こうでは美里と霞が訓練を行っている…が、奈々美の姿はそこには無かった。

「いつもいるのに、珍しいな」

「ああ、奈々美なら確か今日は先に帰ってるぞ。”祭りの準備”だとさ」

奈々美の家は街の少し外れにある神社。

この時期になると、毎年奈々美の家である神社を中心に、ちょっとした祭りをやっている。

夏も中旬。ちょうどあの辺りに行くと飾りやら屋台やらで準備が着々と進んでいったっけか…。

それを聞いた亮は、ポンと手を叩くと

「ああ！ そっぴや坂本さんって巫女さんなんだっけ？」

「まあ…本格的な巫女というよりは、巫女服着て手伝ってるって感じだったけどな」

その言葉を聴いた亮は

「み…巫女服の坂本さん…！」

と、なんだか妙に興奮しているようだ。

「鼻息荒いぞ青少年」

ジト目で、俺はそう呟いたのだった…。

日も傾きかけたころ、訓練の終了を告げるチャイムが鳴り響いた。

「よっし、今日はこのぐらいにしとくか」

周りの奴らも既に帰り支度に取り掛かっている。

「あゝ…疲れたあゝ…」

足元でぐったりと座り込む亮を見下ろす。

相変わらず格闘訓練に関しては十分すぎる成果を見せている。

何とか…これを生かせるようにしないと…。

「お疲れさん」

俺はそう声をかけ、鞆を持って足早に帰ろうとする。

「じゃあ、悪い。俺ちよつと用事があるから」

「え？ あ、おい…！」

用事がある。それだけ告げて帰る俺を、晃と霞は何も言わず見送り、美里と亮は疑問符を浮かべて見送った。

「篠原：珍しいわね？ あんな風に急いでるのって」

「今日は仕方ないと思いますよ？ あまり待たせてあげるのも可哀想ですし」

「…？」

晃の言葉を聞いても尚、2人の疑問が解決することは無かった…。

校門を抜け、街を小走りで進む。

ここからだとも目的地は少し距離がある。あまり待たせるわけにもいかない。

…どうせ今年も待つてるんだろうしな。

やがて家の数が少なくなり、田や山といった自然の風景が目立つてきた。

この辺りは未だ都会の”開発”が及んでおらず。のどかな田舎の風景を残している。

そこにある小さな山。長い長い石段を登った先に奈々美の家…神社があった。

「ふう…」

軽く、とはいえ、ここまでずっと走ってきたので少し息が上がっている。

俺は入り口　　入ってすぐのところにある鳥居に背中を預けて息を整える…と。

「あ、俊樹さん！」

俺を呼ぶ声。視線を向けると、私服の奈々美がこちらに手を振っていた。

俺は軽く手を振り返すと、奈々美に近づく。

「よう。様子を見に来てやったぞ」

「やっぱり来てくれたんですね。少しだけそんな気がしました」
そう言っただけで照れたように笑う彼女に

「俺もお前がそう思ってる気がしたから来てやったんだよ」

そう言っただけで笑ってやる。

「どうせ、あんまり捗ってないんだろ？」

「あう…」

俺の見透かしたような言葉に、奈々美は気まずそうに目を伏せる。

去年、まだ”依頼部”を立ち上げたばかりだった頃も、こんなことがあった。

奈々美が住んでいる神社では、毎年この時期に祭りをやっている。その話に興味を持った俺は、様子見がてら奈々美の神社へと向かったのである。

…けど、奈々美はあの通り筋金入りの天然ドジだから、準備はあまり捗ってはいなかった。

去年も、見かねた俺が手伝って何とか間に合ったんだっけか…。

「…で？　やっぱり今年も捗ってないのか？」

「…えへへ…実は…」

やれやれと肩を竦める俺に、奈々美は気まずそうに笑う。

まあ…そう思ったからこそ来たんだけどな。

「ハア…。…ほら、俺は何をすればいいんだ？」

ため息をひとつ吐くと、俺は奈々美にそう問いかける。

「え…。いいんですか？」

「まあ…去年もやったしな」

一度乗りかかった船だ。このまま見捨てるのも寝覚めが悪いし、手伝ってやるうじやないか。

「あ、ありがとうございます！」

手伝う、という俺の言葉に、奈々美は心からの笑顔で答えた。

日も沈み、すっかり辺りも暗くなりかけた頃、俺達はようやく概ねの準備を終えた。

神社の裏手、家屋になっている場所の縁側に腰掛け、俺は一息ついていた。

「お疲れ様でした」

しばらくして、奈々美がお盆を持ってやって来た。

その上にはコップが2つ。どうやらお茶を持ってきてくれたらしい。

「ん、サンキュ」

俺はコップのひとつを受け取り、お茶を飲む。うん、よく冷えている。

夏の夜は昼間ほどではないが、十分暑い。結構な重労働だったため、俺は結構汗をかいていた。

奈々美も俺ほどではないが、額が汗でにじんでいる。

「今日も暑いですね…」

俺の隣に腰掛け、同じくお茶を飲んだ奈々美は一息つくと、そんなことを呟いた。

「夏場は夜も暑くて敵わんな…」

俺もぼんやりとそんなことを口にする。

「他の奴らはもう帰ったのか？」

俺の問いかけに、奈々美は頷く。

「はい、皆さん準備は概ね終わったみたいなので…」

「そう、か…」

俺ももう少ししたら帰るか…。

そんなことを考えていると、視界の端が淡く光った。

「ん？」

そちらに視線を向けると、奈々美が目を閉じて集中している。

先ほどの光は彼女の制御する神力のものだったらしい。

弓矢による援護こそ酷いが、治療能力に関しては彼女は十分な技術を持っている。

亮とは違って制御がまったくできないというわけではないのだろう。

…あれは多分センスの問題だ。

「お前も熱心だねえ…」

俺の呟きに、奈々美は集中を解き、困ったような笑顔で

「私も、まだまだ全然未熟ですから。足手まといにはなりたくないですし…」

そんなことを口にする。

「安心しな、亮があんな調子じゃあお前が最下位になることはねえよ…」

俺は冗談交じりにそういった。

それを聞いた奈々美は少し笑って

「でも、みんな頑張ってるのに私だけ楽をしてたら、すぐに追い抜かれちゃいますよ」

控えめに、そう言った。

彼女の謙虚さは良く知っている。と同時に、彼女が人一倍努力家なのも俺は良く知っていた。

「…ま、日々精進、だわな…」

それは、俺たち全員に当てはまる言葉だ。

俺たちがこうしている間にも、“鴉”の連中は行動を起こしているのかもしれないのだから…。

…と、今はこんなことを考えるべきじゃないわな。

俺は頭を振って思考をリセットすると、口のトツポを新しいものに

変える。

「祭り。盛り上がるといいな」

そう。今はただこの言葉だけで十分だ。

…俺のその言葉に、奈々美は笑顔で頷いた。

二十三ノ話 「祭りノ前ノ静ケサ」 (後書き)

戦闘以外でのイベントは今回が初めてだったような気がします。

次回のはんびりお祭りイベント…と思いきやちょっとした急展開の予定です。

二十四ノ話 「アヤカシ達ノ宴」 (前書き)

楽しげな人々の声。

太鼓の音。ぽつぽつと灯る明かり。

そんなイベントの裏でも密かに戦う人々がここにいた…。

二十四ノ話 「アヤカシ達ノ宴」

祭りの当日。

準備をする連中は朝早くから最後の仕上げに取り掛かり、昼過ぎには全ての準備を完了した。

奈々美も朝早くから頑張っており、途中で手伝いに来た俺や、後からやってきた他の依頼部メンバー達も加わったおかげで早々に準備を終えることができたのであった。

神社を中心にぼつぼつと灯る小さな光。太鼓の音。そして賑やかな人の声。

本来、夜というものはあらゆる生命が停止する時間である、が、今日ばかりは例外であった。

太鼓の音、それに合わせて踊る人々。屋台を見て回る者…

祭りが始まると同時に、この辺り一帯は大いに盛り上がっていた。

「よし…いくぜ？」

お椀と、紙の張られたプラスチックの輪。

「ああ、いつでもいいぞ」

まったく同じものを持った2人。

「やるからには勝ちなさいよー」

後方から聞こえてきた応援を聞き、彼 亮は振り返ると「おう

！」とだけ答え、また水面に集中する。

そんな亮を見て、俺も水面を静かに見つめる。

「全日本金魚すくい選手権大会第6位に輝いた実力。見せてくださいねー」

「んな実績ねえわ！」

ていうか6位か！ 微妙すぎるわ！

後ろからわけのわからん応援をしゃがったのは晁。その隣では霞が相変わらずのポーカーフェイスで事の成り行きを見守っていた。奈々美は少し手伝いがあるとかで後々合流することになっている。現在、俺たちが何をやっているのかということ…まあ言うまでもなく金魚すくいだ。

まあ祭りの定番ともいえるわけだから、全員特に反対することも無く金魚すくいに参加していた。

ちなみに獲った金魚は受け取らずにリリース。生憎誰も育てる設備はないし、部室にもそう言った類のものは無いからだ。

で、最初に始めたのが俺と亮。そのときに亮が「せつかくだから、勝負しようぜ」と言ってきたので、俺も特に断る理由も無いから乗ってやった…そして今に至るといいうわけである。

さて…いつまでもこのままってわけにもいかないし、そろそろ始めようかね…。

俺は慎重に、ゆっくりと網を水に沈め、そのまま獲物の下へと持つて行き…！

「よっと！」

パシヤ！

俺は獲物をすくい上げ、そのままおわんの中に…って、あれ？

おわんの中を見ている。獲物は確かに赤い…けど…なんか細くないか？

「ああ、それは金魚じゃなくてメダカだよ」

「はあ!？」

不思議そうに見てる俺に、屋台のおっちゃんが告げた衝撃の事実。

「金魚だけじゃあ普通だろ？　ウチの金魚すくいはいろいろ入ってるのさ」

どんだけだよ…。俺が少しぐったりしていると

「お、きたあ！」

という声。隣に視線をやると、亮が獲物をすくい上げたようだ…けど…丸くない？

「スーパーボール」

「魚ですらねえ!?!」

どうやら本当にいろいろ入っているようだ。改めて水槽の中を見てみると…

金魚、メダカ、スーパーボール、グッピーに…

「なに、あのデカイの」

水槽を悠然と泳ぐ巨大な影。それを指差しておっちゃんに問う。

「ああ、あれはここのヌシの鯉」

「すぐえるかあ!!」

もはやすくい上げるレベルではなかった。

…で、俺と亮は散々な結果だったわけだ。

次の美里と晃は俺達を見て予習していたのか的確に金魚だけを狙っていた。

…ていうか鯉の存在感が半端ない。

晃と美里は特に競争なんてしていなかったので適当に楽しんで終了で、最後に霞の番だ。

「はいよ、お嬢ちゃん」

網を手渡される霞。相変わらず子供と間違われているらしい。

霞はショートカットの髪型や小柄な体系もあってよく子供と間違われる。

実際のところは俺たちと同じ年なんだが…まあ俺達もたまたま子ども扱いしている節があつて何とも言えない。

本人は背の低いことを結構気にしているらしいが…。

「…」

…と、霞の様子をしてみる。

霞は慎重に様子を伺っているのか、まだ水面をじっと見つめていた。

…ん? 視線の先にあるのは…例の鯉?

「まさかアイツ…」

あの鯉をすくい上げる気なんじゃ…。

「…っ！」

俺がそう悟った瞬間、霞の眼鏡がキラリと光ったかと思うと、霞は勢い良く網を水に差し入れ、そのまま鯉の斜め下辺りにもって行き、そしてそのまま…

バシヤア！！

「な、ああ！？」

大きな水しぶきと共に宙を舞う鯉。

屋台のおっちゃんは、あまりの衝撃に絶句している。

ていうか俺達も周囲で見っていた人々も同じだった。

鯉は重力に従ってそのまま落下し、そして

ビチビチビチ！

お椀の上に落ちた…というか乗った。

大きすぎてお椀に入りきらず、そのままビチビチと跳ねている。

「…リリースです」

さすがにそのまま跳ねさせておくわけにもいかないので、霞はそう言って鯉を解放した。

「…」

一同、沈黙。

そんな中、1人だけ涼しい顔をした霞は「…ありがとございまして」とだけ言っただけで踵を返した。

「…次に行きましょう」

「みなさん、お待たせしました」

しばらくその辺の屋台を回っていた俺達の元に、巫女服姿の奈々美がやってきた。

「み…巫女服…！」

だからお前は鼻息を抑えろ。

「お疲れさん。…着替えなくてよかったのか？」

「はい…あまりお待たせするのも申し訳ないですから」
そう言っただけで、奈々美は笑顔を浮かべる。

「それにしても、坂本さんの巫女服姿ってなんだか新鮮ね」

横で興奮してる馬鹿はともかく、やっぱり奈々美のこういう服装を初めて見るのは新鮮なのだろう。

「え、あの…どこかおかしくないですか？ 大丈夫ですか？」

「よくお似合いですよ、奈々美さん」

美里に言われてわたわたと慌てる奈々美に、晃が笑顔のままフォロ―を入れる。

それに対して、全員頷いて同意を示した。

「何なら、霞や美里も来年着て手伝ったらどうよ？」

「ぶほっ！」

俺の冗談交じりの提案にさらに興奮してる隣の馬鹿。キモい。

「それもいいかもしれませぬ。お二人ともとても似合うと思いますよ」

俺の提案に奈々美は満面の笑顔で同意する。

「…特に断る理由はありません」

「ま、まあ…考えてはおくわ」

どうやら女性陣も多少興味はあるようで、まんざらでもなさそうだ。

…来年は巫女服の3人を見ることになりそうだな。

そんなことを俺はぼんやりと考えていた。

Another Side

「楽しそうねえ」

わいわいと聞こえてくる楽しげな人々の声。

そこから少し離れた林。その木の上でその様子を見ていた人影があった。

「さてと、じゃあ私も混ぜてもらおうかな」
響くのは若い女性の声。

「フフフ…せっかくのお祭りだもの。大いに盛り上がってくれないと、ね」

そう呟いて、その気配は消えた…。

Another Side Out

奈々美も合流して適当に屋台を物色した後、花火を鑑賞したりと、俺達は祭りを大いに満喫した。

だが、そろそろ俺達もそう楽しんでばかりもいられないようだ。

「よう！ 頑張ってるか？」

人々が花火に夢中になってる頃、俺達は神社裏手の林の中にやってきていた。

そこには数人の人影。皆一様に札や数珠を持っている。

見ての通り、彼らも”霊能力者”である。

「俊樹か、また悪いな、手伝ってもらっちゃまって」

その中の1人、体格のいい男が話しかけてくる。

「気にすんな、こういうときはお互い様。だろ？」

男に、俺は笑みを浮かべて答える。

「ねえ篠原。突然こんなところにつれてきて、どうということなの？ 状況がいまいち呑み込めない2人に、俺は振り返って告げる。

「楽しんでたとこ悪いんだが、”お手伝い”の要請が来ちゃまってな」

元々この辺りは神社があり、霊力が集まりやすい環境である。

だからそれを餌にする妖魔だけでなく、普通の霊体も多く集まりや

すい場所だった。

そして今日は祭りである。今、この辺りには大勢の人間がいて、妖魔たちからすれば絶好の”餌場”となっていた。

それだけじゃない。この環境で活発化している妖魔に、同じく集まってきた霊体が襲われる危険性がある。

故に、この神社を中心として結成された霊能力組織が裏で妖魔の殲滅や霊体の保護を行っているのだ。

本来ならこれはそいつらの仕事であり、俺達にはまったくの無関係だったのだが：奈々美経由でそいつらとも多少のコンタクトがある俺達は、去年も”支援要請”を受け、彼らに加勢していたのだった。もちろん俺達は”依頼部”なので、ちゃんと”報酬”を貰った上でやっているが。

「…で、今年も見事に”支援要請”がやって来たみたいだ、と」俺が説明して、美里と亮も状況を把握したようだ。

「…に、しても。いつつも手伝わないといけないほど大変なのか？」亮の疑問はもつともである。実際去年初めて頼まれたときも、俺も同じ疑問を浮かべていた。

「最近、妙に妖魔の活性化が激しいんだよ。数も今までの非じゃねえ」

その疑問には、俺の後ろにいる男が答えた。

「現場に出ている方たちの話によると、なんだか”この場所に誘い込まれているようだ”と…」

奈々美が、不安そうに続ける。

”誘い込まれている”ねえ…。

「まあ、今は話しても仕方ねえよ。さっさと終わらせちまおうぜ」俺達は早々に準備を始めた…。

「…”衝”！！」

ドオン！！

右手から放たれる衝撃。

それを至近距離で浴びた異形は、そのまま煙のように解けて消えた。

「ふう…。怪我は…あるわけないわな」

俺は後ろにいる少年に話しかける。

半透明の姿…”霊体”である。

『う…うん。ありがとう、お兄ちゃん』

霊体の少年はそう言ってこちらに近寄ってくる。

「いいか？ 向こうに俺達の仲間が大勢いる。そこに行けばお前さんを正しい場所へと導いてくれるはずだ」

俺は神社の方角を指差して告げる。それを聞いた少年は小さく頷くと

『わかった…！』

そう言つて、駆け出していった。

本来なら霊体の”浄霊”も俺達の仕事だが…まだまだ妖魔が山ほどいるこの場所では危険すぎる。

俺は妖魔を見つけては倒し、霊体を神社の方角へと誘導する…を繰り返していた。

神社の周辺には妖魔を遮断する結界がある。そこでなら安心して浄霊を行えるはずだからだ。

俺達はこの林の各ポイントに分散し、それぞれ行動を開始していた。ちなみに班分けは

俺（単独）

晃・霞

美里・亮

である。

奈々美は貴重な神術使いということもあり、神社の拠点で怪我人の治療等をやってもらっている。

亮がまだ妖魔相手に不安ではあるが、美里とチームということだからある程度は信用して任せることにした。

美里も最近では訓練の成果が出ているようで、この程度の妖魔ならば

難なく倒せるだろう。

一応通信機も持ってきてるから、何かあってもすぐに連絡できるはずだ。

「…っと！」

バアン！

背後からの気配に俺は銃口を向け、引き金を引いた。

『グアアアアアアアアアア！？』

俺の牽制に怯む妖魔。

「ま。さつさと終わらせるとしようかね…！」

俺は1人呟くと、雄叫びを上げる妖魔に向かって駆け出したのだ。た…。

二十四ノ話 「アヤカシ達ノ宴」 (後書き)

不可解な妖魔の活性化。

そして謎の人影。

次回、「鴉」とのファースト・コンタクト…の予定です。

二十五ノ話 「出デシ黒翼」(前書き)

不自然なほどに現れ出でる妖魔。

その陰に潜む”黒い翼”。

翻弄される俺たちの前に、ついに黒き翼がその姿を現す…。

二十五ノ話 「出デシ黒翼」

「…”衝”!!」

俺の右手から放たれる衝撃。それによって目の前の異形は跡形もなく消滅した。

もう何度こうして妖魔を消滅させただろうか。俺は額に滲んだ汗を拭い、ポケットから新しくトツポを取り出して口に銜える。

(なんだかキナ臭くなつてきやがったな…)

去年もそうだったが、今回は不自然な位に妖魔の数が多い。

この場所は確かに妖魔の集まりやすい土地と言えるだろう。が、それにしたって…

『現場に出ている方たちの話によると、なんだか”この場所に誘い込まれているようだ”と…』

奈々美の言葉を思い出す。

(…厄介ごとにならねえといいんだがな…)

そんなことを考えている内に、接近してくる妖力が複数。

「…チツ…!」

俺は舌打ちすると、接近してくる新手の妖魔を迎え撃つために身構えた…

Another Side

「うおおおおお!?!」

祭りも盛り上がる中、オレ達はこの周辺に接近してきた妖魔を迎え撃つために走り回っていた。

…が、今現在オレはそれとはまた少し違う理由で走っている。

『ウおおおオおおおオ！！』

後ろから聞こえてくる化け物の咆哮。

そう、オレは今現在”妖魔に追われて”走っているのだ。

バキヤアツ！！

「わーーーーー！！？」

オレの真後ろで木材の砕ける音。恐らく妖魔が木々をなぎ倒しながら追って来ているのだろう。

運動神経には自信があるので、この程度の地形ならなんとか走れるけど…

「もうだめホントダメ怖いコワイこわい！！」

もうね、絶対鼻水出てる。

…さて、何でオレがこんな心臓飛び出そうな思いで妖魔と”命がけの鬼ごっこ”をしているのかというと…

「え…つと…あそこか！！」

オレは美里の霊力を感じし、その場所まで全力で走る。後ろは見ない。叫び声がどんどん近くなってきているが、見ない。ていうか見たら漏らす。

「亮！！」

たどり着いた場所には、既に美里が待機していた。

「跳んで！！」

「ッ！！」

美里の合図で、オレは前方に大きく飛び込む。

と、同時に…

「…”縛””鎖”！！」

美里が、足元の霊札に手を置き、術式を発動させる。

と、同時に、その霊札から霊力の光が線ラインとなって伸び、別の場所に張られていた霊札と繋がる。

妖魔を囲むようにして張られた霊札…これは…。

ジャラララララララ！

『グ…ガア…ッ！？』

霊札から鎖が現れ、中央にいた妖魔を拘束する。

「すごいな…」

オレは素直に感心していた。

これは見間違えることなく”陣”だ。オレも俊樹にいくつか種類を教えてもらったが、これは確か…

”束縛”の術式。その上位術、”縛鎖^{はく}”の術式よ。…成功してよかった”

美里も多少不安だったのが、安心したように息を吐く。

「みんな、すげえな…」

美里ですらこんなにも戦えるようになっていくというのに、オレと
いう奴は…。

オレは”霊力が制御できない”という事情のせいでマトモに戦えない。
い。

だからオレはさっきからずっとこうやって”美里の準備が終わるまでの時間稼ぎ”と”美里の指定した場所まで妖魔を連れて来る”という役回りをやっていた。

体力には自信がある。だからオレはオレのできる範囲で役に立とう。
そう思ってたわけだが…。

(流石に少し凹むなあ…)

ここまでの実力差を見せ付けられては、流石に落ち込んでしまう。

「気持ちわかるけど…亮には亮でできることがあるわよ」

そう言っつて、美里は目の前で拘束されてもがく妖魔に視線を移す。

「…お願い」

「…あいよ」

美里の言葉の意味を理解して、オレは気を取り直し、右手に霊力を纏わせる。

”身体に霊力を纏わせる”…。”霊力を制御する”という技術にお

いて基本中の基本。

当初はそれすらもマトモにできなかったオレだが、なんとかこれだけはできるようになっていた。

「もつとも、”ただ纏わせる”だけなので”霊体に触れられる”程度のことしかできないのだが…。

というか、これ自体も俊樹が用意してくれた紙の腕輪による”抑制”の術式が最も影響している両手足でしかできない。

それ以外の場所で同じことをやろうとしたり、纏わせた状態から制御しようとするれば…ドカン！　だ。

だが、それでも一応”霊体に触れる”ことは出来るようになったわけ。

「散々追い回してくれやがって…よ！！」
ドガア！！

「グがアアああアあ！？」

未だもがいている妖魔の額に、オレは渾身の一撃を叩き込んでやった。

「が…グ…」

それほどタフでもなかったらしい。妖魔はその一撃で跡形もなく消滅した。

美里は陣の制御や霊術には長けている　　が、どうやら妖魔との戦いにおいては一撃必殺の”決め手”が無いようなので、それは俺が担当していた。

「ふう…この辺のは大体終わったか？」

オレは周囲の霊力を探る。

オレ達は未だ修行中の身なので、俊樹が気を使ってある程度楽な場所に配置してくれたらしい。

それでも数は十分多い気がするが…。

「…うん。この辺りにはもういないみたい。一度戻りましょうか」
美里の提案にオレは頷き、そのまま踵を返そうとして

ドクン

「ッ!?」

感じたのは、どこかで覚えのある”気配”。

美里も感じたようで、オレ達は無言で顔を見合わせる。

…気配を探る。が、どうやら向こうは隠れる気などないらしい。堂々とした足取りで、確実にこちらへとやって来ていた。

…どうする? そんな意味合いを込めて、美里に目配せする。

「…」

どの道、ここで逃げても恐らくは追いつかれる。どうやら美里は覚悟を決めているようだ。

「…出て来いよ」

…そんな美里の様子に俺も覚悟を決め、すぐそこまで迫ってきている気配に向かって告げた。

Another Side Out

「…ふう」

もう何体目になるかもわからない数の妖魔を倒し、俺はゆっくりと息を吐く。

この辺りは特に妖魔の数が多い地点のひとつだ。流石に1人でこの地点を死守するのは骨が折れた。

周囲の様子を探ってみるが、どうやら妖魔の侵攻は止まってくれたらしい。

俺は軽く伸びをすると、通信機を取り出し、耳に着ける。

「おい、誰か聞こえるか?」

とりあえず他の連中の状態を確認しておこう。そう思い、俺は通信機に呼びかける、が

ザー…ザー…ザー…

「ん…？」

通信機は激しいノイズのせいで使い物にならなかった。

電波状況が悪いのか…？ それとも壊れたか…。

「…仕方ない。一度戻って」

俺がそう言って戻ろうとして

「俊樹さん！」

聞きなれた声。それと同時に、奈々美がこちらにやって来た。

「…お前…」

「よかった。無事だったんですね」

慌てていたのか、息が切れている。

「慌ててるのはわかったから…。もっと気をつけないと、また転ぶぞ？」

「？」

「う…このぐらいは平気ですよ…」

そう言って、少し怒ったように彼女は言った。

「それで…なんでそんなに慌ててたんだよ？」

「というか神社はどうしたんだ？」

「ああ…それが、急に誰とも連絡が出来なくなりました…」

連絡が出来ない…俺は未だノイズで使えない通信機を彼女に見せる。

「俺もだ…突然通信機が使い物にならなくなってな」

もし他の連中も同じなら、少し面倒なことになっているのかもしれない。

「？」

「そうでしたか…。私はとりあえず俊樹さんの所まで走ってきたんですか…」

”不自然なほどの妖魔の発生”に、”通信機の故障”、ねえ…。

「とにかく、このまま2人でいても意味はねえな」

これがもし、”鴉”絡みだったとしたら…。この前の一件で目をつ

けられたのだとしたら…。

俺の思考など気付かず、彼女は真剣な表情で

「そうですね。早くみんなと合流しましょう」

そう言いつと、踵を返して歩き出す。俺も自然とそれに続く。

「…”みんな”。ねえ…」

「え…どうかしましたか？」

前を歩く彼女は、俺の眩きに反応して振り向こうとする。

…が、

…ジャカ

…俺は、”彼女”が振り向く前に、その後頭部に銃口を向けて告げた。

「…お前、誰だ？」

二十五ノ話 「出デシ黒翼」(後書き)

夏休みが終わった…。

シーズンのには大事な時期かもしれませんが、特に気にせず頑張つてます。

二十六ノ話 「幻閃」 (前書き)

月明かりの落ちる夜闇。

そのわずかな光すら飲み込む”影”。

そこから現れるは黒い翼。その羽となる”幻”と”閃”。
状況はゆっくりと確実に、俺達を追い詰めていく…。

二十六ノ話 「幻閃」

Another Side

「…出て来いよ」

…そんな美里の様子にオレも覚悟を決め、すぐそこまで迫ってきている気配に向かって告げた。

「…ほう、逃げずにいたことは認めてやる」

目前に広がる暗闇。そこから現れた人影。

周囲を照らす月明かりが、徐々にその人影の姿を浮かび上がらせていく…。

「…やつぱり、お前か」

そこにいたのは、忘れもしない人物。

あの廃ビルで、オレたちを襲い、俺が霊能力者として目覚める”きっかけ”となった人物…。

「…久しぶりだな。小僧」

そこにいたのは、以前廃ビルで遭遇した黒いコートの男だった。

その強い意志の宿った鋭い瞳。

そして威風堂々とした振る舞いは敵ながら感心してしまう。

「…ほう。以前よりは腕を上げたようだな。霊力の流れを読めば大体判る」

「…そりやどうも」

…俊樹の話が正しければ、こいつは前言った”鴉”って組織の関係者ということになる。

そして、もしその”鴉”が今回のこの妖魔の異常発生に関わっているのだとしたら

(…どう考えても、こいつらの仕業なんだろうな…)

そのくらいは馬鹿のオレでもわかることだ。

「さて…。前は突然の事でしくじったが、次は逃がさん。大人しくしているのなら楽に逝かせてやるっ」

男はそう言つと、霊力を開放した。

「…くっ…！」

前は、オレが突然覚醒したことによって追い払えたが…今回はそうもいかない。

「この前の”借り”。…返すわよ」

俺の少し後ろで美里が構える。

…はつきり言つて勝算は低い。

俊樹達依頼部メンバーの実力者が一人でもここにいてくれたら、まだやりようもあったかもしれない。

だが、まだまだ未熟なオレ達2人では悔しいが勝負にもならないだろう。

…精々前回より”長く時間を稼げる”というだけだ。

だが、今現在オレ達2人の状態で遭遇してしまった以上、なんとか撃退にしろ、逃走にしろ、生き延びなければならぬ。

(とにかく…いまは時間を稼ぎつつ様子を見ないと…！)

オレはそう結論付けると、ゆっくりと構えた…。

Another Side Out

「…お前、誰だ？」

俺は、目の前の”奈々美の姿をしているモノ”に向かって告げた。後頭部に銃口を突きつけられ、一瞬”彼女”の動きが止まる。が、すぐに何事も無いかのように

「誰って…もう、からかわないでくださいよ、俊樹さん」

「胸糞悪いんだよ、身内の真似事されるとさ」

下手すれば騙されてしまいそうなほどに似ている”目の前のモノ”。それが尚更俺に言い様の無い苛立ちを感じさせていた。

「…」

「…だんまり決め込むつもりか？ なら遠慮なく撃たせてもらうぜ？」

正直、コイツには聞きたいことが山ほどあるが…あんまりのんびりもしてられない。

俺のところに見れたということは…恐らくは他の連中の所にも何かが起こってる筈だからだ。

俺はゆっくりと引き金に指をかけて

「…いつから気付いていたんですか？」

と、”彼女”が口を開いた。

「…最初からだ。見た目も、口調も、特徴もよく真似れてたよ。下手すりゃ完全に騙されてたかもな」

だが、お前は奈々美がどういふ奴かをきちんと判ってない。

「…では、なぜ？」

「最初に駆け寄ってきたときな、奈々美なら一度は転んでた」

俺の言葉に、目の前のモノは一瞬驚いたように目を見開く。

そう、奈々美はいかなる異常事態だろうと転ぶときは必ず転ぶ。ましてあんなに慌てて走っていたら必ず転ぶのだ。

たとえ偶然俺の目の前では転ばなかったとしても、その巫女服にはここに来るまでに転んで汚れている筈だった。

「…んで、”みんな”って言い方だよ。これ聞いて確信した」

俺の言葉の意味が理解できなかったのか、”彼女”は怪訝そうな表情を浮かべる。

「…アイツはな、いつも複数人を”みなさん”って呼ぶんだよ」

アイツはどこまでも控えめで人に気を遣う性格だ。

アイツと交流を始めてもう1年になる。だが、アイツが敬語で話さ

なかったことはないし、きつと俺と出会う以前からもそうだったの
だろう。

どこまでも謙虚な奴… それを知っているからこそ、俺はその”違和
感”に気付くことができた。

「フフ… フフフフフ…！ なるほど、よく見てるのね、この娘の口
ト」

いよいよ観念したのか、”彼女”は本来の声色で話し始める。

容姿こそ奈々美とまったく同じだが、その口ぶりからは先程奈々美
のフリをしていた面影は全く見られない。

「…アイツに限ったことじゃない。お前がウチの身内に化けた時点
でこうなつてただろうよ」

人の嘘を見抜くといったことに特に敏感な俺は、こういった時に大
体察知してしまう。

「…なるほどね。やっぱりほんの少しの物真似じゃあ見抜かれちゃ
う、かあ」

”彼女”は後頭部に銃口を向けられているにもかかわらず、可笑し
そうにクスクスと笑った。

「いい加減正体を現したらどうだ？ それとも、自分の容姿に自信
がねーのか？」

いつまでもコイツには付き合っではいられない。急いで他の連中の
安否を確認しないと…。

「アラ？ これでもかなりの美人…」 だったらしい”わよ？”
「…なんだと？」

”彼女”の不可解な言い回しに、俺が問い返す。
すると、”彼女”はニヤリと不敵な笑みを浮かべて

「ゴメンナサイね。化けるのが仕事みたいなものだから、もう元の
容姿は忘れちゃったのよ」

”彼女”がそう言った瞬間。目の前の”奈々美の姿をしたモノ”は、
砂のように溶けて消えた。

「なっ…！？」

慌てて周囲を見渡す。もちろん周囲の霊力を探るのも忘れない。
「あゝあ。どうせならもう少し騙していたかったんだけどね」
響く声。そちらに視線を移すと、先程とは違った容姿の女が木の上に立っていた。

奈々美とはまったく異なるその雰囲気。それはどこか妖艶な雰囲気を纏っており、同時に危険な雰囲気も放っている。

容姿こそ違いが、さっきまで話していた声からして同一人物であることはわかった。

(…?)

なぜだろう。

その姿に、何か引つかかるものを覚えた。

「ホラ。女は男を騙すものでしょう?」

「…お前ら。」 鴉”か?」

冗談めかして話す女の言葉を無視して問う。

「さあ? どうでしょうね」

女は笑みを崩すことなく答えた。

「閃”が世話になったようだから、ちょっとした”お礼”のつもりで来たんだけど…: 気に入って頂けたかしら?」

「”お礼”だと?」

”閃”とは人名だろうか…? あの廃ビルにいた黒コートの男の事か…?

「ええそう。」 ”お礼”。お祭りをとびつきり楽しく盛り上げてあげたんだもの、感謝してね?」

クスクスと笑いながら女は言った。

…なるほど、やっぱりコイツ等の仕業か。

「そういう事なら悪いが大きなお世話だったよ。盛り上げるどころか面倒にしちまつてる」

「アラ、手厳しいのね」

相変わらず女は可笑しそうに笑っている。

…随分とチャラチャラした女だ。

「フフ…本当に残念。ワタシの変化へんげに気付いてさえなければ、ゆくり、優しく、殺してあげたのに…」

女がそう言った刹那。女の霊力が解放される。

このねつとりと肌に張り付くような感じ…。

それだけで目の前の女の人間性が判ってしまう程だった。

俺はまだ余裕そうな女に、不適な笑みを浮かべて

「悪いな、まだこんなところで死ぬつもりはねえんだよ。まだやりたいことが山ほど残ってる」

そう言つて、再び銃口を向けてやる。

女は、それに対して再び可笑しそうに笑う。

「いいわあ…。その意志の強い瞳、強気な態度、そういう男は嫌いじゃないわよ？　むしろ惚れちゃいそう」

女の態度は相変わらずだが、臨戦態勢の俺を前にして、女の放つ雰囲気はより危険なものへと変化していた。

「そうかよ…。でも俺はお前みてーな女は好みじゃねえな」

「フフ…振られちゃった。でも折角だから名乗っておきましょうか」
女はゆらりと木から降り立ち、その妖艶な瞳で俺を見る。

「幻げん…。それが、今からアナタを殺す女の名前よ…」

「…上等だ…！」

俺と女。2人の霊力が交じり合い、張り詰めた空気が周囲に満ちていた…。

Another Side

「炎えん…！！」

美里の詠唱した術式により、男に無数の火球が襲い掛かる。

「…ふん！！」

ブウン！

男はそれを拳を薙ぎ払って掻き消した。

「このっ！！」

火球の影に隠れていたオレは、男に向けて拳を放つ。

ガシイ！！

「ほう…？」

あの頃はマトモに戦う事すらできなかったが、今は訓練のおかげで何とか”時間稼ぎ”はできていた。

この間に誰か来てくれたら一番なんだけどなあ…。

「…お前には驚かされるばかりだな。想像以上に成長している」
男はオレの拳を受け止め、感心したように呟く。

「そりやどうも…っ！！」

ブウン！！

男が掴んでいる拳とは逆の拳を振りかぶり、放つ。が、男はあっさりとそれを後ろに飛んで避けた。

「…筋はいい。だが、まだまだ詰めが甘いな」

「そうかよっ！！」

男は呟くと、一瞬身構えてオレと距離を詰めようとする。

「ッ！？」

それをすかさず察知したオレは、繰り出される男の拳を後ろに飛んでかわす。と…

「…”炎”、”破”！！」

オレが後方に下がると同時に、男の足元を霊力が明るく照らす。そして

ドガアアアアアン！！

その場所を中心として、小規模な爆発が発生した。この術を発動したであろう美里のほうを見る。

美里は数枚の霊札を持って爆発地点を警戒しつつも、こちらに頷きで返した。

「やつ…たか…？」

「…ッ。いいえ、まだみたいよ」

美里と同じく、オレも爆発地点の霊力を探ってみる。

爆発に使用された美里の霊力。…そして、その中に色濃く感じる”鋭い霊力”。

「…やってくれる。どうやら、もう”弱者”という部類ではないようだ」

立ち込める煙の中から、男がゆっくりと歩み出る。

爆発を至近距離で受けたはずなのに、全く消耗している様子がない。うまく誤魔化してるだけかもしれないが…。

「…”弱者”と呼んだ事を訂正しよう」

…そう呟いた男の雰囲気、ほんの少し変わった気がした。

「…これで、俺も心置きなく屠る事ができる」

瞬間。周囲に立ち込める濃紫の鋭い霊力。

「…ッ！？」

その纏う雰囲気だけで、男が本気を出した事がわかった。

(…くそ…！ このままじゃ…)

男を変わず睨み続けつつも、オレも美里も圧倒的な力の差を感じていた。

このままじゃ”死ぬ”…。その予感が次第に大きくなっていく。

「…行くぞ…！」

男は身構え、今までとは比べ物にならない速度でこちらに向かって来た…。

二十六ノ話 「幻閃」 (後書き)

戦闘パートって難しいですね。

”鴉”との戦いはもう1〜2話ほど続く予定です。

二十七ノ話 「好敵手」 (前書き)

次第に劣勢に追い込まれるオレ達。

ジリジリと削られていく体力。

そこで浮かんだ一つの”策”に、オレは全てを賭けたのだった…。

二十七ノ話 「好敵手」

Another Side

ブウン！

「ぐっ！？」

シユン！

ガッ！

ドンツ！！

状況は、確実に悪くなっていた。

霊力を開放した男の動きはこれまでに以上に鋭く、速くなっている。

オレは霊力を纏わせた拳で男の拳を弾き、時には避けて直撃を防いでいる。が…

「…フツ！！」

ブオン！！

「うお！？」

首を捻ると、頭の真横を男の拳が掠めて行つた。

男の拳を弾いている両腕は既に衝撃でビリビリと痺れている。

かなりの時間、こうして動き続けているため、体は疲労で軋んでいる。

(このままじゃ…ギリ貧かよ…ッ！)
オレは後ろに跳んで男と距離をとる。
「…”雷”！」

ビシヤアアアン！！

即座に美里の詠唱が木霊し、男の頭上に雷雲が現れ、稲妻が男を襲う。

「…フン！！」

男は、それを避けることもせず、拳を頭上に向けて振りかぶり…

バギイイイイン！！

という轟音と共に、稲妻を拳で弾き飛ばしてしまった。

軌道を大きく逸らされた稲妻はあらぬ方向へと飛んで行き、そこにあつた木々をなぎ倒す。

「…随分と術の精度が落ちたな。そろそろ限界か？」

男は美里の方をじつと見据える。

見ると、美里には傷一つ無いものの、額には汗が浮かび、荒い息を吐いていた。

オレと違って美里は後衛で術の援護をしてくれていた。

そのおかげで外傷は無いものの、度重なる術の使用で集中しているため、美里は精神的な疲労が大きかった。

美里の纏う緑の霊力が微弱なものになっているあたり、相当消耗しているのだろう。

今はなんとかオレが男の攻撃をしのいでいるから成り立っているものの。このままではいずれ負けてしまう事は明白だった。

(美里が術で仕留めるのはもう不可能に近い…。やっぱりオレが何とかするしか…！)

とは思うものの、オレはこうして手足に霊力を纏わせる事が精一杯

だ。

それ以外のことをしようとするれば、霊力の暴走で大爆発が起きる。それをあの男に当てるのもいいかもしれないが…避けられる可能性のほうが高いし、外した時のリスクの方が明らかに大きかった。

（なんとか…爆発に吹っ飛ばされずに連射でもできればいいのかも知れないけど…）

そこまで考えて、ふと思いついた。

爆発で吹っ飛ばされる…吹っ飛ばされ…”吹っ飛ぶ”？

（…一か八か、やってみるか…！）

成功すれば男を大きく怯ませ、さらには逃げるか、追いつきかできるかもしれない。

不確定要素が多いから賭けに近いし、何よりこの状況じゃ美里に直接伝えられないから、察してもらおうしかないのだが…。

…どのみち、このままではやられてしまう。

可能性が一つでもあるのなら、それに賭けてみようと思った。

「…」

オレはふと美里に目配せをする。

「…？」

「…」

オレは何も語らず、ただまっすぐに美里を見詰めた。

…これですべてを察してもらおうとは、思っていない。

ただ、これからオレが何かをするということだけは、察してほしいかった。

「…」

数瞬、交差する視線。

美里はそこから何かを察したのか、ただ黙って頷いてくれた。

「ふむ…覚悟は決まったか。ここにきて逃走などという下策は晒すなよ？」

男は再び身構える。

「…まさか。逃げたって殺されるに決まってる」

オレは笑みを浮かべて余裕を見せる。と、男も薄く笑った。

「フ…そうではなくては、俺も全力を出した意味が無い」

互いに視線を交差させ、その刹那、オレ達が動いたのは同時だった。オレの無い知恵絞って必死に思いついた、”秘策”。

この男にとつてそれが下策となり得るかはわからない。

「…フツ！」

ブン！！

けどさあ…。

「くっ…あああああああ！！」

ド…スウ…！

同時に放たれた拳。

だが、オレの拳は体を捻って避けられ、男の拳は鋭く、オレの腹部にめり込んでいた。

「か…ふ…！」

一気に体の内側を衝撃が駆け抜け、口から体の中身が飛び出そうな感覚に襲われる。

…が。

「…ここで、根性…見せねえと…カツコ、つかない、よなあ…！！」

ガシィ！

「…ツ！？」

オレは届かなかった拳を動かし、男のわき腹を掴む。

俺の予想外の行動に、男は一瞬うろたえる。

…その一瞬で、十分だった。

「美里！ やれ！！」

オレは振り返らず、美里に向かって声を絞り出す。

「…ッ！？ …雷”！！」

美里はオレの覚悟を察してしてくれたのか、一瞬だけ躊躇った後、即座に術式を発動させた。

ビシャアアアアン！！

その瞬間、再び男と、オレを襲う稲妻。

「ぐ…あああああ！！？」

「う、ぐ…ううう！！」

…これで、オレの作戦の第2段階は完了。

オレ諸共男を襲う稲妻。美里もギリギリで、威力はそれほど大きくは無いが、男を怯ませるには十分だった。

オレは一瞬だけ美里の方に振り返り、再び目配せをする。

美里はそれに気付くと、俺の意図を察したのか、必死に霊力を練り上げていく。

俺はそれを確認すると、未だ怯んでいる男に身構え、両腕に霊力を集中させていく。

「…亮！？」

美里が予想外のオレの行動に思わず声を上げる。

当然だ。無理に霊力を制御しようとするればどうなるか、美里だってよく知っている。

だが、オレはそんなことはお構いなしに”両腕を後ろに伸ばして”集中させていく。

「お、前…何を…！？」

不可解なオレの行動に、男は少し動揺する。

「食らいやがれ…！ 即席で考えたオレの必殺技…！！」
後ろに伸ばした霊力に、オレは一気に霊力を流し込んだ。

「…人間口ケツトオ！！」

「ぐ…があああああああ!!??」

響く言霊。と、共に、男の頭上に巨大な炎の塊が現れ、勢い良く男に向かつて振り下ろされた。

恐らく、美里の渾身の一撃だったのだろう。

男は防御する間もなく直撃を喰らい、熱と衝撃に表情を歪めた。

(これで…退いてくれれば…)

オレは先ほどの”人間ロケット”でボロボロになっており、美里も恐らく今の術で限界を迎えただろう。

これで男が戦闘不能になってなかった場合、その時は…覚悟を決めるしかない。

「…」

オレはよろよろと身を起こし、目の前で立ち込める炎を見据えた。

「ぐ…ハア…ハア…!!」

「…!!」

男は、立ち上がった。

纏う黒いコートは業火と衝撃でボロボロになりながらも、その鋭い瞳のまま、じつとこちらを見据えてきた。

(仕留められなかったか…!)

男は今の攻撃で大きく消耗したらしく、荒い息を吐いていた。

「…大したものだ。ここまでの深手を負わされるとはな…自身の未熟さ、甘さを痛感したよ…」

「…」

お互い、もう戦う力は残されてはいない。

ただ、じつと見詰め合う。

「…時間切れ、か。どの道これではもう戦えはしない…」

男はそう言つと、その場から一瞬で姿を消した。

オレは慌てて周囲を見渡す。

男は、大木の上からこちらを見下ろしていた。

「…小僧。…名前は？」

男は、視線を逸らすことなく問うた。

「…藤原。藤原 亮だ」

オレも視線を逸らすことなく告げる。

「…俺の名は閃だ。その名前、覚えておくぞ。藤原 亮」

男はそう言つと、姿を消した。

オレは周囲の気配を探る。…どうやら本当に去ってくれたらしい。

「ッ…！ ハア…」

オレは緊張が切れて、思わずその場に座り込んでしまった。

「亮！」

振り向くと、美里がこちらに向かって駆けてきていた。

…オレ。生きてるんだな…。

そう思った瞬間、全身にどっと疲労感が押し寄せる。

…しばらく、ここで休んでいよう。

オレは美里に軽く手を上げて、駆けてくる美里を迎えたのだった…。

Another Side Out

月明かりの届かない木々の奥。

バアン！

その静寂の空間に、「ここには似つかわしくない”銃声”が響いていた。

「フフフフ…！ どこ見てるの？ ちゃんとワタシのコトを見て

欲しいわね…！」

女 ”幻”はクスクスと笑いながら俺の銃弾を避けていく。こいつ…やっぱり幻術使いか…！

俺の霊弾はほとんど正確に相手を打ち抜いている。

…が、打ち抜いた標的は霧のように歪み、消えてしまう 幻術
で作り出した”幻影”だ。

「ホラ、こつちよ…！」

背後から聞こえてくる声。俺は即座に銃口を向け、女を打ち抜く。…が、それもまた霧のように消えていく。

「残念。こつちでした」

ヒュン！

「くっ…！」

振り向いた俺の背後から聞こえてきた声。

俺は振り返りもせず身体を捻る。

その刹那、背筋を短剣が掠めていった。

「アラアラ。よく避けるのね」

俺は振り向くと同時に右手を振り、裏拳を繰り出す。

が、そこには既に女はいなかった。

「ち…ちよこまかと…！」

「そりゃあそうよ。ワタシ、これでも身持ちは堅い女だもの」

女は、そう言っただけで笑う。

「気に入らねえな…色々」と

俺は女を睨みながら吐き捨てる。

「アラ。本当に残念ね。お気に召さなかったかしら？」

女は「じゃあ…」と呟くと、くるりと回る。

と、女の姿が一瞬ぼやけ、そこには、”奈々美の姿をした”女が立っていた。

「やっぱりアナタはこの娘みたいな純真なコがお好みかしら？」

姿こそ奈々美と瓜二つだが、その雰囲気や表情は全く違っている。

「デメエ…！」

奈々美はもちろん、そうやってあいつ等をコケにするような態度は許せない。

「アラ、怒った？ フフフツ…！」

女は奈々美の姿のまま可笑しそうに笑う。

俺はそんな女に銃口を向け、遠慮なく引き金を引いた。

バン！

女の姿は再び消える。

一瞬の沈黙の後…

「容赦ないのね？ 一応見た目はアナタの知り合いなのだけれど」

「なっ…！？」

…女の声は、俺の耳元で聞こえた。

視線を移すと、短剣の刃先が俺のすぐ目前まで迫ってきた。

そして…

ザ…ク…

…短剣の突き刺さる音と共に、紅い鮮血が月明かりの下で光り輝いた…

二十七ノ話 「好敵手」 (後書き)

亮、美里vs閃はこれにて決着。

危険な状況へと追い込まれた俊樹ははたして…？

次回もお楽しみに。

二十八ノ話 「紅キ視界ノ中デ」 (前書き)

女の作り上げた結界の中で、次第に相手のペースに翻弄される俺。
絶望的な状況と共に追い詰められる中。

突如として俺の視界は紅く染まるのだった…。

二十八ノ話 「紅キ視界ノ中デ」

ザ…ク…

「…っ!？」

短剣の突き刺さる音と共に、紅い鮮血が月明かりの下で光り輝いた。
「…アラ残念。今度こそ殺してあげようと思ったのに」
俺は”右腕に突き刺さった”短剣を確認すると、即座に左手で女の腕を短剣の柄ごと掴む。

「…アラ？」

「…掴まえた…!」

あの瞬間で短剣を避けるのは不可能…そう判断した俺は、咄嗟に右腕を盾にして急所への攻撃を免れていた…が、これで掴まえられたとは、何とも皮肉な話というか…。

俺は左手はそのままに、右腕を引いて短剣を引き抜く。

「…っ!」

腕に鈍い痛みが走り、血が溢れ出すが、今はそれどころではない。即座に右腕に靈力を集中させていく…。

「これなら…逃げられねえよなあ…!」

俺は右腕を振りかぶると

「…”衝”…!」

ドオン…!

右腕の衝撃を、女に叩き込んだ。

「…仕留めたか？」

”衝”を至近距離で叩き込まれた女は、そのまま背後の木々をなぎ倒し、彼方へと吹き飛ばされていた。

…手応えは、確かに感じた。

俺は周囲の警戒を解くことなく、女の吹き飛ばされた方向を睨みつける。

なぎ倒された木々の隙間から、月明かりが仄かに周囲を照らしていた。

と…

「フフ…フフフフ…ッ！　いいわ、アナタ。本当にステキ…！」

「！？」

声は背後から聞こえた。振り向くと、そこには、確かに吹き飛ばされたはずの女が変わらぬ姿で樹木の枝の上からこちらを見下ろしていた。

「チ…手応えはあったはずなんだけどな…」

「そんなに落ち込まないの。心配しなくても、アナタの一撃は当たってるわよ？」

女は可笑しそうに笑うと、自身の髪の一部を手を持った。

よく見てみると、その部分は焼き切れたように短くなっている。

「長い髪が自慢だったのに…、アナタのおかげでこうなっちゃった。ホント、強引なんだから…」

女は拗ねたように言っているが、表情は相変わらず妖艶な笑みを浮かべたままだ。

「…掠っただけだったってか…」

手応えの正体は…あれも幻影だったか、あるいは、手応えそのものが幻術の一部だったか…。

（マズいな…）

幻術使い　あの女のペースに、完全にハマっている。

こうなってしまうと相手の幻術に翻弄され、敗北するのは確実。何とか状況をひっくり返すためには、あの女の幻術を破るしかない…が。

（今となっては…それも困難か…）

女はかなりの使い手だ。幻術を破るとするならハマるまえに…なる

べく早いほうがいい。

だが、そもそもアイツが奈々美に化けて現れた以前から周囲の状況は不自然だったのだ。もし、その時点でアイツの術中にハマっていたとするならば「あれほどの”使い手”の幻術を破る事は相当困難だろう。」

かなりの劣勢だ…正直言つて勝てる見込みは薄い。

「もう少し遊んでいたいところだけれど…生憎コチラも時間が無いのよね…。だから…」

「…ッ！」

女の纏う殺気　　霊力が、さらにその鋭さを増した。

「悪いけど、そろそろ死んでもらうわね？　ホントはもっと早く仕留められると思ってたのに…ホントにもつたいないわ…フフ…」
そう言つた瞬間。女はその場から霧のように霞んで消えた。

また幻術かよ…俺は周囲の霊力を探り、攻撃に備える。

…が、女の霊力は周囲一帯に満ちており、その動きを探る事はほぼ不可能だった。

（一気に霊力を開放して…気配を遮断したか…！）
こうなると霊力ではなく、実際の動きから”気配”を察知して動くしかなくなる。

一つ不安要素があるとするならば…さきほどの”手応え”の時のように、気配そのものをダミーとして利用される可能性がある、ということがある…。

（通信機の妨害も含め…俺はあの女の張つた結界に閉じ込められているのは確実。これほどの使い手の結界を俺が内側から破るのは不可能だ。外から破れるとしたら…）

…妖刀の力がある晃か、霊力量の多い亮か、か…。
そこまで思考した時、僅かな気配を感じた。

「ッ…！」

バァン…！！

すぐさまそちらへ銃口を向け、引き金を引く。
…女の姿は無し。再び別の位置に気配。

バァン！ バァン！

「…チ」

気配はすれども、姿は見えず。それどころか、相手は1人のはずなのに、1つ、また1つと気配が増えてきている。

…仲間を呼んだ、というわけでもない。やはり幻術で気配そのものを作り出している…？

…さ、そろそろ死んでもらいたいでしょうか…！

「な…ぐう！？」

周囲に響き渡る女の声。と、同時に、周囲360度全ての方向から”斬撃のみ”が飛んで来た。

ザザザザ…ザク…ザザ…！

「…く…！」

短剣での攻撃だろうが…軌跡のみで姿が見えない。

防御しようにも、どれが幻影でどれが本物かすら判断できない。

俺は姿勢を低くして必死に急所を守る。

所詮は短剣の攻撃だ。傷も浅く、一撃で致命傷になることはないだろう。

だが、この全方向から襲ってくる斬撃の嵐に、俺は防戦一方にならざるを得なかった。

「く…そ…お…！」

この開けた場所では分が悪い。俺は後ろに跳び、そのまま後退しつ

つ敵の攻撃を腕で防ぐ。

「が…く…！」

衣服は既にボロボロで、そこから覗く肌には、浅いながらも無数の切り傷が痛々しく増えていく。

木々の生い茂る森の中まで後退した俺は、即座に斬撃の飛んで来た方向へ銃口を向けた。

バアンバアンバアンバアン！！

標的が見えない以上、当てずっぽうで放たれる霊弾。

だが、牽制程度にはなったのか、斬撃の嵐が止んだ。

「ハア…ハア…」

腕には刺すような痛みが走る。無数の斬撃を受け止めた両腕は、痛々しく鮮血が流れていた。

「どうかしら？ 少しは気に入っていただけだ？」

クスクスと笑い声が周囲に響く。と同時に、木々の陰から女が姿を現した。

「く…！」

俺はすぐさま銃口を向ける。両腕は相変わらず痛むが、今は構ってられない。

「アラ？ まだまだ抵抗できる力が残ってるのね。フフフ…ホントにステキ…」

再び響く声。…だが、今度は背後から聞こえてくる。

振り向くと、大木の枝の上に座る女の姿。

前にいる女は相変わらず妖艶な笑みを浮かべたままこちらを見つめている。

「こんな出会いじゃなかったら…ワタシのモノにしているのに…ね？」

今度は左右。暗闇からそれぞれ女が姿を現した。

「言つたる…テメーみたいな女は好みじゃねえって…」

最早どれが本物かは判別が出来ない。

「フフ…残念ねえ…」

恐らくこの状況で俺個人が戦ったところで勝利は不可能だろう。

…と、なると、亮か晃がこの結果に気付いて破壊してくれるのを待つしかない…が、体力的にこれ以上時間が稼げるかどうか…。

「…」

「そろそろ覚悟を決めたらどうかしら？ オトコなら覚悟を決めるものよ？」

周囲の女は同時に口を開く。

その言葉に、俺はただ睨み返す。

「…いいわあ。その眼、ホントに変わらないのね？」

「…は？」

今…何て言った？ 変わらない？

この女は…俺を知ってるのか？

「何の話だ…？」

「あら、ゴメンナサイね。今のは聞かなかった事にしてくれる？」
女はばつが悪そうに言うが、相変わらずその表情は愉しげだ。

…ずっと、目の前の女に引っかかるものを感じていた。

いや、正確には…”女そのもの”と、”女の姿”それぞれに、だろ
うか？

何なんだ…何がどうなって

そこまで思考して、急に意識がぼんやりと揺らいできた。

「…！？ これ…は…！？」

手足が痺れ、立っているのも難しくなってくる。

呼吸が乱れ、意識がはつきりとしなくなってきた。

まさか…これは…！？

「フフフフフ…！」 ”毒”が利いてきたようね？

そう言っつて、女は持っている短剣をひらひらと振って見せた。

なるほど…妙に殺傷能力が低い獲物を使ってると思っつたら…毒が仕
込んで…！

「くっ…」

銃口は相変わらず女に向けていたままだったが、次第に手が震えて狙いが定まらなくなってくる。

「遅効性の神経毒…悪趣味な…」

それほど強い毒ではない…と思う、が。こうやってじわじわと弱らせていく戦い方は、前の前の女の性格がよく現れていた。

「悪いけれど、あまり時間をかけてもいられないのよ。アナタのお仲間がやって来られても面倒だし…だから、そろそろ狩っちゃうわね…？」

だめだ…意識が遠くなってくる。最早時間を稼ぐなんて言ってもらえる状況ではない。

頭が回らない。俺はついに地面に膝を突いてしまった。

「ぐ…ハア…ハア…！」

ぼんやりとした意識の中で、じわじわと歩み寄ってくる女たちの姿を眺める。

そう、俺はやはりどこか見覚えがあった。女にも、この姿にも…。真っ赤に染まる景色の中で…確か…俺、は…。

『 天…昇……八紅……』

…ドクン…

ふと、脳裏に何かが響き渡る。

声のような…音のような…何か。

『 混……二…デ、殺……二顕……』

…ドクン…ドクン…

これは…幻聴なのだろうか。

心音がはつきりと脳裏に響き、呼吸はさらに荒くなる。

…。

『 混…ヲ…べ、…ヲ…ル…月…化… 』

妙に、頭が冴えてきた。

毒のせいなのか、はたまたそれとは違う何かなのか、それはわからないが…。

身体感覚は、未だ曖昧だ。だが、震えは止まっている。

「…」

何だろう。視界が紅い。周囲の様子を伺ってみるが、周囲の時間が止まったんじゃないかと思うくらい静かだ。

…ふと、こちらに歩み寄ってきているはずの女に視線を移す。

「…?」

何だろう。どれも姿が半透明だ。

俺は周りを見渡す。…と、その中に1人、しっかりと実体を持った女の姿を捉えた。

「…」

俺の意思なのか、それすらも曖昧なまま、俺はそいつに銃口を向ける。そして

バァン！

…何のためらいも無く、引き金を引いた。

「な　くあつ!?!」

瞬間、止まったかのように緩やかだった周囲の時間が、再び動き出したかのように正常になった。

女は霊弾を喰らって怯む。

…と、同時に、周囲の女の幻影が消滅した。

頭は相変わらず冴えている。身体感覚は無いが、痛みや震えは無い。

だが、意識は相変わらずぼんやりしている。自分が自分の身体じゃないような…

「な…何…？ どうしてワタシが…それに、この霊力…!？」

女は急にこちらを警戒し始めたが、自分でも何がなんだかわからない。

視界は、未だ紅いまま。俺はこちらの様子を伺っている女に向かって、遠慮なく走り出した。

「!…くっ!」

女は再び姿を消す…が、その動きや姿は、紅くなった視界の中で鮮明に映し出されていた。

「…」

俺はその場所を狙い、右腕に霊力を集中させていく。そして…

『…”衝”…!』

「え」

ドガアァン!!

女に、至近距離で衝撃を放っていた。

今度は間違いなく当たった…そういう確信があった。

「う…ぐ…何よ…ソレ…!!」

土煙の中から、肩で息をする女の姿が現れる。

やはり直接攻撃には脆いらしく、今の一撃で既にかなり消耗させていた。

「何で急に…こんな…!」

「…」

俺は女に一步踏み出す。そうだ、今のうちに仕留めないと…。

そう思い、再び一步を踏み出そうとして

ガツシヤアアアン！

「俊樹君！」

「俊樹さん！」

「…幻、無事なようだな」

…結果が切り裂かれ、ガラスの割れるような音と共に、晃と霞が飛び込んでくる。

と、同時に、女の側に黒いコートの男が現れた。

…それを確認すると、俺の意識が途絶えるのは、ほぼ同時だった…。

二十八ノ話 「紅キ視界ノ中デ」 (後書き)

昨日、面接に行ってきました…と同時にやってくる中間試験。結局受験で忙しくなるのは誰でも同じなようです…。
これからは少しばかり忙しくなるかも知れません。

二十九ノ話 「夜明ヶ」 (前書き)

激闘が終わって夜が明ける。

俺の目覚めは周囲とは違って遅く、その間にも確かに”黒い翼”は存在しているのだった…。

二十九ノ話 「夜明ヶ」

ザク…ドシユ…!

バン！ ダダダダダダ…

…紅^{あか}だった。

「うわああああ!!」

「きゃああああああ!!」

…その景色を見て思ったのは、そんな簡素で飾り気のない事。

…鼻腔を擽るのは、突き刺すような血と焦げたような匂い。

…ああ、紅い。

…この視界も、身体も、…この腕も、何もかも

…ごめん、ね…約束…したのにね…

…一番紅い”彼女”は、力なく微笑んでいた。

…”彼女”が何かを与えてくれたのかは、今となってはわからない。

…それは、これからもわかることはないのだろう。

…全てを理解するのは、今の俺には不可能となってしまうたのかも
しれない。

…身体には傷一つついてはいない、仮に、俺の”何か”が傷ついて
いたんだとするならば…

恐らく、この時から、俺は”心”というものが大きく抉ら
れ、欠けてしまったのだろう…

…ああ、本当に、紅い…。

Another Side

「…篠原の様子はどうか？」

神社の奥の部屋の一角。畳に座っている朝比奈さんに私は問いかけ
る。

「…（フルフル）」

「…そう」

”鴉”の襲撃から夜が明けて今日。

昨夜、戦闘後の消耗もあって、私と亮はあの場から動けずにいた。
そこへ霊力を辿ってやって来てくれたのが坂本さん。

坂本さんの神術による治療の後、私たちは揃って神社に戻っていた。
…そこには、傷だらけの篠原を背負った久遠君と、心配そうにそれ
を見つめる朝比奈さんの姿があった。

坂本さんは慌てて篠原の治療を始めたが、傷も毒も感知したのに篠
原は目を覚まさない。

その事を沙希さんに伝えると、沙希さんはすぐに来てくれた。

沙希さんの話によると、「霊力に乱れがあるから、恐らくは”精神
的な何か”が原因で目を覚まさないのだろう」とのこと。

結局その時は深夜ということもあって、私たちは篠原を神社に預けて帰路に就いた。

…私たちがいくら死と隣り合わせの戦いを繰り広げても、それが世間に知られる事などは無く、学校はいつも通りやってくる。

篠原はもちろん欠席。その看病をしている坂本さんも欠席。亮は戦闘での怪我がひどくて学校にはこれなかった。

…意外だったのは、朝比奈さんが欠席していたと言う事だ。

一緒にいた久遠君が平気そうだったから、戦闘での消耗…とは考えにくい。

そう思いつつ放課後に神社に様子を見に行くと、そこにはやはり朝比奈さんがいたのだった。

「部長。傷だらけでした。危険だからとあんなに言ったのに…無茶をして…」

呟き、目を細める朝比奈さん。

…そう、現在私たち依頼部は6名。あの時坂本さんが神社に残っていた以上、3チームに分けるなら当然誰かが1人で行動しなければいけなかったのだ。

篠原は未熟な私たちには任せられない、と自分が単独で行動すると言った。

あの状況で単独行動どれほど危険かは素人の私でもわかる。

篠原の単独行動に一番反対していたのも朝比奈さんだった。

私は篠原の実力を良く知っていたから、信頼と言う意味もあってあまり強く反対はしなかったけれど…やはりこういう結果となると、あの時引き留めなかったことが悔やまれる。

「本当に…バカです」

いつも涼しい顔できつい言葉を発する朝比奈さんも、今回ばかりはその勢いは弱弱い。

「…」

私は、眠り続けている篠原の顔を見る。

沙希さんの話では、一時的なものだから、近いうちに目を覚ますとは言っただけだ…

「みんな心配してるってのに…何やってるのよ…」

私は、未だ眠っている俊樹に向かって、小さく呟いたのだった…

「朝比奈さん、ちゃんと休んでる？」

翌日も朝比奈さんは欠席。神社を訪れると、やはり朝比奈さんは篠原の眠っている布団の側に座っていた。

「…大丈夫です」

「朝比奈さん。朝早くから来てくれるのはありがたいのですが…やっぱり少し辛そうです」

その横にいる坂本さんも、不安げに呟く。

「…そう言う坂本さんも辛そうだけど？」

「…い、いえ！ そんなことはないですよ！？」

私の指摘を慌てて手を振って否定する坂本さん。

（わ、わかりやすい…）

坂本さんも毎日神術で篠原の治療を行っている。

外傷は感知したのに、意味あるのかと最初聞いたところ、どうやら霊力の循環を安定させる効果もあるらしい。

身体面だけでなく、霊力に関わる精神面でも治療して初めて霊能力者にとつての”治療”といえるのだそうだ。

「…私が出るのは、こんなことしかありませんから。いつもドジばかりですけど、こんな時くらいは…」

坂本さんは、そう言って胸の前でぎゅっと両手を握った。

「…こんな時」、か…」

皆が篠原のことを心配している。それは同じだ。…けど、多分この2人が一番彼のことを心配しているのではないだろうか。

ついこの間メンバーに加わった私たちよりも、ずっと…

「…お邪魔します、と…美里も来てたのか」

「みなさんお集まりのようで」

声に振り返ると、亮と久遠君が部屋に入ってきた。

「まだ起きませんか？」

久遠君の問いに、坂本さんは力なく首を振る。

「いつも寝てばかりでしたが、今回は随分と長いですねえ」

久遠君はいつもの笑顔のまま茶化して言う。

でも、みんなわかつている。久遠君も笑顔こそ浮かべてはいるものの、やっぱり篠原の事が心配なのだ。

「それにしても…2人ともすっごい健気だよなあ…毎日毎日こんな美少女に看病してもらえて、羨ましいいったら…」

「そ、そんなっ！　び、美少女だなんて…そんなことは…」

「…」

亮の一言に、慌てた様子を見せる坂本さん。

それに対して朝比奈さんはただ無言で亮を見詰め返すだけだ。

「…な、なに？　朝比奈さん？　オレ、なんか変なこと言った…？」

「…（ジトー）」

「う…な、なに…？」

「…（ジトー）」

「う、ぐ…」

「…（ジトー）」

「ああもう、悪かったよ！　変なこと言って悪かったって！」

あ、そこ謝っちゃうんだ。

そんなやり取りで、少しだけ場の雰囲気が和やかなものになる。

無意識的なものかもしれないけど…亮のこういうところは一種の才能なんじゃないかとさえ思う。

普段は冴えないけど、亮のそういうところは私も好きだった。

「う…ん…？」

眩しい光のようなものを瞼越しに感じて、俺はゆっくりと眼を開けた。

「ここ…は…？」

頭がまだぼんやりとしていて、いまいち現在の自分の状況を把握できていない。

まず視界に飛び込んできたのは、見覚えのある天井。

…ていうか、ここは…奈々美の神社、か？

あれ？ 何で俺、神社に…

…。

…。

…。

「…！！」

夜の出来事が一気に脳内に呼び起こされ、俺は即効で上体を起こし

パキ！

「あ…っ…！ぐ、つううう…！」

間接がイイ音を立てて鳴り、俺は地味な痛みにも表情を歪める。

…身体がやたらと気だるい。試しに間接を曲げてみたら、どこもイイ音が鳴った。

…今度は覚悟してたから痛みは無いぞ？

「…ただ寝てただ、俺…？」

外を見てみると、そろそろ昼ごろだろうか？

この身体の鈍り具合から、あの夜から数日経ったと考えていいのだろうか…

「…ん？」

ふと、自分の寝かされている布団の上に重みを感じて、俺は視線を下げてみる。

「あ…」

「…すー…すー…」

そこには、霞が静かな寝息を立てて眠っていた。

…この様子じゃ、しばらく側で看ててくれたのだろう。

…いつもはきつい発言が目立つのに、やっぱりこのショートカットに眼鏡の小柄な少女は子供っぽく見えてしまう。

「…黙つてりゃ可愛いと思うんだがなあ…」

と、本人に面と向かつて言えないような事を呟きながら、そっと寝ている霞の頭に手を置いた。

「う、ん…？」

「…と」

それで起こしてしまったらしい。

霞はゆっくりと瞼を上げ、眼をこすりながらきよるきよると周囲を見渡していた。

「悪い、起こしちゃったか？」

「え…？ いえ…」

…と、そこまで言つて、俺と眼が合う。

「…」

「…な、何だよ？」

霞は珍しく驚いた表情のまま固まってしまっていた。

「俊樹…さん？」

「おう、俊樹さんですが」

俺がいつもの調子で答えると、霞は眼に涙を浮かべて

「…俊樹さん…っ！」

ぎゅっと胸に飛び込んだ。

「うおう！ どうしたんだよ、いきなり!？」

「俊樹さん…っ！ よかった…本当に…!」

俺の胸にしがみつく霞の手は、細かく震えていた。

…ああ、なるほどな。

俺はポン、と再び霞の頭に手を置く。

「心配かけたな。お前にも、みんなにも」

「…本当です…！ 1人で無茶ばかりして…！」

「あ…うん。悪かったって」

随分と心配をかけていたらしい。この様子じゃ他の面子も同じか…。こいつらがいる限り、絶対死ねないな…。と、俺はそんな事を考えていたのだった。

……………。

……………。

……………。

「ここ…奈々美の神社だよな？ 俺、どのくらい寝てた？」

「…4日間です」

霞が落ち着いてから、俺は現在の状況を聞いた。

あれから”鴉”は撤退。俺は重症で意識を失っていた、と…

「…また、仕掛けてくるでしょうか？」

霞の心配は、どちらかというところ”また俺が無茶をするかもしれない”といった類のものだろう。

「さあな…ただ、亮と美里が1人追い払ったんだ。そう簡単に仕掛けてはこないと思うが…」

俺は霞からトツポの箱を受け取り、一本口に啜える。…うん、旨い。

「…ま、今は他の連中に復活宣言しとかないとな。霞、奈々美を呼んで来てくれるか？」

霞はコクリと頷くと、部屋を出て行った。

「…いい”家族”に恵まれてるな、俺は…」

俺は、誰にでもなく呟いた…

Another Side

「幻。お前までもが失敗するとは予想外だったな」
闇の堕ちる空間。

そこには、閃と幻。そしていくつかの人影が佇んでいる。

「予想外だったのはこっちよ…アノ子。もう少して殺せそうだったのに、ホント残念」

幻の口調はいつも通りだが、やはりどこか悔しそうに見える。

「まあまあ。あれは幻の失言が原因でもあったんだしね？ あんまり悪乗りしちゃだめだよ？」

子供っぽく、若い男の声が響く。

「…見てたの？」 召^{しよ}」

「そりゃあね。…それにしても意外だったのは
”召”。そう呼ばれた少年は閃の方に視線を移す。」

「閃が振り返り討ちだったってことかなあ」

「…」
「相手は未熟な霊能力者2名だったのだろうか？ 油断したか？」

男の声が響く。

閃は何も答えず。ただ眼を閉じて沈黙していた。

「…どうしたの？ 閃」

幻はそこにいつもと違う様子を感じ取ったのか、声をかける。

「…藤原 亮」

閃は短く、低く呟いた。

「…？ 相手にした彼の名前かい？」

召は、閃に問う。

「…奴とはいずれ必ず決着をつける。…必ずだ」

閃はそれだけ言うと踵を返し、暗闇へと姿を消した。

「…アララ、火が点いちゃったわね」

幻は呆れたように呟く。

…闇夜では、人知れず”黒き翼”が月明かりを覆い隠してい

た…

Another Side Out

二十九ノ話 「夜明ヶ」 (後書き)

更新遅れて申し訳ありませんでした。

最近「Hear ts」含め、感想やお気に入り登録が増えてきて嬉しく思っております。

こんな作品でも応援していただける方がいるのなら幸いです。

今後とも、よろしくお願いいたします。

三十ノ話 「球遊ビ」 (前書き)

”非日常”から”日常”へ。

学校では毎年恒例の行事が目前まで迫っていた。

熱気に包まれるクラスの連中をどこか冷めた目で見ていた俺だが、
今年は去年よりも張り切る事になりそうだった…。

三十ノ話 「球遊ビ」

「来週は球技大会です」

帰りのHR。我がクラスの担任はそんな事を言い出した。

…いや、去年もこの時期だったから唐突でもないんだけどさ。

零命高校は自由な校風…つまり、こういったイベント事も節度と予算さえ守れば大抵はOKされてしまう。

生徒会が中心となつて、教師陣は基本的に生徒に一任 故に、零命高校は毎年何かとイベントが多い。

…で、去年に引き続いて来週は球技大会…と。まあ夏の定番だな。担任の言葉でクラスの連中は大いにヒートアップしていた。

「暑苦しいな…」

俺と晃はそれをどこか冷めた調子で見る。

基本的に俺も晃もそういうことで張り切るタイプではないからだ。

「今年もクラス対抗と”団体対抗”の2種類だ。団体対抗参加者は予め申請しておく事。いいな？」

…団体対抗とは、クラスがチームとなつて競い合うのとはまた別に、それぞれ好きな人同士でチームを組んで競い合う競技のことだ。クラス対抗と違って自由参加な為、チームの数が少なければそもそも中止となつてしまうのだが…元々この学校は生徒数が多いため、今まで中止になることなく毎年の恒例となりつつあった。

「球技大会よ。相当張り切ってるみたいよ？」
「…あー」

なるほど、それで理解した。
今まで依頼部にはこういう体育会系がいなかったから、何とも新鮮だ。

「うおっしやあああああああ!!」

ブウン！ ブウン！

とりあえずお前は危ないから室内で素振りをやめろ。

「篠原も聞いてるんでしょ？ やる気は…ないわよ、ねえ？」
「失敬な」

俺は前に進み出て、珍しく晃も加わって全員集合している各々に呼びかけた。

「来週の球技大会。やる気ある奴はいるか!？」

…。

「私…運動はちよつと…」

「…興味ありません」

「僕は暑苦しいのは苦手なので」

「当然ながら俺も疲れるのは嫌だ」

…。

「アンタらねえ…」

俺達の態度に呆れて顔を覆う美里。

「オレはやる気全開だぜ！！」

ブウン！！

お前もうキャラ変わってるぞオイ。

「そういう美里はどうなんだよ？」

「私も運動は得意な方ではないけれど…」

そう言っただけで勝手に視線を逸らす美里。

まあ、気持ちは大体俺達と同じなのだろう。

…まあ、簡単に言ってしまうと、ただでさえ普段化け物とかとド
ンパチやって疲れてるってのに、こんなトコで体力を使いたくない
ってのが本音だ。

「亮は元気だねえ…」

「まあ、これしか取り柄が無いからな！」

さて、俺達は当日どうしたもんか…。

「まあ、適当に俺達は手を抜くのでしょうか」

うん、それが無難だな。

下手に”いつもの調子”でやると、超運動能力で一躍クラスの人気者。運動部から引つ張りだこなんて状況にもなりかねない。

「団体対抗も出る気はないの？」

ふと、美里が思い出したように尋ねる。

「今までは4人だったしな。今年は6人だが…人数が中途半端だろ」

そういえば、俺達はチームに誘われる事はないが、この2人はどうなのだろう？

「私は特に誘われてないわよ？」

まあ、美里は今まで平凡街道まっしぐらだったからな。特に運動面で目立ったこともないのだろう。

「じゃあ亮は？」

「あー…そっぴや何人かに誘われたっけかなあ」

バットを振りながら思い出したように言う亮。

やっぱりか…まあ亮は見ての通り運動タイプだもんな。ある程度ご指名があるのも頷ける。

「…で？ どうか入るのか？」

俺の問いに、亮は「うーん…」と唸った後

「みんなが出ないならどうっか入るけど…オレはどうせなら”依頼部

”で何かに出たいかなあー…なんて
と、独り言のように呟いた。

…” 依頼部で”。ねえ…。

「確かに、学生生活の思い出にはなりそうですよね

亮の言葉に笑顔で頷く奈々美。

まあ確かに、この面子で何かをやるといっても悪くはない。

「じゃあ少し考えてみるかね…お前らも異論はないか？」

俺の問いかけに、他のみんなも揃って頷いた。

…しかし、この人数で出られる競技と言ったら…。

「えー来週の球技大会の件だが」

翌日のHR。担任の言葉に俺は耳を傾ける。

何だ？ 中止にでもなったのか？

「今年はどうやら入賞者に賞品が用意されているらしい」

賞品 その言葉にクラスの連中は一気に盛り上がる。

「おおっ…熱気が…」

俺と晃はこの地球温暖化を促進し兼ねない程の熱気に若干引いていた。

一応上位何クラスかに賞品があるそうなのだが、所詮は学校行事の賞品だ。大したものでもないだろう…と、思っていたのだが。

「で、6位がお菓子の盛り合わせ1ヶ月分、だそうだ」

…ん？ お菓子？

俺のT^{トップ}センサーが反応する。

「先生！ 質問があります」

俺はすかさず挙手をする。

「ん…？ どうした、篠原？」

「トップは…そこにトップは含まれているのですか…っ!？」

「あ？ …あーなるほど」

普段からトップを口に啜える俺を見て、その質問の意味を悟ったのだろう。担任は手に持ったプリントに目を通す。

…。

「…あー。あるみたいだな。トップ」

「なん…だと…!？」

それだけ聞ければ十分だった。

……。

……。

…。

「というわけで、俺は球技大会で6位を目指す！」

ブウン！ ブウン！

その日の放課後、部室で素振りをする亮　　の隣で、同じく素振りをする俺の姿があった。

「…何があったのよアンタ」

「…馬鹿ですか？」

なんか後ろで冷たい視線を送る美里と霞がいる気がするが、そんなものはどうでもいい。

「…1位とるより難しくないですか？　6位って…」

全くもってその通りだが、俺はトッポのためにも絶対に6位を目指させてもらおう。

既にクラスの連中にはトッポのみ俺が独占する許可を得た。

最早迷いは…無い！

「張り切るのは結構だけれど…団体対抗の競技はどうなったのよ？」

「ああ、それならもう選択肢が無い」

…と言つのも、そもそもこの人数で出られる競技が限られているのだ。

「この人数だとバレーかバスケだが…バレーよりバスケのが勝算が

ありそうだからそっちにしようかと思ってる」

「バスケだと5人だが…試合に参加するだけが戦いではない。

「霞は情報収集や分析担当だな。ウチの司令塔役になってもらう」となる」

「…異論ありません」

俺の提案に霞は頷く。

これで試合に参加するのは5名。人数は揃った。

「一応そんな感じでいこうかと思うんだが…どうだ？」

「構いません。頑張りますね！」

「まあそれなりには働きましようか」

「よし。優勝目指すぞ…！」

「うん。いいんじゃないかしら」

みんなは揃って頷く。…うん。たまにはこういうのも悪くない。

「じゃあ申請しとくとして…チーム名はどうするよ？」

団体対抗は申請時にチーム名を決めておく必要がある。

ネタでウケを狙うのもよし。真面目なものもよし。無難だったり地味だったりもまたヨよし、だ。

「普通に”依頼部”でいいんじゃない？」

「そうですね。僕たちという”団体の名前”ですから」

なるほど、愚問だったようだ。

最早”依頼部”という名前は、ある意味では”部の名前”ではなく”俺達の名前”になりつつある。

多分それは学校を卒業して、”部”という概念が消えてもそんなのだろう。

そう思うと、なんだか不思議と可笑しくなってくる。

「…うん。じゃあ”依頼部”で申請してくるよ。…どうせやるなら、とことんやってやるっぜ」

…今年の球技大会は、何とも楽しくなりそうだな。

そんなことを、俺はぼんやりと考えていたのだった…

三十ノ話 「球遊ビ」 (後書き)

他の小説を読んでみて良く見られる”改行”を駆使した書き方に試験的に挑戦。

今までの書き方と大きく変わったので、読んでくれる方と同じくらい自分でも違和感を感じています。

ただ、前のように文章を詰めて書くよりは読みやすいと思うのですが…どうでしょうか？

その辺の感想頂けたら嬉しいです。

三十一ノ話 「日差シノ下デ」 (前書き)

照りつける真夏の日差し。

その手には金属バット。…何ともありがちな組み合わせだ。

去年とは全く違う真夏の風景に、つつい俺も浮かれてしまっているのかもしれない…。

三十一ノ話 「日差シノ下デ」

ジリジリと焼けるような日差しの中、俺はゆっくりと、しかし確実に歩を進めていた。

その手には金属バット。その眼で向こうにいる相手　　ピッチャーを見据え、対峙する。

「「「」」」

交差する視線。それは長かったのか、それとも一瞬だったのかはわからない。

「…っ！」

シュツ！！

やがて繰り出される剛速球。なかなか早い。流石は野球部だ。

…だが！

「ボールを相手のスタンドにシュウウウウッ！！」

ガキイイイイン！！

超エキサイティン！！

俺はバットを大きく振り、打たれた球はものすごい音と共にスタンドの向こう側へと消えていった。

ワアアアアアア!

どつと沸き起こる歓声。…と、黄色い声。

「うしっ！」

俺は声援を送る相手に答えながら、ホームを一周してベンチに戻る。

相手チームの連中は球が飛んでいった方向を見つめ、未だ呆然としていた。

…無理もない。今俺達が相手にしているのは運動神経のいい奴ばかりが揃った”優勝候補”なのだ。

え、点数？ 今3回裏で13 - 0だが？

…言うまでも無く俺達の圧倒的なリードだった。

今になって気付いたのだが、ウチのクラスにはあまり運動神経のいい奴がいない。

球技大会のクラス対抗は男女別で、俺達男子はソフトボールだった。…まあ定番だな。

トーナメントの並びはくじ引きだったのだが、俺達C組はいきなり優勝候補のE組とぶつかる事になり、クラスはもう諦めムード全開だった。

ところがどつこい俺はトッポのためにも6位を目指さなければならぬのだ。

ちようど6位が確定するまでは負けられん、と俺は脅威の運動能力を発揮。…まあ、戦つてるときぐらいの運動能力なんだが。

まあ、そんな感じで”俺達なんぞ余裕だぜ(笑)”とでも言わんばかりだったE組の連中を圧倒してやったのだった。

だがまあ、所詮ソフトボールは団体でやるスポーツだ。俺1人が頑張ったっていつか限界が来る…と、そう思っていたのだが、俺の意外な活躍にメンバーの士気は急上昇。

俺以外のメンバーの働きもあって、結局俺達は優勝候補のE組を完膚なきまでに叩き潰す事が出来てしまったのだった。

「篠原つて、まさかここまで動ける奴だとは思わなかったよ!」

「いつも寝てばかりだったけど…篠原君カッコいい!」

「流石です俊樹君。相手チームとの裏取引は上手くいったようですね!」

「オイそこ! 誤解を招くような嘘をかますな! ていうかお前絶対晃だろ!? オイ!」

…まあ、なんだか俺の印象が大きく変動してる気もするんだが…
少しくらいならいいだろ。

…
…。
…。

「オラアアアアア!」

ガイイイイイン!!

ものすごい金属音と共に、ボールは遙か彼方へと飛んで行った。

「よっし、いい感じ!」

ボールを打ち返した主

亮は、満足そうな表情を浮かべなが

らホームを一周している。

試合を終えた俺達C組は次の試合まで休憩。特別することもなかった俺と晃は、他の競技を観戦していたのだ。った。

「さすが亮だな。あんなだけ熱心になってただけのことはある」
「ですね。やはり次の相手はB組でしょうか？」
「あー。そうか」

トーナメントの並びでは、このまま亮たちB組が勝てば、次は俺達C組とぶつかる事になる。

…まあ、この様子だともう確定的だろうが。

でもなあ…E組に勝ったから、もう次で負ければ6位なんだよなあ…。
トツポのためとは言え、身内相手に手を抜くってのはなかなか気が引ける。

「今年は疲れそうですね、俊樹君？」
「…サラッと”自分は働かない宣言”するなよ、お前…」

…まあ、さつきもほとんど働いてなかったけどな…。

…。
…。
…。

「あ、篠原に久遠君。そっちの試合は終わったの？」

体育館の2階。ギャラリー部分には美里がいた。俺達はグラウンドでの観戦を一通り終え、女子達の競技が行われている体育館へと移動していたのだった。

「おう。そつちも終わったのか？」

俺は手を上げて美里に答える。

体育館では女子達の競技であるバレーが行われている。今は…奈々美のいるA組と霞のいるF組の試合か。

「坂本さん！」

A組の女子が叫ぶ。

ボールは奈々美の頭上から緩やかに落ちてきていた。

…あのぐらいなら落とす事はないだろう…とは思っただが。奈々美は慌て、ワタワタやっついて対応できそうにない。

ボスン！

「あつっ！」

…脳天直撃。

「ちょっと坂本さん。大丈夫！？」

「うう…痛いですう…」

…やっぱり奈々美は奈々美だった。

あまりにも予想通りな展開に、俺と美里は揃ってため息をつく。

「男子はソフトボールよね？ 篠原達は…まあ、勝ったんでしょ

けど」

「もちろんだ！」

俺は親指を立てて答える。

6位を取るまでは負けられんよ。全てはトップのためだ。

「亮たちは？ 見たんでしょ？」

「ええ。あの様子だと勝利は確定でしょうね」

晃の言葉に俺も頷く。

美里はをれを聞くと満足そうに頷いた。

…やっぱり何だかんだで気にはしているらしい。

「そついや、お前のところはどうなんだよ？」

今まで話に出てこなかった美里のクラスの様子を聞いてみる。

「勝ったわよ？ 次は今やってる試合の勝った方となのよね…。いきなり友達とぶつかるのは複雑だわ…」

…なるほど。向こうもこっちと似たような状況らしい。

「私たちはやる以上、全力だけど。篠原はどうするの？ 次負ければ6位だったんじゃないかしら」

「…まあな」

…次の相手が相手だけになあ…。

「…篠原。ひよっとして迷ってる？」

「俊樹君は何だかんだで熱い性格ですからね」

「へえ。そうなんだ、ちょっと意外ね」
「おい。そつちで適当な事言いすぎだ」

悩む俺の横でヒソヒソと話をしている2人を制する。
…しかしまあ。どうしたもんかなあ…。

「悩むのもいいけれど。団体対抗の方も忘れないでよ？」
「…わかってるっての」

美里に指摘されて、気を取り直す。

…団体対抗かあ。そついやそつちもあるんだっけか。

「悩みどころですよねえ。好物を取るか、友情を取るか」

「…馬鹿にしてるだろ、お前」

「ええ、少し」

「この野郎」

…まあ、こうなった以上、選択肢なんてあつてないような物なんだけござ。

……。

……。

……。

次の相手は案の定、亮たちB組に決定した。

俺達はグラウンドで整列する。…なぜか目の前に亮がいた。

「よっ！ お互い頑張ろうぜ！」

「…お前なあ。忘れたのか？ 俺はトッポのために6位が目標だったんだぜ？」

一応、やる気満々の亮に釘をさしておく。

…が、亮はそれを聞いてもなんともなさそうに

「別に構わねえよ。どっちにしる手加減ナシだからな！」

そう言って、拳を突き出してきた。

…ハア。ホント、こういうタイプは今まで依頼部にいなかったから新鮮だ。

やがて、試合開始と共に散らばる俺達。

「篠原」

「…あん？」

俺達は最初、守備だ。

俺は自分のポジションに移動しようとしたところ、不意に呼び止められた。

こいつは確か…ピッチャーやってた奴か。

「さっきの試合見て思ったんだが。ピッチャーは篠原がやるべきだ
と思うんだ」

「…はい？」

…まあ確かに、この中じゃ運動能力はずば抜けて俺が高いのだから。…ライトで悠々と笑みを浮かべている晃を除いて。

だからピッチャーを任されることも別におかしいことじゃあないのだが…。

…んな責任重大な役目を任されてもなあ…。

ピッチャーが俺なら、わざと負けるのも簡単と言えば簡単だが…。

「…どうなっても知らんぞ?」

「ああ、頼む」

…ハア。なんだか妙な展開になってきた。

…
…。
…。

「アウト!」

審判の声が上がる。

現在2アウト。流石に全部フォアボールとかはあからさま過ぎるので適当に手を抜いていたのだが、案外周囲の奴らのフォローが上手く、相手を無得点に抑えていた。

「…ハア」

こづつという展開はごつも苦手だ。

さつさとヒットを打ってくれりゃいいものを…。

「…つと!」

ピュッ!

俺は投球する。

キン!

「…お」

ボールは小気味のいい音を上げて打ちあがる。
結構高い。あれは取れないだろう。

「セーフ！」

審判の声。

初ヒットで相手チームは大いに盛り上がっていた。

…ふう。さて、次は

俺が思考しながらバッターボックスに振り返ると

「いけえ、藤原！ 2点先取だ！」

「おう、任せとけ！！」

バットを構える亮がいた。

…しまった、亮は4番だったのか。

「…」

「さあ、こい！」

やる気全開の亮は、強い視線でこちらを見据える。

…ハア。やりにくい。

「…っ！」

ヒューン！

「…え」

俺は投球する…が、それは亮にとって予想外のものだった。

「ボール！」

思いつきり敬遠球。

ここは俺の気分的にも作戦的にもフォアボールのが賢明だ。そう思った俺は、次々とボールを連発していく。

「俊樹！　いくらなんでもそれはねーだろ！」

「ええい。敬遠とは卑怯な！」

亮も相手チームも流石に不満げだ。

…しかしなあ、ここで打たれるのも困るんだよ。

俺は、最後の敬遠球を投球する。…が。

「…くそっ！」

ブウン！

「な…」

「ストライク！」

審判の判定はストライク。

…当然だ。亮は敬遠球を強引に打とうとバットを振ったのだから。

「おいおいおい…」

「言ったる。手加減ナシだ！」

再びバットを構える亮。

…あーもう！ くそ！

…そこまでされて、俺の中の何かが、カチリと音を立てたような気がした。

「上等だ！」

ビュン！

俺は投球する。敬遠なんかじゃない。今までの手を抜いた球でもない。相手を負かす気全開の本気球だ。

「…お。そうこなくっちゃ、なあ！！」

キン！

俺の変化に少し驚きながらも、亮は満足そうに頷き、バットを振る。

金属音と共に球は打ちあがる、が、それは大きく横に逸れてファールとなる。

「上等だこの野郎。こうなったら完膚なきまでに叩き潰してやるからな…！」

…うん。完全に火が点いていた。

こうなると止まらなくなるのは、自分でもよくわかっていた…のだが、もうどうしようもない。

「よっし。やってやるぞ！」

ブウン！

一度バットを大きく振ると、亮は再び構える。

「…っ！！」

ビュン！

俺はそれを確認すると、再びど真ん中に投球する。

…が。

「よ…っしゃああああああつ…！！！」

ガイイイイイイイン！！

フルスイングで打ち返された球は大きく弾き飛び、そして場外へと消えていった…。

「ホームラン！」

「よっしゃあ！！！」

大きくガッツポーズをする亮。…と、盛り上がる相手チーム。

…くそ、打たれちまったか。

だが、不思議と後悔はしていなかった。

「…こうなった以上。勝ちに行くしかないわなあ…。」

火が点いた自分に少し後悔しながらも、俺は腹を括った。

…何、トツポは亮のクラスから分けて貰うさ…。

……。
……。
……。

「ゲームセット！」

審判の声と共に試合が終了する。

結果は6 - 8。残念ながら俺達の負けだ。

同点まで追いつきもしたのだが、結局最初の亮のホームランが決め手となってしまっていた。

「いい勝負だったぜ！」

「……まあ、悪くなかったよ」

俺と亮は握手をする。

「ここまでできたら、負けんじゃねえぞ？」

「当たり前だろ！」

親指を立てて亮は答える。

「……うん。目標の6位は達成できたし、俺以外の連中も満足そうだし、結果オーライかな……」

クラス対抗は一段落したが、まだ団体対抗もある。

俺達が勝ちに行くのは、その時にしておくでしょう。

不思議と敗北感は湧いてこなかったし、十分納得のいく試合だったと俺は思っている。

「……今年は張り切りましたねえ」

「お互い様だろ」

何やかんやで晃も俺と同じだと思う。

「次は団体だ。今度は優勝目指すぞ」

「…そうですね。このまま負けっぱなしというのも不本意ですし」

晃も珍しくやる気のようにだった。

「…とにかくにも、俺達が”優勝”できるのは団体対抗までおあずけということらしい。」

まあ…それまでは亮たちの応援でもするとしようかな。

…こうして、俺達C組のクラス対抗競技は終了したのだった…。

三十一ノ話 「日差シノ下デ」 (後書き)

もうすぐクリスマスやら年末ですね。

学校のゴタゴタも一段落終え、また余裕があるうちにストックを増やしておこうと思います。

感想等、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7120k/>

表と裏 紅の月

2011年11月27日16時50分発行